
ノクターンブルー ～蒼月夜想曲～

中山愛望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノクターンブルー ～蒼月夜想曲～

【Nコード】

N9645R

【作者名】

中山愛望

【あらすじ】

愛する者を失った人々が やがて心を再生してゆく物語。 今、悲しみの中にいる世界の誰かのために 心を込めて綴られた物語。 神戸が舞台です。ピアニストを目指す少女・朋子のもとに、裕晶という美しい少年がやって来るところから、お話は始まります。

【SmileJapan】参加作品

001（前書き）

普通の小説の体裁ですので、構成の関係上、
物語が動き出すまで、

原稿用紙換算50枚（006話）くらい、かかるかもしれませんが

……

愛望 拝

世界には悲しいことが満ち満ちていて、神様なんか　きっと居ないんだって、そう思ってしまうことがある。

たくさんの人が亡くなって、それは誰かにとってかけがえのない誰かで、でも夜空の星々は何も変わらず密やかに瞬いて　時間は、日常という名前で過ぎ去ってゆく。

自分にとって、その出来事の意味とか、そんなことはつきりと捉える暇さえ与えてくれない。世界は色を失い　ただ過ぎ去ってゆく。

何が言いたいかって？

なんだろう？

『想いは、簡単には消えない』ってことかな？

まあ私も、そんなことをぐるぐる考えながら、整理してる途中なんだと思います。うん……きっとそう。

えーと『こんにちは』ですか？　それとも『こんばんは』かな？

こうやって、あなたにお目にかかる機会が得られたことを本当に嬉しく思います。

唐突に語りかけてしまったので、呆氣にとられていませんか？

私はあなたに話しかけています。

そんなに身構えないでくださいよ。これからしばらくの間、あなたにお話を聞いて頂きたいと思っているのですから。

「情けは人のためならず」でしたっけ　いやちょっと違うな……。「袖振り合うも他生の縁」とか、そういうことわざってありましたよね！

うん、きっとソレです。これも何かの縁だと思って、諦めて

聞いて下さいね。

そうそう、私のことはトモって呼んでください。トモコだからトモ、ちよつと安易かなあ……ま、いいや。

私のフルネームは吉本朋子。漢字では、月が二つの「朋」に子供の「子」と書くトモコですね。私が中学二年生の頃から、お話を聞いて頂くようになって思っています。

その頃の私は、クラスの男子とは一言も口をきかないような女の子でした。

毎日ピアノの技量を上げることに必死で、男子に心を惹かれるような余裕がなかった、ということもありましたが、小学校4年生の頃に「臭い、ブス」とかクラスの男子に、からかわれて、いじめられていた時期があったのが大きな要因だと思います。

まあ『イジメ』と言っても、靴を隠されたり、机にゴミを入れられたりとか　そんな他愛のない奴ですね。私の父が経営している事業について揶揄したのでしょけど、その言葉がショックで、そんな言葉を跳ね返すことができない自分が情けなくて、心を閉ざしてしまったのです。軽いトラウマって奴ですね、きつと……。

今は分かるんです。

クラスの男子に、『子供っぽい残酷さ』みたいなものがあったことは事実なんでしょうけど、私が「はいはい　あんたら、そんなに私のこと好きなん？」とやり過ぎることができたら　それくらい大人だったら、どうってことなかったってことが。

でもその時の私には出来なくて、闇雲に勉強をして、近くにある国立大学の付属中学校に入学しました。逃げちゃったんですよねトモは、情けないことに。

中学に入ってから、全くそんな程度の低い意地悪をされることはなくなりました。でも自分の容姿に自信がなかった私は、男子と

は壁を作り、クラス的女子だけと当たり障りのない関係を築きました。勉強は誰にも負けないように頑張りました。親しい友人も作らず、ブスで成績が悪かったら、またいじめの標的になるかもしれない。そう恐れていたのかもしれませんが。

嫌なことはすぐに忘れちゃうので、そこら辺は曖昧ですけど。

要するにあの頃の私は、ピアノ、両親、両親と親しい人々、自分の半径9メートル程度の世界で生きていました。

あれ……なんか鬱な展開かもしれない、とか身構えないで下さいよ。この物語は、トモにとって、ずっと待ち続けていた幸福な物語なんですから！

これは短い恋の物語。

葉桜から零れ落ちる陽光に包まれ、暖かい日なたの香りを感じながら微睡むように見た、私だけの恋の物語。

私は風が嫌い。

咲き乱れる桜の下で風が吹く時、風は私の底に沈んでいる、淀んだ藍色の虚無を浮かび上がらせる。そして淡く色付いた花びらと一緒に、私をどこかへさらってゆこうとする。

私は雨が嫌い。

天蓋を覆う灰色の雲　梅雨の長雨は、私が自分の力だけでは、どこにもゆけないと打ちのめそうとする。やがて自分がいったい何処へゆこうとしていたのかさえ、分からなくさせようとする。

私は小鳥たちのさえずりが嫌い。

小鳥たちは、人々に出会いの季節の訪れを告げる。そして大仰に、恋の素晴らしさについて歌い続ける。

私は花が嫌い。

可憐な花たちは、自らの美しさを知り尽くしている。そして無邪気に風に揺られながら、巧妙に、あらゆる醜いものへ美を誇示する。私は彼女たちの姿に目を奪われながら、ただ呆然と立ち尽くすしかない。

私は月が嫌い。

九月の夜空に満ちた月は、神戸の海を琥珀色に照らし、私をひどく憂鬱にする。夜空にたった独りぼっちの月はどこか不自然で、寂しそうに輝く。それでも、私は誰も求めてはいない。

私は私の顔が嫌い。

目ばかりとても大きくて、鼻筋なんてどこにもない。唇はルージユを差しているようにいつも真っ赤。耳は子象みたいに大きく、色も少し浅黒い。どの顔の部分も互いにいがみ合い、まるで喧嘩をしているよう。

私は音楽だけを聴いて生きてゆきたい。

ピアノを奏でながら、いつまでも普遍的なものに触れていたい。

私はピアノになりたい。

ピアノから溢れ出す音色になって、そのまま大気に溶けてしまいたい。

心を奪われた愚かな人魚姫が、水の泡になって消えてしまっ
たみたい。

あの日、私は父と母が泣いている姿を初めて見ました。
忘れもしない、日付は2月5日。

中学校から帰宅すると、リビングキッチンにあるテレビの音が玄関を突き抜け、道路まで聞こえるくらいの大音響で溢れ出していました。

『ちよつと、一体何事なん!』

驚いて部屋に駆け込むと、母は今にもＴＶに抱き付きそうな勢いで泣き叫び「ごめんね瑠璃、ごめんね」　「という言葉を喚き続けていました。父も仕事場から急いで駆けつけてきたのでしよう、紺の作業服のままで母の肩を強く抱いていました。鼻水を垂らし、目を充血させた父は涙をフローリングの床にぽと落とす、小刻みに肩を震わせていました。

両親がこんなに取り乱している姿を見たのが初めてだった私はすっかり気が動転してしまい、

「どうしたん母さん!　お父さんまで!　一体何があつたん!」と、二人に負けないくらいの大声で喚いてしまいました。

でも母には私の声が全く届いていないのか「ごめんね、ごめんね」と繰り返しながら泣き叫ぶばかりで、話になりません。力一杯、父の肩を驚掴みにして、上体を揺さぶりながら怒鳴りました。

「父さん!　男は決して涙を見せへんもんやなかつたん!」
私の声で、父はやつと正気を取り戻しました。

への字に結んだ唇を戦慄かせ、必死で泣き声を押し殺そうとし、無理矢理絞り出したような声を吐き出しました。

「父さんと母さんの大事な人が　瑠璃ちゃんが、死んでもうたんや……母さんの妹が死んでもうたんや……」

そこまで一息で言った父は堪えきれなくなったのか、天井を仰いで、大きな泣き声をあげました。人目を憚らない、大切な玩具を奪われた幼子のような泣き方でした。

号泣する父と母の姿を見て、雷にでも打たれたような気分でした。

『私の大切な人が泣いている』

いつも朗らかな母、そして何事にも動じないと思っていた父まで沸き上がって来たのは、たとえようのない激しい不安でした。

私は訳が分からなくなつて腰が抜けてしまい、その場にうずくまつて泣き出してしまいました。

その間もTVは高音響で「旅客機墜落・生存者は絶望的」と繰り返し、搭乗者名簿の名前をいつまでも読み上げていました。

今想い出すと少し可笑しくなるのですが、私たちは我慢比べでもするように、体力の限界まで泣きました。泣き疲れて精も魂も尽き果て、ぐったりとしてしまいました。

最初に泣き止んだのは母でした。

遣り場のない怒りをぶつけるように乱暴にコンセントを引き抜き、TVの電源を落とすとそのまま呆けたように真っ黒になった画面を見つめていました。

その光景に息を飲みました。

いつも穏やかで、天女のように微笑みを絶やさない母が、感情を剥き出しにして八つ当たりをしていたからです。

家の中は急にしんと静まり返っていました。

あまりの静けさに変な耳鳴りがして 置き時計の秒針の音が異常に強調され、時を単調に刻み続けています。

すごい音で鼻をかんであら、普段はキッチンに立たない父が、食器棚から黙って湯飲みを取り出しました。

父は丁寧な手つきでお茶を入れ、私と母に湯飲みを手渡してくれました。

黙って、しばらくただお茶を啜りました。

お茶の香りが口の中に広がり、食道をゆつくりと通って、胃へと流れ落ちるのがはつきりと分かりました。

ようやく人心地ついた頃、母はまだはつきりと焦点の定まっていない目で、独り言のようにぽつりぽつりと口を開き始めました。

「朋ちゃんにはずっと黙ってたんやけど、お母さんには双子の妹がいてたん。あんたの叔母さんやね。名前だけなら聞いたことあると思う。小説家の西埜ルリっていう人」

西埜という母の旧姓には聞き覚えがありました。西埜ルリという人の小説を手にとって読んだことはありませんでした。確かに名前は書店でよく見かけたことがありました。

そんな立派な叔母さんのことを、母は何故私に黙っていたの？

「私は自分でも信じられへんくらい、瑠璃にとってもひどいことをしたん。そのことは、いつかきつとトモちゃんにも話せると思う。でも今はただ哀しくて、こらえられへんくらい辛いん。私はあの子のことがとても好きやったん」

母はそこまで言うと言手と両手で顔を覆い、さめざめとまた泣き始めました。

電話が何かの合図みたいに鳴り始めました。

母が好きなバッハの『主よ、人の望みの喜びよ』のメロディです。緊張で、母の肩が石のように冷えて固まってゆくのが分かりました。父は大丈夫だという風に母の肩を撫でてから立ち上がり、ゆっくりと受話器を手に取りました。

「はい、吉本です」

父は身構えるような、低い抑揚のない声で応対しました。明らかに何かを警戒しているような素振りです。

「弁護士？ 弁護士さんが私にどのようなお話ですか。ええ、もちろん知っています 後見人？ 失礼ですがちょっと待ってくださいか」

父は受話器を耳から離し、私に二階にある自分の部屋へゆくように静かに命じました。鋭い、有無を言わせない目つき。

大人しく自分の部屋へ上がってゆき、CDケースからバッハの『G線上のアリア』を取り出し、ステレオで流すことにしました。無意識に、心を休めようとしていたのでしょうかね。

制服からゆったりしたパジャマに着替えベッドに腰掛けると、泣いた疲労と脱力感からか、そのまま深い眠りに落ちていました。

たゆたう　　星の海、時の流れ　　わたし、私。

夢を見ました。

切なさで泣き出してしまいそうな、懐かしい匂いの風が吹き抜けていました。

見渡す限り、豊かな実を付けた稲穂が深々とお辞儀をしている光景が広がり、無邪気な笑い声が聞こえてきます。

夜空に蒼い二つの月が、寄り添うように輝いています。

月光に照らされた稲穂は、サファイアを敷き詰めた絨毯のように煌めき、ざわめいている。

薄い蒼に輝く波のうねりの中を、二人の少年が駆けていました。

紅毛碧眼の少年が、息を弾ませて私の脇を駆け抜けてゆきました。右手には小さな木刀が握られています。

少年の瞳は、地平のずっと彼方にいる、もう一人の黒髪の少年に向けられていました。

「待ってよー！」

澄んだ高い声で叫びました。聞いたことのない言葉だったけれど、きつとそう言ったに違いないと分かりました。

黒髪の少年は振り返り、大きく手を振ってその声に応えました。

赤毛の少年はその様子を見つめ、本当に幸福そうに微笑みました。息が詰まってしまいそうなくらい綺麗な笑顔。

少年はこちらを振り返り、微笑んで私に頷き、一直線に手を振る

少年の元へと駆けてゆきました。

自分でも理由の分からない愛おしさが胸に溢れ
私は泣き出し
てしまいました。

『今の何？ てか、私なんで泣いてんの？』

目が覚めると、そこは見慣れた私の部屋だった。

なんの飾り気もない六畳の部屋。置かれてあるものはベッドと勉強机、ステレオ、楽譜が詰め込まれたカラーボックス。部屋の隅に置かれている学習机の上には、無造作に楽譜が置かれている。

『良かった。今日はレッスンの日じゃない』

そう思い出して、少し安心する。

私はどうしてたんだっけ そう、逢ったこともない叔母さんが亡くなったんだ。それから電話がかかってきた。泣き疲れて、あれから少し眠ったのね。

頭の芯が痺れているみたいに、まだ少しぼんやりしている。

ひどく喉が渴いていることに気付き、麦茶を飲みキッチンへと歩いていった。

階段を下りてゆくと、玄関には見慣れない靴が二足ある。一足は不自然なくらいピカピカに磨き上げられた黒い革靴。もう一足は私と同じサイズの、白いスニーカー。どうやらお客さんが来ているみたい。

リビングキッチンに入ると、母が私と同じ年頃の男の子を抱き締めていたので面食らった！

お笑い番組なら、きつとひっくりかえってこけちゃうリアクショ

ンな感じ。

『ちよつと、なんなのこれ!』

母は男の子の頭を撫でながら「辛かったね。寂しかったね」という言葉を、不吉な呪文のように繰り返している。まるで自分に言い聞かせているような口調。

男の子は焦点の定まらない目で、人形のように立っている。視線はリビングの先にある壁を捉え続けているけれど、それは何も見ていないみたい。

「ちよつ母さん、その子誰なん?」

少年の凍り付いた表情と母の姿を見てみると、B級ホラー映画みたいで、ちよつと異様な感じ。

「トモちゃん、裕晶君よ。瑠璃が死んでしまつて、この子は独りぼっちになつてしまつたん。だから今日からうちの家族になるん。あんたの弟になるんよ」

『おいおい、そんなこと急に言われても、ヨロシクね裕晶くん……とか言つて笑えないよフツ。漫画じゃないんだから』

母はそこまで言うと、涙を流し始めた。顔は血の気が引き、蒼白になつてしまつている。母はもともと体質的に貧血気味で、体があまり丈夫ではない。

「母さん、すごく疲れてるみたいやから、ここは私に任せて眠つて体がもたへんよ」

手を握ると氷みたいに冷たい。額へ手で触れてみたが、発熱はしていない。

男の子を椅子に座らせ、母の手を引いて寝室まで連れていった。

応接室では、父が誰かと話し込んでいる様子だ。

「朋ちゃん、弁護士さんとお父さんのために、何か出前を取ってあげて」

「うん、もう分かったから。後は私に任せて」

「ごめんね……」

ベッドの縁に座り手を握っていると、暫くして母は寝息を立て始めた。

『弟？ 弁護士？ 落ち着け私、まずは状況を把握しよう』

眠っていた間に、事態はより一層複雑なものになってる。今は、私がしっかりしないといけないみたいだね。

リビングに戻ると、男の子はこちらに背を向け、床に体育座りをして頂垂れている。

てか、椅子に座らせてたよね。まあ無理もないか、母親が死んで相当なショックを受けているのだろう。ここで首が180度回転したら、B級ホラー映画の開幕だな、と不謹慎なことを思う。

悲鳴の準備はもちろんOK。実はB級ホラーが好物だったりする。

「お腹減ってる？ なんか食べたいもんある？」

何の期待もしないで事務的に言葉を投げかけた。男の子から応答はない。

『まあここで喋ったらダメなのよ。ホラーってのは』

冷蔵庫から麦茶を取り出し、ぷはーって感じで一気に飲み干した。うん、ここは少し落ち着かねば、再度そう自分に言い聞かす。

さて、こんな時の出前は何を取ったら良いのだろう？

いくらなんでもお祝い事ではないから、お寿司はマズイよね？

それはあまりにも空気を読めなさ過ぎだよ。うん、そんなくらは私だって分かります。

無難な線で、親子丼にしておこう。無難な線ってのは、世界を生き抜く叡智なのよ。

お！ これいいかも。朋子語録に加えよう。後でメモしなきゃ。

母が寝込む度に出前を取るお店に電話をかけ、親子丼を5つ注文した。時計を見ると午後7時半を少し回っている。

冷蔵庫から、宮水を取り出して電気ポットの中に注ぎ、お茶の用意をした。母は相当取り乱していたから、おそらく弁護士さんにお茶を出す心のゆとりなどなかったに違いない。私は食器棚から、とっておきの玉露を出した。

「裕晶君もお茶飲む？ 少し落ち着くよ」

応答がないのを指差し確認してから、お風呂の掃除へとゆく。

こんな時だからこそ、全て片づいた後にお風呂に入ってリラックスすることが必要なのよ。緊急事態だから、大まかに洗っただけで給湯しておく。

キッチンへ戻り、湯飲み茶碗を暖めてから、少し濃いめのお茶を入れた。

「お茶入れておいたから飲んで」

男の子にはやはり何も聞こえていないようだ。

お茶をしずすと用意しながら、これが演技だったらかなりの才能だなと、また不謹慎だと思う。明日にでも、呪いのDVD系ホラーの主演が張れるに違いない。ん？ちょっと見たいかも。

少年は肌理の細かい白い肌で、体つきはほっそりとしている。母親の一族に共通する、血統的特徴なのだろう。髪型はいわゆる坊ちゃん刈りっていうのかな。整った顔立ちで綺麗な男の子だ。

『残念ながら、あたし弟萌え属性とかないのよね』

私は湯気の立ったお茶を、うちで一番上等な漆塗りのお盆に乗せて、応接室へ運んだ。

「失礼します」

小さくノックしてから声をかけ、応接室へと入った。

この応接室は、父が事務所を建て替える前に大切な仕事の話をする時に使っていた部屋で、壁は防音構造にしてある。床はフローリングになっていて、あるのは黒い革張りのソファと低いガラスの机、そしてピアノだ。

窓からは、母が「綺麗に咲いたね」とか「元氣出なさい」とか、毎朝話しかけながら育てている花壇が見える。事務所を建て替えてからは、この部屋を来客用に使うことは滅多になくなった。母のさやかな夢の一つだった、ピアノの練習部屋という当初の目的に戻ったのだ。

父は小さいながらも神戸市内で廃棄物処理業の会社を営んでいる。簡単にいえばゴミ屋さんだ。

パッカー車で、スーパーやホテル、飲食店の出すゴミを回収するのがお仕事。本当のことを言うと、詳しい内容はよく知らない。水色のパッカー車は、たまに街で見かけるけれど。

部屋には、ロマンスグレーの髪をきつちりと七三に分けた初老の紳士が、沈痛な面もちで座っていた。透明なガラスのテーブルの上には、印刷された文字でぎっしりと埋められた何十枚もの書類が、

アイロンをかけたように「ぴん」と積まれている。

「粗茶です。母が取り乱して何もお構いできず、申し訳ございませんでした」

お茶を置く適当なスペースを捜す素振りをしながら、書類の文字に目を走らせた。一目見ただけでは、何が書いてあるかさっぱり判らない。まあじっくり読んでみても、多分判らないよね。弁護士さんが、私の視線を注意深く観察していることに気付き、私はにっこりと笑った。

『スマイル、これも生き抜く叡智。朋子語録の前の方にあります』

「ああ、娘さんですな。どうも初めまして、弁護士の林です」

林さんは卓上の書類を、ソファーに置かれたジュラルミン製のスーツケースの上に、注意深く移動させた。手入れを入念に行いながら、長年愛用していることが一目で分かる。零さないように、慎重にお茶をテーブルの上に置く。

「これからお世話になります。朋子と申します」

「いえいえ、こちらこそ。しっかりしたお嬢さんだ。中学2年生とは思えないほど、落ち着いていらっしゃる」

淀みない標準語だ。関東からやって来たのかな？ 関西人が標準語を使う、胡散臭さが少しもないよね。

「お茶の入れ方も上手だ」

林弁護士は、にこやかにお茶を啜りながら言った。なんかドラマに出てくる紳士的な弁護士っぽいよ、この人。

地味だけれど上品な紺のスーツ。おそらくこれはかなり高いとみた。着こなしがとても自然だから、おそらく良家の出身かも。少なくとも、お金には不自由していないように見えるね。

「良いピアノですね」

林さんはアップライト・ピアノをまじまじと見つめながら言った。
「お弾きになられるんですか？」

『うわ、自分の標準語に鳥肌たちそう』

華やかな笑顔を作って尋ねた。ちょっと自分でも猫をかぶり過ぎかな、とは思う。しかし上手いピアノ弾きに悪人はいない、というのが私の持論である。だって朋子語録の前の方にあるし。

「親の見栄で習わされた程度の腕前でして、お恥ずかしい」

温厚だか芯の強そうな人だね。瞳には悪意を秘めていない者だけが持つ、濁りのない輝きがある。人を安心させ、信頼させる柔和な雰囲気は、きっと弁護士の中でも一目置かれていた人なんだろう。信頼に足る人物だと私は判断し、安心した。

「朋子ありがとう。もう自分の部屋に戻って、休んでいなさい」

父は微かな緊張を孕んだ声で静かに言った。お父さん、いまだに法曹関係者は苦手なんだね。ぎこちない標準語を聞いて、おもわず噴き出しそうになるのをこらえた。

「親子井やけど出前を取っておいたから、もうすぐ来ると思います。母さんは眠っているから、お父さんが先生に食事をお出しして。それでは失礼します」

好意の籠った瞳で、林弁護士に微笑んだ。

口には出さないけれど、『少し不器用なところがある父ですが、根は優しい人なんです。お願いします』という微笑み。林さんも、『分かりました』という風に微笑み返してくれた。

む、なんかアイコンタクトが成立してるし。近年、稀に見る素晴らしい大人だと私は感心した。

「ああ、朋子さん」

林先生が私を呼び止めた。柔らかいけれど、とても重要なことを言おうとしている表情だった。

「私は弁護士である前に西埜ルリさんの友人であり、彼女に何かあった場合、法的に裕晶君を守ることを託された者です。残念ながら現状知り得る情報では、ルリさんが生存している可能性は非常に低いと感じています。よって全ての事務的な手続きは私が行い、裕晶君が成人するまで社会的に彼が不利益を被ることがないよう、全力を尽くします。しかし私は、彼の心を救うことまでは出来ない。家族として彼を暖かく受け入れてあげて頂きたい。どうか、これから裕晶君を宜しく御願います」

林さんは姿勢を正し、深々と頭を下げた。私は小さく頷いて応接室を出た。

『うん、少しは状況が飲み込めたかも。悪い冗談とかそういうのではないみたいだね』

裕晶は（やっと私の中でホラー作品の登場人物ではないとインプットされた）、キッチンの隅で膝を抱え込むようにして座り、頂垂れたままだ。

「裕晶君、少し寒い？」

立たせて二階へ連れてゆこうとして近寄ると、ソックスに液体が染み込み、飛び上がりそうになった。お茶でも零したのだからと液体を確認すると、アンモニア臭がする。水たまりは裕晶の股間を中心に広がっている。

『ありえない。マジありえない！』

「ちょ、あんた何考えてんの！ トイレくらい自分で行ってよ！」
不甲斐無さに腹が立って、思わず裕晶の頭をぶってしまった。鈍い音がしたけれど、無反応。ただ俯いてじっとしている。なんだかぶった自分の方が胸が痛んだ。人をぶつのって、とても哀しいものなんだ。ごめんね……。

「その　なんていうか、叩いたりしてごめんなさい。ちゃんと聞いてる？」

両手で裕晶の顔を挟み込み、自分の顔を近づけて凝視した。ぞつとした。裕晶の目から、およそ人間的な感情のかけらも見つけ出すことが出来なかったから。その目には悲しみも怒りもない。瞳は力を失い、ただ虚空に向けられている。時折、思い出したように瞬きをするだけ。

『ちょ、すっごい怖かったんですけど！』

私は裕晶を立たせ、ほとんど引きずるようにして浴室へ連れていった。着ているものは全てはぎ取り、洗濯機の中に自分のソックスと一緒に放り込んだ。

浴槽の中にお湯は既に貯まっている。私は蛇口を全開にして、シャワーを裕晶の下半身に浴びせかけた。少しも恥ずかしいとは思えなかった。そんな感慨(?)に耽っている場合じゃないし。

裕晶を白いプラスチック製の椅子に座らせ、頭からシャワーを浴びせかけた。白い体から跳ね返る水しぶきで、パジャマの上下までびしょ濡れ状態だよ。

浴槽に浸からせている間に、着替えを持ってこようかと考えいや、そのまま溺死されてはたまらないと思い直した。

『介護だね。完全にこれは』

「そのまま座つといてね」

とりあえず中学校で使っている体育用のジャージと自分の下着を持ってきた。体をバスタオルで丁寧に拭いてやり、苦労しながら私の白い下着を穿かせ、ジャージの上下を着せた。一段落したところで、ふうって、大きく溜息を吐く。

「あんた具合でも悪いん？」

「やっぱ反応なし。」

「私の部屋でゆっくり休み」

裕晶の手を引いて、浴室の前にあるトイレのドアを開けた。

「ここがトイレやから、ちゃんと自分で行くんよ。分かった？」

生気を失った目で、ただ立ちつくしている少年を見つめ、諭すように言った。

腋から肩を差し入れるようにして支え、よたよたと階段を昇って、

なんとか自分の部屋まで連れていった。私のベッドで眠らせることにしよう。

「少し眠り。お願いだから、夜尿症だけは勘弁して」

「月……」

裕晶は乾燥してざらついた唇を微かに動かした。

「月がどうしたん？」

瞳を閉じ、もう微かな寝息を立て始めている。何かから隠れるような、密やかな息づかいだった。

起きて上がってこないか裕晶を気にしながら、服を着替えた。

キッチンの冷蔵庫からペットボトルのウーロン茶を持って部屋に戻り、水分を含ませたティッシュで、乾燥している裕晶の唇を拭いてやる。唇は生氣を取り戻し、美しい桃色へと変わった。眠っている枕元に、ウーロン茶のペットボトルを置いておく。喉が乾けば自然に目が覚めるよね。

その後、ゴム手袋をはめてキッチンに広がる尿を雑巾で拭き取り（主婦って大変だと一人溜息を吐きながら）、やってきた出前の代金を私のへそくり（せっかくCDを買うために貯めてたのに……）から支払った。

お茶と親子丼を応接室の前で父に手渡してから、リビングキッチンで一人でゆっくりと親子丼を味わって食べた。薄味の上品な味で、ほどよい固さの鶏肉と柔らかい溶き卵が舌の上に広がり、とてもおいしい。

『どんな時でも、ご飯は食べる。健康一番、ピアノが二番。朋子語録にあります』

後片付けを手早く済ませ、お風呂にゆっくりと浸かりながら、浴

槽の縁を鍵盤に見立て、歌いながら30分ほど練習した。

ピアノが応接室にあるので、練習が出来なかったけれど、仕方ないよね。先生ごめんなさい！

ドライヤーで髪を乾かしながら、まだ何か用事はないか、頭の中で確認してみる。

うん、眠っても差し支えないだろう。リビングのソファをベッド代わりにして眠ることにする。

ふう、今日は、普段の一日を一週間分くらい大鍋で煮詰めたような一日だったよね。

ちよつと整理してみるか。そういうのって結構大事なんだよね。

1・私は今日、母親が双子だったことを初めて知った。

2・叔母は有名な小説家で、飛行機事故に遭い、おそらく亡くなっている。

3・そしてどうやら私に弟が出来るらしい。そういうことである。単純だ。急展開なだけだ。

私って、いざ！ って時は、けっこう冷静なタイプなんだよね。今まで、弟が欲しいなんて思ったことは一度もなかったけれど、案外世話好きな、姉の適性を持っているのかも。

少なくとも、弟（？）の世話を焼いたことに、悪い気はしなかった。

『叔母さん、一度もお逢い出来ませんでしたけど、天国（？）、極楽（？）があるのなら、そこで安らかに眠って下さい』

手を合わせながら眠ろう。父と林さんは、深夜まで応接室で話し込んでいたようだった。

翌朝、母が台所で朝食の準備をしている音で目覚めた。朝の6時過ぎか。普段ならあと一時間くらい眠っている時間だけど、頭の中をすっかり洗濯したみたいに心地良い。

「おはよう。お母さん大丈夫？」

「うん大丈夫」

全然、大丈夫そうではない青白い顔で頷いている。まだ気分がすぐれないんだね。

「ハムトーストとスクランブルエッグでええんやったら、たまには朝食作るよ。母さんは冷蔵庫に入れておいた親子丼食べる？ レンジしたらまだ食べられるよ」

「まだ母さんはいい」

「また貧血になってしまうよ。ちゃんとアーモンド食べてる？ ほい、栄養ドリンクだけでも飲んどき」

冷蔵庫から栄養ドリンクを取り出し、手渡した。母さんは力なく椅子に腰掛け、栄養ドリンクを少しだけ口にした。視線はテレビをぼんやりと捉えている。

旅客機墜落事故の続報が、全てのチャンネルで延々と流されている。キヤスターと航空評論家は無残な現場上空の映像を交え、生存者の可能性が絶望的だということを、うんざりするほど丹念に検証していた。

「母さん、林さんは？」

卵を焼きながら尋ねる。

「ホテルに戻られたそうよ」

「やっぱ、叔母さんのお葬式ってうちでするん？」

「うん。親戚はうちの他には誰もおれへんし、瑠璃は弁護士さんに『お葬式は無用』って言ってあったみたいやから、遺体が発見されてから、内々でささやかに済ますわ」

「レポーターとか、つめかけて来るんやない？ 遺産目当てのにわか親戚とか、タケノコみたいに出てくるかも」

「どうやらね。当分忙しくなるやろうね。お父さんは今日弁護士の先生と一緒に、東京で航空会社から説明を受けた後、遺体の確認に向かうんやって」

「母さんは行かへんの？」

「父さんが、多分遺体の損傷が激しいやろうから、行かへん方が賢明やろうって。母さんもその方がええと思う。瑠璃の遺体を見たら、神経がおかしくなってしまうそやから」

「うん」

母なら本当に発狂しかねないと私も思う。さすが父さんだ。

「朋ちゃん、ヒロ君の様子はどう？」

「ちよっと私、様子見てくる」

小皿を取りだして、湯気を立ち昇らせているスクランブルエッグを移し、ハムを乗せた食パンをオーブントースターに放り込んだ。

二階に上がり部屋の扉を開くと、裕晶は既に目覚め、ベッドに入ったままぼんやりと天井を見つめていた。しかしそれは昨日までとは違い、意志を持った人間の目だ。

「気分はどう？」

ドアの側に立って声をかけたが、一瞬私に視線を移しただけで、何も答えない。

「父さんが今日、事故現場に行くって言ってるんやけど、あんたはここにおるんよ」

「僕も行く」

「え、ちよつと」

裕晶は私には目もくれず、確かな足取りでリビングキッチンへと降りていった。

父と裕晶と林さんは、その日三人で東京へ発ち、数日後、事故現場に近いホテルへと向かった。父は裕晶に家にいるように命じたけれど、裕晶は頑として聞き入れなかったからだ。結局、林さんの「彼には母親の最後を見届ける権利と義務があると思います。吉本さん、お願いします」という静かな言葉で、父が折れた。

幸か不幸か、叔母さんの遺体は、煙になって消えたように発見されなかった。でも彼女がその飛行機に搭乗したのは、空港関係者の証言で確実らしい。

自衛隊員によって運び出された遺品の中から、ただ彼女の眼鏡だけが見つかった。

焼け焦げた犠牲者の遺品の数々から、裕晶が見つけたそうだが眼鏡は傷一つなく、不気味なくらい美しく銀色に輝いていた。

それから一週間後、私たちは叔母さんのお葬式を執り行った。故人の希望は叶えられることなく、お葬式はとても大がかりなものになってしまった。

降りしきる雨の中、斎場は彼女の死を悼む人々で埋め尽くされた。千人以上の人々が参列した。出版関係者や著名な人々よりも、熱心な一般の読者が圧倒的に多かった。

悲嘆に暮れる人々の中で、裕晶は一粒も涙を流さなかった。叔母さんの遺影を、ぼんやりと見つめていただけだ。

叔母さんの墓には、彼女の書いた小説だけが納められることになった。

お葬式を終えた後、それまでも食事をほとんど取らなかった裕晶は全く何も口にしなくなり、入院することになる。
私と母が交替で、裕晶に付き添うことになった。

自転車に乗ってなだらかな坂を駆け上がり、病院へと急ぐ 風
がとっても気持ちいい。

中学校の授業が終わると、私は脇目も振らず早足で帰宅し、母親と付き添いを交替する。本当なら母が裕晶に付き添い、私が家事をこなしていれば良いのだけれど、母まで神経を消耗して入院しそうなので、父と相談して私が交替することになったから。

裕晶が普通の外科的な病人（？）なら、そんな必要は全くなかったのだけれど、あいつは安物のゾンビみたいな顔をして、一言も喋らないのだ。

交替すると、面会時間ぎりぎりまで部屋にいる。

これといって何をしているというのでもないのだけれど、身体を拭いてあげたり、音楽を聴きながらその日学校であったことを話しかけたり そんな風にのんびりと過ごしていた。

病室は一応個室。うちには少し贅沢かもしれないけれど、裕晶の不気味な様子を見たら、他の患者さんだって治る病気も悪化しかねないので仕方ないかなって思ってる。

裕晶は、灘区の山手にある静かな私立病院に入院している。

道路のすぐ側は深い谷になっており、山の麓から流れてくる小川があり、もう少し北に歩くと六甲山に登るケーブルカーの発着場がある。坂の途中には、私立の女子大、国立大学、マンションが点在している。

病院通いは、もう二週間ほど続いている。

お医者さんの診断では「母親の死による、一時的な心因性食思不振でしょう。数週間で食欲は回復すると思います」ということだったけれど、一向に良くなっているとは思えない。むしろ悪化しているように見える。

裕晶は食事に全く口をつけない。無理矢理スープを口に入れると、その度に激しく嘔吐した。お医者さんは食欲増進剤と抗うつ剤を裕晶に投与し、経腸栄養を行っている。しかし体重は増加しなくて、日に日に痩せ衰えてゆく。

医師は首をひねり、本人がチューブを引き抜いているのではないかと疑い監視したんだけど、そんな様子は全くない。

精密検査を行っても原因は分からない。裕晶はただ眠り、起きている時は、天井をゾンビみたいな目で見つめているだけ。担当医師は明らかに焦り始めていた。

病室に入る前には、自分までゾンビの仲間入りをしないために、二、三回深呼吸する。そうやって少し身構えてから、病室のドアを開ける。

裕晶は眠っていた。側に寄って頬に触れてみると皮膚は乾燥し、ひんやりと冷たい。その様子をおずおずと見守る母も、裕晶の姿を気に病み、憔悴しきっている。

「母さん、はい、交替」

母の右手を催促する笑顔を投げかけ、力無く差し出された手に、パンと小気味良くタッチ　この時いつも母は眉根を少し寄せて、困ったような笑顔を作る。

「はいはい、お母さんは早く家に帰って夕食の準備」

「朋ちゃんごめんね」

母は裕晶に一度視線を移し、寂しそうな表情で病室を出ていく。肩を落とした後ろ姿が切ない。

裕晶は入院してからというもの、魂を抜かれた人間のようにまだ一言も言葉を発していない。この病室に座って様子を見てみると、

楽観的な性格の私でさえ、もうずっとこんな調子で、言葉を失ってしまうのではないかと考えてしまう。

鼻に手を翳してみると、微かに息をしている。裕晶はその気配で目を覚ました。

「おっす。今日の調子はどう？」

この二週間で、一人で喋り続けることにすっかり慣れてしまった。この病室に無言で座っていると、なんだかこっちまで衰弱してしまいそうだから。

「今日はジャクリーヌ・デュ・プレを持って来たん。まずバッハの無伴奏チェロ組曲をかけるね」

お気に入りのミッキーのナップサックからCDを取り出し、裕晶が入院した当日に持ってきたCDラジカセで、ボリウームを絞って音楽を流した。

「チェロが語りかけてくるみたいでしょ？」

椅子に座り、ベッドに両肘をつけて裕晶に語りかけ始める。

「デュ・プレはね、二十八才の時にとっても重い病気に罹って、演奏できへんようになってもうたん　音楽を取り上げられてどんな気持ちやったんやろう」

目を閉じて、厳かなチェロの響きに耳を澄ました。裕晶の規則的で、微かな息づかいも聞こえてくる。

「あんたもそろそろ元氣出したら。このままやったら間違いなく死ぬ。朋子語録にもそう書いてある……かもしれない」

そう言つて、目を閉じたまま裕晶の手を握ってみる。生気を失った冷たい手。

両親には何も言わなかったけれど、裕晶がこのまま死のうとしているんやろうな、と確信していた。それは裕晶の感情が、どんなに美しい音楽を聴いても揺らぐことがなかったから。

雨水が水面に一滴落ちると小さな波紋が起きる。それは誰も止めることが出来ない自然の摂理。音楽はそういう風に、聴く者の心に様々な感情の波紋を呼び起こす。それが音楽の存在意義なのだと思う。波紋が起きない心は、既に死んでいるに等しい。

自分の心に問いかけてみる。父や母が死んでしまったら、私もこ
うなってしまうのかなって。

確かにとても辛いだろう、寂しくて、悲しいと思う。何日も何日
も泣き暮らしてしまうに違いない。

でも母や父が死んでしまったとしても、ここまで生きる氣力を失
い、衰弱しないと思う。

裕晶には肉親と呼べる人が、母親しかいなかったから？

それならもし両親が死んで、私だけになってしまったらどうなん
？

『うっん、私にはまだ音楽がある』

じゃあ、ジャクリーヌ・デュ・プレのように音楽を取り上げられ
たら、私はどうなってしまうだろう？

『私は間違いなく絶望する』

たとえ母と父がどんなに励ましてくれたとしても、私は生きる意
味を失ってしまう。

『そっか。やっと分かったよ。あんたは母親のために生きてたんだ
ね。』

あなたにとって叔母さんは、あなたの存在価値だったってこと？
マザコン？

それにしても、限度ってものがあるでしょ』

何故って、私は思う。

自分を他者に捧げて、それでどうなるっていの？

「あなたって、どうしようもないアホやね」

私は目の前で眠っている裕晶を　死を望んでいる十三歳の少年を不憫に思った。でも、私が音楽を愛するように、裕晶が何を望み、何を幸福かって感じるのも、また自由だよな。

デュ・プレのチェロの音色は、生と死について語りかけるように、低く響き続けた。

「死にたいんやったら、勝手に死に。明日はフォーレのレクイエムでも持って来てあげる」

哀しみや腹立たしさといった、色々な感情が縋い交ぜになって、普段よりも早く病室を後にした。裕晶はいつの間にか瞳を閉じ、死んだようにまた眠り始めていた。

不吉に淀んだ病室の空気とは違い、夜風は澄みきってとても冷たく、星をよりいっそう清らかに輝かせている。

あの部屋にいと、異世界に迷い込んだように、いつも時間の流れを早く感じるんだよね。

深呼吸をして、体の細胞の隅々から、迫り来る死の臭いを追い出す。六甲山に近いせいか、まだまだ肌寒いや。

慌ててマフラーと手袋をナップサックから取り出し、身につけた。

自転車で坂を駆け下りる。

行きが大変な分、帰りはとても快適。ん、霧が出てきたよ。

視界が唐突に数メートル程度まで下がり、あっという間に霧以外

何も見えなくなってしまった。慌てて急ブレーキをかけ、自転車を止めた。背筋が冷やりとした。

世界から音が失われている。

目を閉じて耳を澄ませても、電車や車の音どころか、物音一つ聞こえない。

呆然として、しばらく立ち尽くしていた。いったいこのシチュエーションはなんなの？ って戸惑っていた。

背後から微かな風の流れるを感じる。

パイプオルガンのような音色を聴き取り、そちらへ注意しながら進んだ。霧が少しずつ晴れてゆく。唐突に大きな石造りの建物が眼前に聳えていた。

「え、ちょっと、何よこれっ！！！」

ゴシック建築に似た、二つの尖塔を持った石作りの教会らしき建築物。

テレビで見たことがあるような、世界遺産の大聖堂ですが何か？ 提供バライSONYプレゼンツ（？）といった感じで高さは15メートルくらいあるだろう。二つの尖塔の上には月を模した彫刻が向かい合うように飾られている。シャチホコの代わり？ 当然、この土地で生まれ育った地元民の私が、世界遺産級の建築物を知らないはずなんかない。

ああ、進むとゾンビがめつと登場して、美味しく頂かれてしまいかもしれない　と真っ先に思い、微笑してみたが顔が引きつってうまく笑顔にならない。

「ん、歌？」

微かに歌声のような音が聞こえる。

用心しながら近づいて行くと、二つの月を抱いた女神を中心に、男たちが戦いをしているような彫刻が壁面に彫り込まれている。側面の色鮮やかなステンドグラスの窓からは、仄かな灯りが漏れ出している。入口は鉄で出来た重厚なドアになっていた。

手を伸ばして力一杯に扉を開けた。

清らかな美しい歌声が、閉じ込められた風のように礼拝場から流れ出して来た。

曲の感じはシューベルトのアヴェ・マリアに似ているけれど違うみたい。とても素敵なソプラノ。プロの音楽家がここで練習してるの？

暫くその場に立って、歌声に耳を澄ませた。

中国語のように滑らかなアクセントで、濁音の少ない聞いたことのない言葉。どんな女の人が歌っているんやろ。もっと近くで聴きたい。

中に入ろうとした瞬間、歌声がぴたりと止んだ。

礼拝場の中には人の気配がない。日常の些事を忘れ、深呼吸することを改めて思い出すような、吹き抜きの静謐な空間が広がっている。正面には説教台があり、その後ろには、星を抱いた木製の女神の像があった。赤子を抱くような愛おしそうな表情で、二つの月を

抱いている。

月？

どうして月だと私は思ったのだろう。直感的にそう感じたけれど、とにかく丸い球体を抱いている。

私は真っ直ぐ中央まで進んでゆき、辺りを見回した。礼拝場はひっそりと静まり、据え付けられた無数の木製の椅子だけが、整然と存在している。空気が清々しく冷たい。

「すいませーん、今、歌っていた方はどなたですか？」

声が礼拝場の隅々に反響する。返事はない。歌声の主は、恥ずかしがり屋さんみたい。女神の像まで歩いていって、挑むように見上げた。

「もしかして、あんたが歌ってた？」

私の声だけが空々しく響く。女神は沈黙したまま、目を閉じて星を抱いている。溜息を一つ吐いた。

「なんなん。私がこんなことで、びっくりすると思ってるの？」

冷やかに彼女を見つめて呟いた。険を含んだ私の声が反響する。

あかんべをして　せゝので　後ろも振り返らずに、自転車の止めている場所まで走り抜けた。

ゾンビが追ってくる様子はないみたい。油断したら、お約束でゾンビ犬が飛び込んでくるかもだよな！

深い霧の中に自転車をヤケクソで突っ込ませ、ペダルを漕ぎ続けた。本当に前に進んでいるのか手応えが掴めない状態が数分続いた。

音が戻った。

見覚えのある道路が見え始めた。母がよく買って帰ってくる美味しいコロッケ屋さんが視界に入ってきた時は、ちよっぴり感動した。コロッケ屋さんを見つけて、こんなに感動することは、もう二度とないかもしれないよ。

帰宅すると父と母が、いつものように裕晶の様子を尋ねてきたので、「変化なし」とだけ言っておいた。二人は深刻な表情で、裕晶を転院させるべきか遅くまで話し続けていた。

私は食事を済ませ、いつも通りゆっくりお風呂に浸かった。

その後ピアノを一时间ほど弾いたけれど、裕晶の様子や奇妙な体験が脳裏にちらついて、気持ちが全然入ってこない。

寂しさというか、腹立たしさというか、変な感情がぐるぐると掻き混ぜられているような気持ち。

『なんなのこれ めんどくさいよ。

私、ピアノ弾かなきゃなんだよ！

じゃないと私、生きてる意味ないじゃん。

邪魔しないでよ。私の邪魔……しないでよ！』

ベッドに入って眠りに就くまで、あの不思議な歌声を譜面に起こしてみようかと少し考えてみたけれど、いつのまにか眠ってしまった。

次の日の放課後も、私は自転車に乗って病院へと向かった。霧が深くなつてあの変な所へ迷い込んだらどうしよう　って対策を考えたりしてたけど、何事もなく病院に辿り着けた。

病院の三階までエレベーターで昇り、病室でいつも通り母と交替した。母は小さく首を振って、悲しそうな顔で病室を出ていった。今日も何も口にしなかったらしい。

裕晶は目を覚まし、ゾンビの目でじつと天井を見つめていた。

『落ち着け私。感情的になつたら負け　クールにいくのよ。朋子語録に書いてることを実行するのよ！』

「あのね　あんたのことをみんな心配してるん。
あんたのお母さんも、あんたのこの情けない姿を見たら　悲しみ
はると思う」

やっぱり私の言葉は裕晶には届かない。ふつふつと感情が込み上げ、私の頭は怒りで沸騰した。猛烈に腹が立つてきた。私たちがこんなにも心配しているというのに、この馬鹿ときたらいつまでも女の腐ったようにグジグジと！

『もう無理、マジで無理、断固として無理、徹底的に無理！』

「フォーレのレクエイムを持ってきたから、これ聴きながら、とつとと死んだら！」

乱暴にナップサックからCDを取り出して、音楽を流した。

「私、あんたのせいで、ピアノのレッスン一ヶ月近く休んでるんやからね！」

これでもかってくらい、ベッドの縁に肘を付いてまくし立てた。

「そんなに死にたいんやったら、まどろっこしくじっと寝とらんと、屋上から飛び降りて勝手に死んだらええやん！」

でも裕晶は、ただ天井をじっと見つめているだけ。

「私ここで練習する あんたもちよつとくらい協力して！」

ラジカセを停止させ、裕晶の掛け蒲団をはぎ取った。真っ直ぐ寝そべっている裕晶を鍵番に見立てて、身体に指を乗せた。パジャマ越しに指から伝わってくる裕晶の身体は、贅肉が消え失せ、ごつごつと骨張っている。

目を閉じて、叩きつけるようにベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」を弾き始めた。うんざりするくらい、ピアノの先生に練習させられていた曲。私はベートーヴェンが好きじゃない というより大嫌い！

「ベートーヴェンよ。私は、こんな陰気くさい音が大嫌いなん！……世界中で、自分だけが辛い、みたいな音がね」

『あんたって一体なんなのよ！』

分かんないよ。独りで勝手に心を閉ざして 自分だけで生きてきたみたいな顔して！

……手を差し伸べてくれてる人がいるじゃん。みんなを無視していいの？

叔母さんが死んだら、もう世界に意味はない。

ふざけないでよっ！！！！

あんたには、誰かに頼らない あんただけの希望ってないの？』

裕晶は激しく咳き込んだ。私は構わず続けた。

「自分だけが辛い被害者です、って言いたいん？ それがなんやの

？ そんな私には関係ない」
滑るように指を走らせ続けた。

「分かる？ 死ぬっていうんは、なんも、なんもなくなってしまふことなん！」

指を走らせ続けるほど、腹立たしさや悲しみが、私の中で吹雪みたいに激しくなった。

悲しみの雪が私の中で堆く降り積もり、その重さにこらえきれなくなった時、私は涙混じりの声で叫んでいた。

「もうええ加減にしなさい！ このままやったら、ホントに死んでしまっんよ！！」

『お願いだから、聞いてっ！！！！』

裕晶は無表情で天井を見つめている。

たまらなくなつて病室から飛び出した。途中、廊下ですれ違った看護婦さんが心配そうに声をかけてくれたけれど、私は無視して階段を駆け下りた。

自転車で坂を駆け下り、あの聖堂へ向かった。絶対にまた行けるに違いないと妙な確信があつたから。

不安だとか怖いとか、そういう類の感情は微塵もなくて、ただめちゃくちゃ腹が立っていた。

霧が深くなつて 聖堂の前に着くと躊躇わず馬鹿みたいに重い扉を開け 礼拝堂に駆け込んだ。するとまたあの歌が聞こえてくる、そこで怒りは頂点に達した！

「あほ！！」

また歌声はぴたりと止んだ。

礼拝堂に人影はない。私は女神像の前に走ってゆき、彼女を睨みつけて怒鳴った。

「ちょっと！ あんた神様やったらなんとかしてよ！」

『裕晶が 私の弟が死んじゃう！！！』

女神はただ沈黙しているだけ。私はその場に泣き崩れた。礼拝堂の石の床の冷たさがひどく寂しく、悲しかった。

一通り泣いてしまうと、私は落ち着いた。怒りがひとかけらも無くなっていた。

聖堂は清らかな静寂を保ち、私の鼻水を啜る音だけが響いている。

うまく説明できないけれど不思議な感覚があった。

足りない音を閃いて、楽譜に書き込むようなすつきりした気持ちになっっていた。

怒りや悲しみ、コンプレックスといった、心の中で渦巻いていた様々な負の感情が、全て吹き飛んでいた。

父親の仕事が嫌いで、恥ずかしいと思っていること。

そんな自分を許せないこと。

自分の容姿が嫌いで鏡を見る度に失望すること。

音楽的な名声への野望。

自分の才能への不安。
純粹な音楽への渴望。
そついうものが、悲しみの吹雪に全て吹き飛ばされていた。

吹雪が去った静かな雪景色の中には　　裕晶を本当の弟のよう
に愛しいと思う気持ちだけが残っていた。

私は、心から『裕晶に生きていて欲しい』って願ってた。

『裕晶に生きる力を与えて下さい。もし願いを叶えてくれるのなら、
私の命をあげます』

指を組み、心の中でその言葉だけを、ただ強く繰り返した。

いつしか私の命の全ては、ただ一つの祈りに変わっていた。

私の命は一つの言葉になり、私の存在は　　小さな、完全なひと
つの想いに変わっていた。

その時、私は裕晶の息づかいを感じ、彼の鼓動さえも感じるこ
とができた。

突然、聖堂に聴いたことのない楽器の音が厳かに響き渡った。

カッチーニのアヴェ・マリアに似た曲。辺りに花のような芳香が
漂い始め、衣擦れの音がした。背後に人の気配がする。誰かが歌い
始めた。

天から響いてきたような神々しいまでのソプラノ　　誰かが私の
頭に優しく手を置いた。日溜まりのような柔らかな温もり。私はそ

の優しい温もりから、言葉ではなくイメージを見た。

飢えと病に苦しむ人々を癒す美しい少女　サリーのような衣服を身に纏っている。慈愛に満ちた眼差しを治療する人々に向け、微笑んでいた。

夜空に蒼い月が二つ並んで見える。

蒼い月光が少女の艶のある長い黒髪を濡らすように照らし　少女は人々に何かを乞われている。『歌って下さい』って言われているみたい。

少女は少し困ったような顔で微笑んでから、蒼い二つの月を見つめて歌い始める。

きつとこれは祈りの歌なんだね。

歌声が礼拝堂のソプラノとシンクロしてゆく。

なんだか分からないけれど、切なさや愛おしさで涙が止ままないよ。

裕晶の鼓動を感じながら祈り続けた。やがて歌声は余韻をもって静かに終わり、頭の上に置かれた手は、私の肩へ何かを促すように優しく触れた。目を開けて振り返ると、そこには誰もいない。

聖堂はただしんと静まり返っている。

私は曇りのない清らかな力に包まれ、安らかな気持ちで礼拝堂を離れた。

懸命に自転車で坂を駆け上がり、また病院へと向かった。腕時計

を見ると消灯までまだ一時間ほどある。

私の心は喜びに包まれていた。得体の知れない力強い愛の衝動
何の根拠にも基づかない勇氣に満ち溢れていた。

階段を使つて、病室のある三階まで一気に駆け上がる。

病室のドアの前に立つと、裕晶の話し声が聞こえてくる。裕晶が
まともに会話している声を聞いたのは初めてだ。息を潜めて病室か
ら聞こえてくる声に耳を澄ませた。

「うん、寂しかった……僕だけ、ここに置いていかれたんかと思つ
た」

弱々しいけれど、喜びを含んだ声だ。

「母さん、これからまたどこかへ行くん？　僕も行く。連れてつて、
僕も連れて行つて。」

良かった。僕も一緒に行けるんやね」

病室のドアを思い切り開いた。

部屋に人影はない。ただ暗く冷たい、ぼんやりとした空氣の固ま
りだけが病室に漂っている。それは不吉で禍々しい”何か”だ。病
室の中は外氣よりも冷たい。

「あんた今、誰と喋つてたん？」

ベッドへ歩み寄つて、裕晶の手を掴んで問い質した。ずっと氷水
に浸っていたような冷たい手だ。裕晶は何事もなかったように、無
表情に天井を見つめている。

間違いない、この部屋には何かがいる！

冷水を浴びせかけられたように、背筋に寒気が走った。

「　　しっかりして」

裕晶の手を自分の頬に当てた。

「あんた男の子でしょ　　しっかりしなさい！」

裕晶はその言葉を聞いて、唇を引きつらせ冷笑した。ぞっとするほど禍々しい微笑。裕晶は気味が悪い鳥の泣き声のような声で笑う。私は怯まなかった。

『裕晶をここで失うわけにはいかへん』

裕晶の引きつった唇に、そっと口づけた。

初めての口づけ。

氷のように冷たい唇。私の湿った吐息だけが火のように熱い。

裕晶は低いくぐもった笑い声を発した。私は服を着たままブラを乱暴に外し、裕晶の手を白いセーターの中に突っ込み、直に自分の胸に当てた。冷たさで心臓が止まりそう　　それでもいいって、思った。

「私のはあんたに生きていて欲しい。

私、あんたのために、いっぱいピアノを弾いてあげる。あんたのためにいっぱい歌ってあげる。

聞いている？　世界は豊かな音で溢れてるん。

私はもつといい音が出せるようになる。

みんなが、生きてて良かったと思えるような、私だけの音。

だから死んだらあかん」

『裕晶　　私はここにいますよ。』

君のことをすっごく大事に思ってる人間がここにいるよ。

だから怖がらなくていいよ。

寂しがらなくていいよ、無理しなくていい。

つまったら 泣いてもいいから 』

無理矢理ベッドの中に潜り込み、裕晶をきつく抱いてやった。大きな氷柱を抱いているよう。

自分の体温を全て与えるように裕晶を掻き抱いた。

『こいつにかけられた死の呪いを解いてくれるなら 私の命をあげます』

ただそれだけを繰り返し祈り続けた。

暫くすると裕晶の身体が徐々に暖かくなっていった。

裕晶は身体を丸めるようにして小刻みに震えだした。

それが呪いの解けた合図だった。

裕晶は私の胸の中で震え、声を押し殺して泣いた。裕晶の頭を撫で続けながら、初めて、自分が女の子であることを幸福に思った。

『 やれやれだね。私って、裕晶萌え属性があるみたいだね 』

裕晶は次の日から、少しずつ食事を取るようになった。

「おいしい？」

私は湯気の立ったお粥を、スプーンで裕晶の口に運んだ。

「うん」

裕晶は塩味だけのお粥を、本当に美味しそうに咀嚼した。夕食も残さず平らげた。おいしそうに食べる姿を見ると、涙が出そうになるくらい胸が熱くなった。

「そうそう　まだ自己紹介してへんね。私は吉本朋子、中学2年生。あんたは？」

私たちはちゃんと名乗りあう必要があると思った。お互い尊厳を持った対等な人間として。

「ひろあき、にしのひろあき、小6」

裕晶は頬を赤らめ、照れくさそうに言った。

「え、小6なん。その割には背高いよね」

『背高いよね、とか水商売の女の人か、私は！』

照れんとつてよ、私まで赤くなるやん』

照れ隠しにそんなことを言ってみたが、自分の顔にみるみる血液が集まっていくのが分かった。見つめ合う視線がくすぐったい。我慢できなくなつて後ろを向き、ナップサックからCDを取り出した。

「今日もCD持ってきたよ。ちょっとこれでも聴いって」

一旦病室を出て、洗面所で顔を洗った。裕晶を抱き締めた記憶が

生々しく蘇って、顔から火が出そう、ていうか出てたと思う。でも鏡の中を見つめると、そこにはやっぱりいつもの私がいて　なんだろう、ちょっぴり、がっかりした。

再び病室に入ると、裕晶は私の持ってきたCDを聴いていた。グレン・グールドが弾く、バッハの『ゴルドベルグ変奏曲』だ。グールドはステージでの演奏を捨て、スタジオへと隠棲した異端児。ピアノの先生は虚構の音だと言って嫌っているけれど、私はとても彼の音が大好き。

「とてもやさしい音やね」

裕晶は消えてなくなってしまうような微笑を浮かべた。

雰囲気がとても母さんに似ている。まず顔が小さい、肌理の細かい白い肌、黒目勝ちの大きな瞳と長い睫毛。男にしておくのが勿体ないくらい綺麗な顔だね。

なんでお父さんに私は似たんだろうと、少し腹が立ってくる。小さい頃は、自分が橋の下で拾われてきた子なのかと、真剣に悩んだ。

「あんたは今日から私の弟になるんよ」

私はCDのジャケットを手渡して言った。裕晶はベッドから私の顔を見上げながら受け取る。視線はずっと私の顔を捉え続けているので、咄嗟に何かで顔を隠したくなる。

こいつの目に、私はどう映ってるんだろう？

「おばさんも、今日そう言ってくれました。よろしくおねがいします」

裕晶は上半身を起こして、ちょこんと頭を下げた。

「だから名前も吉本裕晶になるんやない？」

自分を叱咤して、裕晶の顔をまっすぐ見つめた。引き込まれてしまいそうな澄んだ瞳の色。

「名前がかわるのはいやや」

裕晶は俯き、少し険しい表情を作ってきた。普段はおとなしいけれど、言い出したら聞かない性格なんだね、きっと。既にしっかりと自分の考えを持ってるんだ。少なくとも、自分にとって大切なもの、護るべきものが何かを知ってる。私は自分の新しい弟を頼もしく思った。

「そう思うんやったら、父さんに早く言うたほうがええんとちゃう。でも名前はどうであれ、あんたは私の弟になったん。分かった？」

「うん」

裕晶は、家族に加わる事と、吉本の名前を受け入れる事が、不可分の問題ではないことに安心した様子だった。

「じゃあお姉ちゃんって言うてみて」

私は照れ隠しに、すました顔で言うてみた。

「お姉ちゃん……」裕晶はぼそぼそと口ごもりながら言った。

「もつと感情を込めて」

「お姉ちゃん！」裕晶は投げ遣りに、大きな声で答えた。

「もつと敬意を込めて」

「けいいい？」

「尊敬する気持を込めなさい」

「お姉ちゃん」裕晶は俯いて恥ずかしそうに言った。ま、これくらいで許してやろう。

「よし。私はあんたのことをヒ口って呼ぶね」

「うん」

「握手」

私たちは、少しぎこちない握手をして姉弟になった。

その日から、私の大事なものがもう一つ増えた。

ピアノとピアノの先生、両親と両親が大切にしている友人、そして裕晶。

我が家の応接室には、スタインウェイのアップライト・ピアノがある。

裕晶がやってくるまでの14年間、私は自由時間のほとんど全てを、彼と共に過ごしていた。母の胎内にいる頃から、彼の歌を聴いて育ったのだ。

母はこのピアノをととても大切にしていた、季節の変わり目には、必ず知り合いの調律師に頼んで、入念に手入れと調律をして貰う。だから彼は30年以上経った今なお（ピアノの年齢では、まだまだ若い青年なのだそうです）、艶のある漆黒の身体と、美しい歌声を保っています。

このピアノは、母が小さい頃、楽器屋さんで一目惚れしたというもので、資産家だった祖母にねだって買って貰ったものだそうだ。母曰く、ピアノが自分に語りかけてきたらしい。

『キミの一番の友だちになってあげる』と。

母の初恋は、遠いハンブルクからやって来たピアノだったというわけだ。

それ以来、母は三十数年、このピアノを友として暮らしてきた。母はどんなに忙しい時でも、それがたとえ10分であれ、その日に感じた嬉しいことや悲しいことを、彼に触れて話しかけていたんだって。だから私も彼にとっても親密な感情を抱いているし、彼も私に好意を持っているのが分かる。

彼に初めて触れた日のことは覚えていないけれど、私は物心のつく前から、必死で彼によじ登ろうとしていたらしい。彼は赤ん坊の

私に子守歌を歌い、遊び相手になってくれ、やがて私も、母のように彼に恋するようになった。

だから私にとっても彼は、とても特別な存在です。

彼は軽やかで　なかなか味のある声で歌います。

一月半ぶりに、ピアノの先生の家を訪ねた。

先生の家は、東灘区御影の最も山手に、ひっそりと建っている。

私の家からは、自転車で約20分の距離だ。そこに辿り着くまでには、御影の急な坂を登り切らねばならない。観光客にはお洒落な場所だと思われるようだけれど　神戸という所はハードな街なんだよ！

先生の家に着くまでの最終の坂を、私は心臓破りの坂と呼んでる。この坂は勾配の角度もさることながら　馬鹿みたいに長い！　この坂を登り切るのは、ちょっとした覚悟が必要。

坂の勾配に負け、一度でも自転車を降りようものなら、もうそのまま自転車を押して登らなければいけなくなる。するとそれはちょっとしたハイキングに出かける時間になっちゃいます。

脇目もふらず、ただ坂道に集中して自転車のペダルを漕ぐ。真冬でも背中がじつとりと汗ばみ、額から汗が滴り落ちてくる。かなりの脚力を要する作業。先生の家はこの丘の頂上にあり、ピアノリストになるための基礎体力作り（？）ではないのかと、悪意さえ私は感じてしまう。

でも帰宅する時に一望出来る神戸の夜景はとても素敵。この丘から見下ろす夜景は、おそらく数億円はする贅沢な眺めなのかもだね。

先生の家は、周りを取り囲む大手の工務店によって建てられた住

宅とは違い、時間から取り残された、石造りの教会のような佇まいを見せている。

実際その屋敷は、とつくに死んでしまった、名のある建築家によって建てられたものであるらしいけれど　その人の名前はちよつと忘れちゃった。

老朽化がかなり進んでおり、外壁の漆喰は日に焼けてくすみ、蔦に覆われた壁をよく見ると、所々小さな亀裂が走っている。時間から取り残された世界の果てにある教会、そんな言葉がびったりしている。

その姿を眺める度に、この家がよく震災の被害から免れたものだと、感心してしまう。父さんは、阪急沿線から北は比較的地盤がしっかりしていると言ってたけど、地盤云々の問題ではなく、この家が時の洗礼を越えてここに存在し続けていることに　私はある種の感銘さえ覚えてしまう。

玄関に自転車を止めて、凝った薔薇の彫刻が施された青銅の門を開き、敷地へと入る。

庭は荒れ放題で、びっしりと背の高い雑草が生い茂っている。おそらく昔は、よく手入れされた青々とした芝生が敷きつめられ、美しい花が咲いていたのだろう。

甘い『シヨパンのノクターンの2番』の調べが聞こえてくる。

先生が昔の思い出に浸っている時に決まって弾く曲だね。その音を聴くと、自分の中に沈んでいる何かが揺り動かされるような切ない気持ちにさせられる。（柄にもなく）詩的な表現をすれば、激しい恋に落ちた私が、去ってしまった恋人の手の温もりや、唇の感触を想い出しているような、そんな種類の感情かも。

『それでも、まだあなたを愛しているのよ』

そう、ピアノは歌い続けている。

ノックもせずに玄関のドアを開いて、家の中へ入る。先生は決して施錠をしない。もしかしたら、扉に鍵が付いていることも知らないのかもしれない。

一歩家に足を踏み入れると、猫独特の臭気が充満してて、たちまち10匹の猫が一斉に私の足下へ集まってくる。三毛、黒、白、はたまたグレーやら、私の足に猫たちは体をすり寄せ、甘え声で鳴いて食事をねだる。

薄暗い廊下を歩いて、いつもよりも雑然としたキッチンへと入った。猫たちの食器に、持ってきた猫用の缶詰を移してやる。猫たちは争うように一斉に皿へと群がり、ねっとりとしたツナを貪り始める。

少しの間、彼や彼女たちの頭を撫でてやってから、流し場に溢れている食器を洗う。そして冷蔵庫から出しっぱなしになった漬け物や、醤油、マヨネーズなどの調味料、バターなど、そういったあらゆる細々としたものを、整然と片付けてゆく。そして取り込んだまま、そのまま放ったらかしてある洗濯物を畳んでおく。私はこうすることで、我が家では払うことが大変な、高い月謝を半額にして貰ってます！

先生にピアノのレッスンを受けるまでは、ずっと母にピアノを教わっていた。母は東京の芸大を中退しているものの、有名な芸大に入学していただけあって、みっちりと私にピアノを教えてくれた。そして十歳になった頃、母はもう技術的に私を教えることが出来なくなったと悟り、今の先生を見つけ出してくれた。

先生は、さる巨匠に『リストを弾くために生まれてきた』と絶賛された人だった。

17才の時に、若手ピアニストの登竜門である大会で入賞し、欧州ですつと演奏活動が続けていた。

しかし32才の時に事故で聴覚をほとんど失い、暫く失意の生活を続けていたそうだ。

度重なる手術で何とか左耳の聴覚は半分ほど回復したものの、先生は人前で演奏をすることを諦め、神戸でピアニストを育てながらひっそりと暮らし始めた。先生の家には隔日に通っている。もうすぐまる四年になる。

すっかり慣れてしまった家事を手早く済ませたら、二階へと上がってゆく。先生は部屋が十数室もある広い屋敷の中の、ピアノを置いている部屋でほとんどの時間を過ごしている。

「先生、こんにちは」

この部屋に入る時は一応ノックをする。ピアノの音が止んだ。

「ああ朋子ね、入って」

部屋の中は幻想的な空間。灯りは、部屋のおちこちに置かれた燭台の蝋燭と、ピアノの側に置かれた年代物のランプの光だけ。

先生は、備え付けられた家の照明をほとんど点けない。電気を点けるのは、トイレとクリスマスツリーぐらいだね。別に電気料金をケチっているわけではなくて、無機的で人工的な光が嫌いって言うてる。

壁一面には、先生が描いた天使や聖母の聖画が掛けられている。部屋の隅には一年中クリスマスツリーが飾られ、赤や青や緑の光を明滅させている。この部屋だけは毎日クリスマスだ。

「一ヶ月も朋子が来ないと、食器がたまって困っちゃったわ。仕方ないから、久しぶりに自分で食器洗っちゃった」

先生は皮肉っぽく、歌うように喋った。先生の瞳は綺麗な碧眼。鼻は聳えるように高く、眼窩は深い。癖のある長い赤毛は、ゆつたりと腰まで波打っている。

先生はドイツ人と日本人のハーフ。年齢は決して言わないけれど、六十はとうに越えていると思う。体は全体的にふっくらとしていて、良く言えばとても貫禄があるかも。

彼女はいつもビクトリア朝時代の没落した貴婦人みたいな服を着ている。彼女の着ている服は、全て自分で作ったもの。

部屋の中央には、壮麗なグランドピアノが、女王のような気品をもって鎮座している。

ぼんやりと琥珀色の灯りに照らし出され、まろやかな底光りを放つその気高い姿は、いつ見てもため息が出てしまう。名前は『ベゼンドルフアー』と言い、先生によればウィーン生まれのとても貴重なピアノらしい。

何ともいえない、柔らかく深いのびやかな音色で、特に弱音の美しさが素晴らしい。弾く時の指の感触は、可憐な花を撫でているみたい。

このピアノの歌声の素晴らしさといったら　ちょっと形容しがたい。

先生がこのピアノにシューベルトを歌わせるのを初めて聴いた時、私は立っていられないくらいに膝が震えた。鍵盤も普通の八十八鍵に比べ、九十七鍵あり、低音部が九鍵も多い。余分の鍵は戸惑わないように黒く塗られている。

「一度個性の強いピアノを愛してしまうと、そのピアノじゃないともう物足りなくなってしまう。男と一緒にね」

先生にそう言わせるのも頷けるほど、このピアノには、触れた者だけが判る魔力がある。まるで世界の果てに住む魔女が持つ、世界

の終わりを告げるピアノだね。

「先生、長い間ご迷惑をおかけしてすいませんでした」

先生は椅子から立ち上がって、本当に久しぶりね、という風に軽く抱き締めて私の頬にキスした。

「朋子がレッスンを休むって、よほどの事があったのね」

「ちよつと叔母が事故で亡くなったもので」

「交通事故？」

先生は眉を顰めた。

「飛行機事故でした。叔母のお葬式を出したり、新しい弟が出来たりとか　とても忙しくて」

「弟さんが生まれたの？」先生はちよつとびっくりした様子で言った。

「いえ、えつと叔母さんが亡くなって　従兄弟が独りぼっちになつてしまったもので、

うちで引き取ることになつたんです　」

「そうなの。それはとてもお気の毒ね」

先生はピアノに視線を落として、女王に触れながら言った。

「でもピアノは毎日弾いていたんでしょ？」

先生は私を見つめ、当然ね、という感じで尋ねた。

『まずいな。これは予想していた通りの展開すぎる……』

「それがあの　あまり弾いていないんです」

先生が問題の核心を突いてきたので、俯いて答えた。

恐ろしくて、もつまともに先生の顔を見ることが出来ない。きつ

と彼女は怒りで顔を紅潮させ、天狗みたいな顔で私を睨んでいるに違いない。

先生が本当に尋ねたかったことは、ピアノのことだけなのだ。他のことには一切興味がない。

私もこれまでずっとそうだった。飛行機が落ちようと、近所で殺人事件が起きようと、中東で戦争が起きようと、たとえ世界のどこかに核ミサイルが落ちたとしても、そんなこと一切関係なかった。自分の前にある重要な問題は、ピアノを弾くことだけだった。

「朋子、今のあなたにとっての一月月は、今の私の一年くらい価値があるものなのよ。分かる？」

先生は言葉を吟味するように静かに言った。嵐の前の静けさだ。

「私はね、残酷かもしれないけれど、才能がない子と、音楽に命を捧げる覚悟のない人間を教えている暇はないのよ。分かる？ 私の人生の浪費なのよ！」

先生は怒鳴ると同時に、鍵盤を強く叩いた。ベーゼンドルファ―は甲高い悲鳴をあげて私を非難する。

ピアノの残響と自分の心臓の激しい鼓動だけが私を包む。先生は大きなため息を一つ吐いた。

「あんたはね。音楽を愛する者が、メフィストフェレスに魂を売ってでも手に入りたい才能を、神様から与えられているのよ。だからあんたは一途にピアノを弾く義務があるの」

「すいません」素直に頭を下げた。

『ここで一言でも言い訳や反論したら、死亡フラグだし！』

「全く、信じられないわ。」

まともに鍵盤に触れてないんだったら、足を骨折して、リハビリで歩行訓練する陸上選手と同じね。

……ちょっとアレを弾いてみなさい」

アレとは先生が作曲した練習曲で、ピアノを歌わせるために重要なタッチを確認するもの。促されるままベーゼンドルファーの前に座り、注意深く指を走らせ続けた。

初めて先生にレッスンを受け始めた頃、私はひどく困惑した。先生が20回や30回もの反復練習をさせなかったから。

先生はまず私に、その日に演奏する練習曲の楽譜を、20分以内に完全に暗譜するように言う。

この作業の目的は集中力を養うこと、そして耳の訓練を行うための準備だ。

楽譜を完全に暗譜することで、音の長さ、音の強さ、音質そのものに細心の注意を向ける準備が出来る。

次に、音の性質を綿密に観察し、演奏全体の確然とした性格を探り出す。これにより弾き始める前から、演奏の誇大な表現を取り除く。勝手気ままな演奏は許されない。

暗譜を終えると小さな箇所ごとに区切り、非常にゆっくりと弾く。この時、絶対にミスは許されない。これを30分続け、10分休憩する。この作業をただひたすら辛抱強く続ける。私の集中力が落ちた時点でレッスンは終了する。それ以上の練習は無意味だからだ。そしてパズルを組み上げるように、一曲を弾きあげる。

最後に、自分の演奏に批判的な耳を傾けながら、一曲を通して弾く。この時、厳格な自己制御によって、自分のタッチを絶えずコントロールすることが欠かせない。

「作曲者へ最大の敬意を払いながら弾くこと」それが先生の口癖だ。私はこの練習を続けることで、昔とは全く違った耳を持つようになった。

母に教えられていた頃は、音の高さばかりに気を取られ、個々の音の強さの微細な差異や、音の長さの微細な差異を聴く重要性に、

あまり気が付いていなかった。先生は言う。

「朋子、音楽で大切なのは『音と音の間』なのよ。

鳴っている音だけじゃない。

鳴らした後、次の音にゆくまでのピアノの『息吹』がとても大切な
の。

心を研ぎ澄まして、その息吹に耳を傾けなさい

「

最初の二年間はこのレッスンだけだった。

先生はこのレッスンで、私に徹底的に演奏の基礎を教えてくれた。
指と腕を自然に保つこと、即ち筋肉の緊張を解き、腕を完全に弛緩
させる感覚を得ること。正確なタッチを得るための運指法。体に歪
みを残さないためのストレッチ。集中力と記憶力の錬成。素晴らし
いピアノリストの演奏に触れること。

今は主にベートーヴェンの曲を練習している。先生曰く。

「今のあなたには、どの作曲家の曲よりも、ベートーヴェンが必要
だと思うの。」

これからの長いあなたの人生のためにもね

「

練習を終えると私たちは紅茶を飲み、その日あったことを雑談す
る。先生はテレビも新聞も見ないので、全く世の中の動きを知らな
い。

「うん、そうね……思ったより悪くない」

先生はついさっきまでの剣幕が嘘のように、晴れやかに微笑んで
言った。私はほっと胸をなで下ろした。ひとまず天気は持ち直した
のかも？

「朋子、何でもいいから、ちょっと弾いてみなさい」

側に立って指をじっと監視していた先生は、部屋の入り口の近くに椅子を据え、左耳をピアノに向けるようにして座った。その一連の仕草の間、先生の目は、少しも笑っていなかった。それどころか、むしろ怒っているようにも見える。どうやら、まだ雨が上がったとは言えないみたいだね……。

私はずっと練習を続けていた、ベートーヴェンのピアノソナタ『悲愴』を弾いてみようと思った。先生が私にずっと弾かせようと練習させ、聴くにたえないので諦めた曲なんだけど……。

いつもなら、間違いなくバツハを弾いていたと思う。

私は、こんこんと湧き出る泉のような清冽な旋律を、ずっと愛していたから。でも今は、ベートーヴェンを弾いてみたいと思った。

なんでだろう？ 私の中で、何かが動き始めている。

深呼吸を一つした。忘れていたことを思い出したように一つの確信が心に浮かんた。

『心は水のように器によって形を変えるもの。だから声を聴けばいい　ただ感じればいい』

今まで嫌悪していた「彼」に語りかけながら弾き始めた。

時の流れを拒絶しているこの部屋に、限界まで張りつめられた無数の絹糸のように、みるみる緊張が張り巡らされてゆく。部屋に劇的な緊迫感が満ち始める。鍵盤に夢中で指を走らせ続けた。

『いける、いけるよ！

落ち着け私、声を聴き取ろう。感じよう
』

『泥の中を苦悩で這い回りながら、いつも天を見ようとしていたあなた。』

私はあなたに顔を背けながらずっと弾いていました。

あなたは孤独や絶望を友として　　生きることの意味を問い続けていた人なんですね　　』

ベーゼンドルファーは、以前の私からは考えられないような気高さをもって歌っていた。

今彼女は初めて、私をパートナーと認めてくれていた。

女王は比類無き気高さと威厳をもって、哀しみを深く激しく歌いあげる。甘美に、時には誇り高い女が、泣き叫びながら男の不実を詰るように。

私はメロディを紡ぎながら白昼夢を見ていた。

蒼い二つの月が見える　　いつか見た夢の続き。

赤毛と黒髪の少年は、遅く賢明な若者に成長してゆく。血は繋がってはいないが、彼らの絆は本当の兄弟以上に強く、美しい。彼らは父母を慕う虐げられた群集と共に、約束された地へと向かい、同胞を守護する激しい戦いに身を投じてゆく。兄弟の知略と武勇は同胞の人々の希望を叶え、束の間の平和が訪れる。

気付くと　　指から火花が迸り出るように第一楽章が終わっていた。

第二楽章、兄弟たちに恋の季節が訪れる。

黒髪の兄は清らかな美しい黒髪の巫女を愛し、恋情に身を焦がす。

王となった赤毛の弟は次々と美しい乙女たちと夜を重ねるが、充たされぬ想いに苦悩している。同性である兄を愛しているという許されぬ異端に。その法を守護する者が己であるという矛盾に。

赤毛の王は同胞を護る戦いに勝利しながら、自らの想いを殺そうと懸命に足掻き、のたうち回る。

第三楽章、赤毛の王の想いが心に溢れ、涙が止まらない。

彼は同胞を護るため、自らを欺き続ける。自らを捧げ尽くし、戦いの果てに兄を失った赤毛の王は全てを呪う。

一体何のための戦いだっただのか、と。国を維持してゆく法のために、赤毛の王は自らの手で兄の命を奪わねばならなかったのだから私は、弟の王の悲嘆を旋律の川へ流した。

『もう終わったから　新しく始まったから。

安らかに眠りなさい。あなたはもう十分苦しんだよ

』

弾き上げた。

今まで感じたことのない充実感に胸が満たされていた。先生は目を瞑り、何かを深く考えているような表情。旋律の余韻を味わった。自分が作り出した、静寂という音にじっと耳を澄ませていた。

「朋子、とても良かったわ!」

先生は立ち上がって、なんと拍手をした!

ちょ、先生が私に拍手するなんて、ちょっと考えられないことだよ!

先生は著名なピアニストのリサイタルに一緒にいっても、貶すこととはしなかったけど、滅多に誉めることはなかった。

その先生が私に、今拍手を送っている!　まじやバイよ、これは

……。

先生は満足した微笑みを浮かべて、私をきつく抱き締めてくれた。微かに甘い香水の匂いが、花束のように私を包む。

「神様はとても不公平ね」

先生は少し寂しそうに言った。

「毎日9時間祈るように熱心に弾いても、境界を越えられない子と、一ヶ月ほとんど弾かなくても、別人みたいに成長する人間がいるんだから」

『先生、私は裕晶を見つめながら、ずっと心の中で弾き続けていたんだと思います。』

今まで私に決定的に足りなかった箇所を

□

その後、時の経つのも忘れ、心ゆくまでベーゼンドルファーと歌った。私は夢見心地だった。弾いていると自然に涙が溢れてくるほど嬉しい。先生はその女王の歌声にじっと耳を澄ませていた。23時頃になって心配した母から電話があり、私は渋々、帰宅することにした。

「朋子、そういえばとても面白い子を教えることになったの」

先生はなんと、玄関まで私を見送ってくれていた！

「どんな人ですか？」

「あんたより三つ年下ね。あんたに負けなくらい才能がある。でもあんたとは全く違った音よ。持て余している情熱を叩きつけるような弾き方。とても面白いわ。無名の天才がこの街に二人もいて、それが私の教え子なんて、考えただけでもぞくぞくするわ」

「へっ聴いてみたいな」

「でもね、『私はピアニストになる気はない』って断言したわ。なんでも人のためにピアノは弾かないそうよ。」

私は、音楽に命を懸ける覚悟のない子には教えないって断ろうとしたんだけど、

『ピアニストにはならなくても、ピアノには命を懸けてます』っていうの　　ますます面白いでしょ。

母親がレッスン料は言い値でいいって言うから、結局引き受けたんだけど。

一度聴きに来ればいいわ!」

「男の子ですか?」

「女の子よ。人形みたいに可愛い顔してるわ。」

才能を持っていたても音楽的名声を欲しがらない人間を作り出すなんて　　神様っていうのはつくづく不公平ね。

私には才能のある人間を見極める力しか、与えてくれなかったんだから　　」

私はその日から、またピアノに触れる生活を始めた。

しかし今までの生活と違ったことは、裕晶が家族に加わったこと。裕晶はその年の四月に、私と同じ中学校に入学し、私の家と学校に、生命力溢れる萌え木のようにしっかりと根付いた。

裕晶は剣道部に入部した。運動神経も良く、成績も優秀なので、クラスのリーダー的な存在になっているみたい。

学年を問わず女の子に人気があるようで「ふーん、あっそ」って感じだけれど、その度に「根暗でいじけてるよりか、遥かにええことやん」と自分に言い聞かせた。

そうやって暮らしているうちに、夢を見ているように三年が過ぎ

た。

私は好きな小説家を通っていた公立高校へと進学し、浜松で開催される、国内外の素晴らしい才能を持つピアニストが出場するコンクールで入賞した。

父は私のために奮発して、ご褒美にスタインウェイのグランドピアノ（めっちゃめっちゃすごい！）を買ってくれた。

父はやって来たピアノを見て「がんばって世界一になれ」と、満足げに私の肩を叩き、何度も頷いていた。

でもさ、男っていうのは、何でも「一番一番」って騒がしいよね。音楽に一番なんてあるはずなのに。

芸術に一番なんてないんだよ？

もし何かがあるとすれば、それは自分らしい、自分の魂の色をしたものだよ。何でも整然とはつきりさせたいのなら数学者になるべきです。

先生は、ドイツへの音楽留学と、世界最高峰のピアノコンクールへ挑戦するよう私に強く勧めてくれた。しかし私は決心できず、神戸を離れられないでいた。

17歳の私は　裕晶を愛していたから。

裕晶は私のレッスンが終わると、先生の家まで、迎えに来てくれるようになっていた。

その頃、新聞や音楽雑誌で取り上げられたからかな　同時期に2人の男性から、付き合って欲しいと告白されていた。

一人は同じ高校のクラスメイトで、野球部のエース。無口で硬派な感じの子だったけれど、背が高く、整った顔立ちで女子から人気のある子らしい。

一言も喋ったことがなかったので、手紙を貰った私は、
「あ、これは誰かのタチの悪いイタズラに違いないや。」

……この程度の子供騙しの嫌がらせにはひっかかないよ。

なんでこういうことすんのかな、イミフ過ぎ！」と、断定し無視していたのだが、数日後、呼び出されて正々堂々と告白されてしまった。

これには正直、目が回りそうなくらい動揺してしまい、
「す、少し、か、考えさせて下さいませんか？」と変な標準語で囁みつつ、返答するのが、精一杯だった。

もう一人はコンクールの受賞パーティーで知り合った23歳の若手チェリスト。細身で女性的な容姿の人だったけれど、大胆で野生的な演奏をする人。

パーティーのちょっとした成り行きで、即興で一緒に演奏をしたのだけれど、とても心を惹かれる音を奏でる人だった。自分がまるでお姫様にでもなつて、紳士にエスコートされているような気持ち、とでもいえば近いかも。胸が高鳴ってゆくのが止まらないような幸福な体験をした。

「吉本さん、メルアドとか教えて欲しいんだけどいいかな？」

『とか？　とかって他に何を教えるの？

標準語ってなんか背中がかゆくなるんだよね……』　と思いつつも猫を被って微笑し、

「あ、いいですよ」的な軽い感じでメールアドレスの交換をした。

お互い音楽についての意見を交換しているうちに、なんか10回目くらいのやりとりから、結婚を前提として付き合っただけ、というような成り行きに陥っていた。

『　　ちよつと、なんでそうなるかな。

一人の音楽家として尊敬してる　ただそれだけなのに。どうして恋愛に雪崩れ込もうとするの？

断ったら、もう私とは音楽の話はしないってこと？

男の人って、やっぱり分かんないよ……』

「これっていわゆる、モテ期ってやつなのね」

ちよつと寂しい気持ちを隠しつつ、私は鼻息も荒く、得意げに裕晶に話した。

「モテ期？」

軽く聞き流すような表情の裕晶。

「あんたみたいに、中3の分際で一年中女の子に追い回されてる奴には分かんないだろうけど、

滅多に異性に興味を持たれない女子や男子でも、人生に何度か非常にもてちやう時期があるという、

素晴らしい時期のことよ」

「ふーん」

裕晶は全く興味の無いというような表情で、自転車を押している。

「まあ物好きな人がいるのよ。ちょっとブスでも、ピアノが弾けるって取柄があるからなんだろうけど。」

「チャンスだし付き合っちゃおうかな」

『「そんな気なんてサラサラなのに、何言ってるんだろ、私。なんでそんなこと、裕晶に言う必要があるのよ」』

「好きなの？」

「分かんないよ　　そんなの。」

「そういうのって　　何となくだんだん盛り上がってきて、好きになつてくもんじゃないの？」

「経験ないから分かんないけど」

『「これ何？　　すごい自己嫌悪なんですけど……ヤメヤメ、もうこの話は終わり。」』

「落ち着け私　　なんかおかしいよ」』

「　　バカじゃね」

静かな言葉だったが、裕晶の口調は怒気を孕んでいた。

私は自己嫌悪モードから一転、頭にきた！

「これって絶対お父さんからの遺伝だよ。もう　　本当に私とお父さんって似てる。」

「ちよつとあんた、裕晶の分際で生意気じゃん」

『「マジ落ち着けて私。完全に戦争モードじゃん」』

「裕晶の分際って、どういう意味だよ」

「私はあんたより二つも年上なんだよ？ ガキの分際でお姉様に向かってバカって、あんたがバカだってこと！」

『あーあ、またやつちゃった。もうムリだ。もう引き返せない。』

ヒロ、私の性格分かってるでしょ！ お願いだから、もう言い返さないで……

あんたが黙ってたなら、私はその後めそめそ泣くのよ。

私のね、一番つらいことって、ヒロと喧嘩することなんだよ。分かってる？

私にとってその時間が一番つらいの。

ヒロ……それってどうして分かる？』

「ちょっと男に好きだって言われて舞い上がってるから、バカだって言っただんや。本当のことやないか！」

「何よそれ。あんたには、ブスの気持ちなんか分かんないのよ！」

『そうよ。私はブスなの。』

だから私には資格がないの。

それが哀しいの、つらいの。

思いだけが募ってゆくのが怖いの 』

裕晶の頬を力いっぱい張り倒した。

叩いた右手が熱く火照っていた。無性に自分が惨めな生き物のように思えて、大好きな裕晶を叩いたことが切なくて、涙が止まらなくなった。私は坂の途中でしゃがみ込んで泣いた。

裕晶はハンカチを取り出し、子供をあやすように私に鼻水を囓ませた。

「姉ちゃんはブスなんかやあらへん。僕にはどんな子よりも可愛く見える。だから早く立って」

『今、なんて言ったの？』

立ち上がると唐突に裕晶は私の唇を奪った。

驚きで頭のネジが3本くらい飛んだと思う。突き飛ばそうとしたが、裕晶の腕の力が強すぎて跳ね返せなかった。

「誰にも渡さへん、誰にも」

裕晶の鋭い確信を込めた言葉を聞いて、足の力が抜けていくのが分かった。裕晶の指が胸に触れた時、鳩尾で何かが弾けた音がしたように感じた。体が溶ける。

「今日はここまで」

そう言うつと裕晶は不意に体を離れた。

呆然と立ち尽くしている私の横をパトカーが通り過ぎて行った。私は促されるまま自転車に乗り、二人乗りで帰宅した。道中ずっと無言だった。上気した顔を見られないよう、裕晶の背中にぴったりと体を寄り添っているしかなかった。

玄関に着くと、私は自分の部屋に駆け込み、ベッドに潜り込んだ。夕食にも出て行けない。涼しい顔をして、父さんや母さんの顔を見ることがなかなか出来るはずないよ。

ドアの外で「またおまえら喧嘩したのか？」と父の呆れ声が聞こえた。

「アレが始まったから、もう寝る！」

そう叫ぶと、父は黙って階段を下りていった。しばらく生々しい感覚が収まらず、寝付けない。でも 朋子語録に従ってなんとか眠った。

翌朝、目が覚めると私は自分の望んでいることがはっきりと分かった。その日のうちに、同級生とチェリストに付き合えないと返事をした。

『私には愛している人がいます』と。

それから数日はなるべく裕晶と顔を合わさないように心掛け、食事の時は視線も合わさなかった。父と母は少し長い喧嘩をしていると思い込んでいたようだった。

母が父の会社の事務で遅くなった日、私は1階の応接室でピアノを弾いていた。家には裕晶と私しかない。私の耳は一つの音だけを心待ちにしてた。背後の扉がゆっくりと開く音。

裕晶が滑るように部屋に入ってくるのが分かった。

鼓動が激しくなり、ピアノの音色が艶めかしく濡れてゆく。無視してピアノを弾き続けた。心臓は潰れてしまいそうなくらい激しく震えていた。

『え、ちょっと、なに、すごい溢れてくる』

裕晶は私のブラウスの中に冷たい手を突っ込み、激しく私を溶かそうとした。我慢出来なくなつて、振り返って裕晶の唇を貪った。

裕晶は私の着ている服を、桃の皮を剥くようにゆっくりと脱がせた。

私たちは夢中だった。

触れ合う度に息をするのも忘れるくらい脳が痺れた。

世界と私と裕晶の境界があやふやになり 永遠と刹那がまるで等しいもののように思えた。

私が裕晶に 裕晶が私に 世界そのものが私たちに。

遠くから聞こえてくるのは私の嬌声だった。死と誕生が一度に押

し寄せて来たように、私は激しく喘いでいた。

玄関のドアが開く気配がしたと思った。研ぎ澄まされた私たちの五感は獣のように鋭くなっていた。私は飛び起きて、服を身に着けようと焦った。なんとか着衣を済ませると、母は部屋の扉をノックした。

「朋子、ヒロ君いるの？」

「うん」

「入るわよ」

母はゆっくりと扉を開けた。私は立ち上がって、極めて不自然な表情で母を迎えた。笑ったらしいのか、それとも怒ったらしいのか、まるで見当がつかない。

母の顔は強ばっていた。明らかに、この部屋で今まで行われていた生々しい営みに、気付いたようだった。母は何かを話そうとしたけど、そのまま言葉を飲み込んだ。それから無理に笑顔を繕った。

「ケーキ買ってきたから、三人で一緒に食べよ。紅茶を入れるね」

「うん、分かった」

引きつった笑顔でやっと一言そう口を開くと、母親はリビングキッチンへ歩いていった。

「どうしよう」

私は不安に駆られ、裕晶を抱き寄せて言った。

「ええよ。今日、俺、叔父さんと叔母さんに言う」

「何を？」

「俺が18歳になったら、姉ちゃんと結婚させて下さいって。許してくれへんのやったら、一緒に家を出よう」

裕晶は私の上気した頬に触りながらそう言った。覚悟を決めた凛々しい表情だった。裕晶が、私の背を追い越し、私をしっかりと包み込んでいることに気付いた。裕晶の胸は逞しく暖かで、大きかつ

た。

脳裏に聴衆の前で演奏するピアニストの私の姿が過ぎった。裕晶はまだ15歳、私は17歳。社会的に何の力もない。両親の元を離れることになれば、演奏者としてのキャリアは中途半端に終わってしまうだろう。

でも私は裕晶を愛してる。どこまでも裕晶と一緒に歩いてゆきたい。

裕晶への想いも音楽も、私にとってかけがえのない大切なもの。絶対に手放すことなんか出来ない。

そうだよ、そのどちらかなんて選べないよ。クラシックだけが素晴らしい音楽じゃないもん。幸いコンクール入賞しているのだから、JAZZとかもつと違ったことに挑戦すれば、ピアノで生計を立てられるはずだよ。裕晶と私くらいなら、きつとなんとか出来る。なんとかしてみせる！

『お年玉の貯金つてどれくらいあったけ？』

そんな雑念を脳裏から追い出しつつ、私は厳粛な気持ちで誓いの口づけをした。

普段通り、20時過ぎに父さんは帰宅した。

私たちはとても緊張して夕食のテーブルに臨んだ。これが私たち家族の、最後の晩餐になるかもしれないのだから。

母は私たちが思いつめた表情で黙り込んでいるのに気付いて、いつも以上に能弁に父に話しかけていた。父は訝しそうにビールを飲んでる。

「どないしたんや、おまえら今日ちよつと変やぞ」

父はまだ裕晶と私が喧嘩しているとでも思っているのだろう、ぎこちない二人の様子を冷やかすような軽口を叩いていた。三分後、

机を叩き激昂する父の表情が目には浮かんで、ぞつとした。マジでホラー映画より怒った父さんの方が怖いよ。

「叔父さんと叔母さんに話があります」

決心したように裕晶が口を開いた。それは夏の朝焼けのように爽やかな表情だった。

「ヒロ、改まってどうしたんや？」

私と母が異常に緊張する姿を見て、さすがに鈍感な父も、ただならぬ様子に気付いたようだった。

「高校卒業したら、姉ちゃんと結婚させて欲しいんです」

「ちよつとヒロ！ あんた阪神ファンでしょ？」

まずは内角高めにボール気味のカーブとか投げなさいよ。いきなりストレートなの！」

「なんやて？」

父はビールを嘔き出し、激しく噎せた。そして裕晶をぐつと睨んだ。ここからだ、怖いのは。

母は咄嗟に食卓からビール瓶を引いた。お願いだからプロレスの外乱闘のような、流血沙汰だけはマジ勘弁して。

「お願いします」

「ちよ、またストレートなの？ もう！ あんた死にたいみたいね！」

裕晶は深々と頭を下げた。なんだかドラマみたいだと、私は他人事のように思う。パターンでは、この後父親が食卓をひっくり返す。もう分かり切ってるから私と母は顔を隠しつつ、飛び退く態勢に入った。あーあ、肉じゃが食べたかったのに、みたいな感じで。

「ヒロ、空気を読みなさいよ、空気を。」

日本人は空気を読む民族なのよ。そうやって無用な争いを回避するの。

争いを最小限の被害で収めることを考えなさい。

こういう話は食事がほぼ終わって、父さんがいい感じになった時に始めるべきなの」

「そらちよつとまずいんとちゃうんか？ 戸籍上では従兄弟で結婚出来るかもしれへんけど、遺伝的には、ヒロのお母さんと翡翠は一卵性双生児やから、腹違い、いや種違いの兄弟と一緒にいるんと違うか？ よう分からんけど」

父は以外にも冷静な口調で話した。父の口から「遺伝的」という言葉が出たのには、少々驚かされた。

「もう引き返せません。僕たちは愛しあっているんです！」

裕晶の声は必死。絶望的に四人の間の緊張は高まった。

『バカ！　なんか妊娠したみたいやん！』

私たち四人は暫く言葉を失い、黙り込んでいた。父はグラスを母に突きだし、ビールを注がせた。

「おまえら」

父は半ば呆然としていた。ビールを呷りながら私たちを見つめる目は、明らかに私たちを他人だと識別していた。瞳によぎる戸惑いと拒絶。

『ダメだ。もうこうなったら　脅迫するしかないや』

「父さん、私たちを引き離そうとしても、もう無駄やからね。ヒロと引き離されるくらいやったら私は死ぬわ。父さんは知ってるでしょ。私は、『やる』って言ったことは必ず実行するんよ」

自分の決心を伝えるために、言葉を選んで冷静に言った。

音楽的想念からいうと、間違いなくここがこの曲のクライマックスの部分だよ。だから決して怖じ気づいてはダメ。

目を逸らさずに、父の瞳を射るように見つめた。父も私を怖い顔で見つめている。暫くして、父は自分から視線を外し、深い大きな溜息を吐いた。

「もう、俺が何を言うても無駄みたいやな。

俺も、男と女が理屈で割り切れるもんやないことくらい、分かっているつもりや」

父はそう言ってから、食卓の上に箸を投げ捨てるようにして席を立った。残された私たちは、無言で淡々と食事を済ませた。

「朋ちゃん、後で久しぶりに一緒にお風呂に入る」

キッチンで一緒にお皿洗いをしている時に、母は何もなかったように笑顔で言った。

妙に間延びした、不自然な笑顔だった。

私と母は少々窮屈な思いをしながら、浴室に一緒に入った。黙って、母の背中を流した。お母さんと家のお風呂に一緒に入るのは何年ぶりかな？

家族旅行で一緒に温泉に浸かったりすることはあったけど、それを除けば 多分四、五年ぶりだね。中学校に入学するまで 自分が自分の体の変化を過剰に自覚するようになるまで 私たちは時々一緒にお風呂に入っていた。

でも親子とはいえ、お互いの体を、こうやってじっくり眺めるのは何だか少し照れくさい。

それは私が、生々しい女の感情を持つようになったから？
母の肌は白磁のように滑らかで、匂い立つようにしっとりとしている。

骨盤からの下の優雅な膨らみは、出産を経験した熟れた女だけが持つ美しさなんだろうね。

母はシャワーで体の泡を洗い流し、ゆっくりと浴槽に浸かった。立ち上がった母の姿は、ルノワールが描いた浴女のように、女の私から見ても艶めかしい。

母は浴槽に浸かりながら、ぼんやりと私の乳房を見つめていた。母の視線に気付かないふりをして、丁寧な身体を洗った。

「 私たちは愛し合ってたん」

母は唐突に口を開いた。

私に投げかけた言葉に、自分でも驚いている様子だった。適切な言葉を探し求めるように、暫くお湯に浸かった自分の足首を見つめ そして何かを決意したように、ゆっくりと次の言葉を見つめ

継いだ。

「私と妹の瑠璃は、幼い頃父と母が事故で亡くなって、滋賀の祖母の家で育てられたん。

元華族出身の祖母は、躰に厳しい人やった。

私たちはお互いを慰め合い、助け合いながら、一緒に育ったん。

いつの頃からか、私たちはごく自然に、愛し合うようになった。

最初是一緒に抱き合って眠るだけやったんが、いつからか、お互いの身体を確かめるように触れあってた。

そして年を重ねるにつれて、それは少しずつ違う形を取り始めたん。

私たちは触れあうことに夢中になった。

そうやって過ごしているうちに、私たちは高校を卒業したん

母はそこまで言って、浴槽に入るように手招きした。私たちは膝を抱え、向かい合うようにしてお湯に浸かった。お湯が勢いよく浴槽の外に零れ、排水孔に渦を作った。

「私もあの子も、決して同性を好きになるという傾向があったんじゃないんよ。

でもお互い、男の人を好きになったこともなかった。

私たちは鏡を見つめるように、ずっとお互いだけを見つめてた。私たちがお互いに抱いていた感情は、単なる性愛とは違ってた。それはもつと濃密で もつと切実なものやった。

それをうまく言葉で表現することはできへんけど……

でも一つだけ言えることは あの子は私の求めていた私やった」

お湯の中で母の膝小僧を触った。

染み一つない繻子しずのような肌が少し妬ましい。

私と母の肌の色は、ミルクとカフェオレくらい違う。母は、私の指に自分の指を絡ませて、何かを思い出したように笑った。

「よくこんな風に、瑠璃と向かい合ってお風呂に入ってた。

あの子は熱心に、延々と色々なことを喋り続けるんよ。

『英語の先生の発音が出鱈目で腹が立つとか、国語の教師は、全く小説の読解力がない』とかね。

いつも私は、じつとあの子の話に耳を傾けてた。

時々相づちを打ったり、笑ったりしてね。

おかげで何度も逆上せて倒れそうになったっけ

」

私たちは一緒になってくすくすと笑った。無邪気に笑う母は、十数年前の芸大生の頃に戻ったようだった。きつとたくさんの男の人が、清楚な母に恋い焦がれていたんだと思う。

「私たちは、別々の大学に進学したん。

私はピアノを勉強するために東京に行き、あの子は京都にある大学の文学部に入学した。

私は、あの子に東京の大学に進学して欲しかったんやけど、

あの子は『東京はゴミゴミしてるから、京都の方がいい』と言って、聞き入れへんかった。

きつとあの子は、自分が、いつも私と一組の存在だと見なされることに、嫌気がさしていたんやと思う。

私は瑠璃と離れ、初めて一人で生活した。

本当に孤独やった。

私は、自分がどれくらい精神的にあの子に依存していたのか 思い知ったん。

大学へ行ってピアノを弾く以外は、私はいつもあの子のことを考え

て暮らしてた。

暇があれば手紙を書き、電話をした。

でも電話をしても、瑠璃はとても素っ気なかった。

あの子は自分の世界が広がってゆくことに興奮しているようやった。だから私は瑠璃の声を聞くと、自分だけが世界に取り残されていくようで、より一層孤独になった。

それでも瑠璃に会える日を心待ちにしてた。

待ちくたびれた頃に、やっと夏休みがやってきた……」

母の話を聞きながら、自分と裕晶のことを思った。

『もし私が留学してしまったら、私と裕晶はどうなってしまんうんやろう?』って。

裕晶はきつと誠実に私を待ち続けるだろう。

でも私は、裕晶と逢えない日々を耐えることが出来るだろうか?

嫉妬心と不安から裕晶との絆を疑ってしまわないだろうか?

母は淡々と話し続ける。

「私たちは、瑠璃の下宿していた最寄りの駅で待ち合わせた。

新幹線の中で、私はずっとドキドキしてた。

早くあの子に、色々なことを聞いて欲しかった。

久しぶりに会った瑠璃は、とても大人びた雰囲気を身に付けていた。私たちは祖母の趣味でいつも上品な服ばかり着せられていたんやけど、

あの子は唇に真っ赤なルージュをひいて、

白いＴシャツとブルージーンズのカジュアルな服装で、改札口で待ってた。

私を見つけると、向日葵みたいな屈託の無い笑顔を投げかけて、大きく手を振った。

初夏の日差しを浴びた瑠璃は、とても可愛くていきいきしてた。

その隣にはお父さん、ううん 広志さんがおったん。

私たちは一緒に映画を見て、食事をした」

母の話があまりに予想していた通りなので、少し投げ遣りに先を促した。

「それで？」

母は俯いた。

そして暗い声で、咀嚼するようにとてもゆっくりと話し始めた。

「それで、私は瑠璃の下宿先に帰ってから、色々なことを聞いたん。あの人のことが本当に好きなん？ とか、あの人は何してる人なの？」とか色々。

私は瑠璃の答えに驚かされた。

「別に好きやない。チンピラやってるみたいだよ。もう何度も抱かれたん」

そんなことを平然と言つてのけるんよ。私は泣きながら詰ったわ。

「本当に好きで抱かれるんやったら、私だって納得できるし、祝福もできる。」

でも 好きでもない人に抱かれるなんて不潔やん！」

でもあの子はとても冷酷な表情で言い放った。そんな怖い顔をした瑠璃を見るのは初めてやった。

「そんなこと、全然たいしたことやない。私は私だけのもの、姉さんのものやない」

死にたいくらい悲しかった。

私の瑠璃は得体のしれない何かに汚されて、もう瑠璃じゃなくなっ
てしまったんやから。

そして自分に引き起こされた感情に呆然とした。

自分にそんな底知れへん、暗いぬかるみがあるなんて、思っ
てもみんかったから。

それは憎悪なんて生易しいもんやなかった。

それは瑠璃と広志さんへの、完全で、圧倒的な 殺意やった。

私は瑠璃が眠りに落ちるのを、闇夜に獲物を狙う獣みたいに、息
を潜めて待った。

瑠璃が寝息を立て始めた時、渾身の力を込めて首を絞めた。

その時私の腕は、自分でもびっくりするくらいの力が出た。
瑠璃の首筋に私の爪が食い込み、血がゆっくりと滴ってた。

私は自分の狂気に打ち震えてた。それは官能的な歓びさえあった。

自分が心から愛し、心から憎む者の命を この手で奪う。

あの時の瑠璃の目に過ぎった光が忘れられへん 疑問、恐怖、
悲しみ。

瑠璃は涙を流しながら失禁し、意識を失い、やがて呼吸をしな
く なった。

私はすぐに瑠璃の手帳から広志さんの電話番号を見つけ出して、電話をかけた。

そして瑠璃の口調を真似て、彼を呼び出した。

包丁を隠し持って、人影がまばらになった深夜の鴨川で、じっと広志さんがくるのを待ったわ。

広志さんが近付いてくると、歩み寄って、いきなり斬りつけた。でもあの人は場慣れしているせいか、包丁をかわして、簡単に私の手から包丁を奪った。

それから私の頬を何度もぶった。その痛みで正気にもどったんよ。

広志さんは言ったわ。

『瑠璃ちゃんから電話があつた。今から姉さんが包丁を持って、俺を殺しにくるってな。』

安心し　瑠璃ちゃんは生きてる。

あの子は咄嗟に死んだふりをしたんや。
でも一体なんでこんなことをするんや！

瑠璃ちゃんは、ずっと俺に君のことを自慢しとったのに　姉さんは私よりずっと綺麗で、優しくて純粹やつて。

俺があの子と友達になつたんは、街を歩いって偶然肩がぶつかって、大喧嘩したからなんや。

あの子は、俺のことを友達としか思ってたへん。
だから瑠璃ちゃんは、俺とはヤツテへん。まだ誰にも抱かれてへんと思う。

あの子が好きなんは、君だけやった。君の前で、少し背伸びして

みたかっただけなんやと思う。

瑠璃ちゃんは、もう俺にも、君にも、二度と逢わへんと言
てたわ
』

その夜、私は広志さんに抱かれた。

誰かに抱き締められていないと、孤独で狂い死んでしまいそうや
った。

結局、私が好きでもない男に抱かれる女になったんよ。

瑠璃はそのまま滋賀の祖母の元に帰り、小説を書いた。私たち三
人の物語を、舞台と名前だけを変えて。

あの子のささやかな復讐やったんやと思う。

瑠璃は本当に天才やったと思う。私はあの小説を読んで震えた。

瑠璃の小説は、その時の私の狂気を克明に描写してたから。

私がどんな風に広志さんに襲いかかったか、

その後、どんな風にあの人に抱かれたんか あの子は側で見て
たように書いてた。

あの物語に書かれていることはフィクションやけれど、

あの中に描かれている三人の心の動きは、全て真実やったと思う。

それからの私たちがどうなったかは、朋ちゃんも知っているとお
りよ。

私は広志さんを愛するようになって、朋子が生まれた。

あの人はカタギになってくれて、私たちは神戸へ移ったん。

瑠璃はボストンに渡って小説を書き続け、大学を卒業してヒロク
んを生んだ。

数年後の祖母の葬儀を最後に、私たちは二度と逢わへんかった。
これが 私と妹の物語」

母は心のつかえが取れたように、私に微笑みかけながら泣いた。
いつも母が浮かべている上品だけれど、つかみどころのない愛想
笑いではなく、素敵な笑顔だった。

「 瑠璃が最後に書いた小説を読んだわ。一緒に育った腹違いの
姉弟が愛し合う物語。

その小説は悲しい結末やったけれど 赦しに満ちた美しい小説
やった。

私はその小説を読んで、すぐにあんたらのことを思い浮かべたん
だからあんたらが、惹かれ合うかもしれへんっていう予感はずつ
と前からあったん。

でもね朋ちゃん 人生は小説のような造花なんかやない そ
んな簡単なもんやない。

人生はもつと生々しい香りがして、時には残酷で、儚いけれど美
しいもんよ。

あんたらは幸せになりなさい。

小説なんかになれへんくらい、平凡で幸せになり。

母さんはね、あんたとヒロくんが愛し合ってるんが、とても嬉し
いん。

とても救われた気持ちがあるん。

なんだか私と瑠璃が長い時を経て、やっと仲直り出来たみたい
な気がしてるんよ」

「 お母さん」

私は零れる母の涙を指先で拭った。そして母を、本当に美しい人

だと思った。

「どうしたん？」

「私 幸せになる」

「もちろん」

「ごめんね」

不意に胸がつまって、私はそんな言葉を口にした。

「なんで謝るん？」

母は柔らかい手で、私の手を優しく包んで尋ねる。幼い頃から私が泣きべそをかくと、母はいつもこうして慰めてくれた。

「分かれへん。ただなんとなく……謝りたかったから」

涙が溢れた。説明できない、色々な感情が緋い交ぜになった気持ち。でも確かなことは、父と母への感謝の気持ちが、胸を熱くさせていた。

「もう、ええんよ。あんたは自分の信じる通り、これから真っ直ぐに生きなさい」

「うん」

「母さん、もう逆上せちゃうから上がるね」

「うん」

「朋ちゃん」

母は、私を黒目勝ちのきらきらした瞳で見つめ、微笑んだ。

「あんだ、この頃とても綺麗になったわ」

母はそう晴れやかに言って、浴槽から上がった。

次の日曜日、ピアノのレッスンを休み、電車を乗り継いで、裕晶と一緒に叔母さんのお墓参りに向かった。

叔母さんが眠っている墓所は、裕晶が住んでいた大阪南部のベツドタウンにある。

車窓越しに広がる風景は目的地に近づくに連れ緑を増し、ゆつたりとした町並みは瀟洒で落ち着いた佇まいを見せるようになった。狭い道を、車が先を争うようにして通る神戸とは大違いだよ。

到着すると駅前には大手のマーケットや百貨店があり、紀伊国屋やミストといった神戸にもあるそういった類のものが全て揃っている。

日本とはどこへいても、こんな風にさほど変わらないものなんだろうね。でも神戸よりも圧倒的に緑が多い街並みだよ。

街全体が秋の日差しを浴びて、のんびりと寛いでいる。

行き交う人々の足取りも、心なしかゆつくりしている。遠くに背の高い、鮮やかな山吹色の銀杏並木が見えた。

「とても綺麗な所やん。ドラマに出てくる街みたい」

背伸びをして、綺麗な空気を胸一杯に吸い込んでから言った。

「うん、公園が多いから。よく母さんと一緒に散歩したっけ。」

ここからあの一番背の高いマンションが見えるやろ」

裕晶はその建物を指差した。

「うん」

「あの一番上に住んどってん」

「ふーん。すぐく眺めがいいんやろうね」

「うん、夜景が綺麗やった」

裕晶は少し寂しげに笑ってから、じつとその建物を見つめていた。

私たちは叔母さんが好きだった公園を散歩した。

舗装された道の両側には数十メートルおきにベンチがあり、幼い子供連れの夫婦やお年寄りが座って話をしていた。広場では少年が野球に興じ、溜池にはアヒルが鳴きながら泳いでいる。

公園は銀杏や紅葉、名前の知らない様々な広葉樹に囲まれ、緋色と黄金色に色付いていた。秋を本当に身近に感じる事ができる場所だ。

ここでいつか子供を育てられたらどんなに幸せだろう　私と裕晶の子供を。

裕晶の通っていた小学校にもいつてみた。校舎は神戸と変わらなけれど、運動場の広さは優に三倍はあった。

二人でゆっくり散歩を楽しんでから、私たちは駅前にあったハンバーガーショップで食事をした。私はフライドポテトが好物なんです！

隣の席ではバカっぽいカップルが、人目も憚らず、ポテトをお互いに「あーん」とか言って、食べさせ合っていた。

裕晶はそれを見て、大口を開いたけれど、無視して自分だけ食べてやった……とても可笑しかった。

食事を済ませると、駅からタクシーに乗って叔母さんのお墓がある霊園に向かった。

タクシーは車で15分ほど北に向かい、山の入り口のような所で停車した。周りにはほとんど民家の姿はなく、代わりに自動車教習所が二つ並んで向かいに立っている。霊園の中はとても広く、小高い丘を切り崩して作ったようで、所々元の森だった姿を留めていた。タクシーの車内が暖かったせいか、外は少し肌寒い。空気は澄みきって清々しい。

霊園内の道幅はゆったりと広くて、数台、「仮免許練習中」とい

う紙を貼った乗用車が、私たちの横を通り過ぎていった。どうやら地元の人々が、休日にこの霊園を自動車の練習場として使っているらしい。まあ、六甲アイランドみたいな感じだね。

なだらかな坂になった歩道を歩いていく途中で、汚いダンボールの蜜柑箱が目についた。

近寄って見てみると、ダンボールの中に、白いブランケットに包まれた、コロコロとした白い子犬が眠っている。触ってみるとタンポポの綿毛のように、ふわふわとした肌触りの毛。

子犬は目を覚まし、人なつこい仕草で甘えるように私の手を噛んだ。

「君は捨て犬くん？」

尋ねると、子犬はキョトンとして私を見つめている。

「あんだ私の家に来る？」

子犬は言葉を理解したように、小さなしっぽを懸命に左右に振って答えた。

「じゃあ一緒に行こっ！」

「姉ちゃんええの？ 叔父さんに怒られるで」と、とても不安そうな裕晶。

「だって可哀想やもん。二人で名前を考えながら歩こう」

そう言うつと裕晶は嬉しそうに子犬の頭を撫で、微笑んだ。

「やっぱ、姉ちゃんって、優しいな」

私たちは子犬を抱いて、ポチとかシロとか、思いついた名前を声に出しながら歩いた。

白くてコロコロしているという彼の特徴を考慮し、大福餅から名を取って、ダイフクと私が命名した。とても福々しい名前に、私たちはとても満足した。ダイフクも気に入ってくれたと思う！

「おつ、こいつ生意気に、付いてるやん」

裕晶はダイフクを抱き上げて嬉しそうに言った　気のせいか、こいつは神戸に来てから、どんどん下品になってゆく気がする。父や友達の影響かなあ？

「そんなこと一々言わんでも、分かってる！」

自分が耳まで赤くなつてゆくことが分かった。とりあえず私は裕晶のお尻を、思い切り蹴り上げてやった。

叔母さんのお墓は、霊園の中央にある最も見晴らしの良い場所に、ぼつんと一つあった。御影石のとても立派なお墓で、墓碑には彼女の書いた小説の題名が刻まれている。周りは美しく掃き清められ、真新しい香華が手向けられていた。母の話では、彼女の小説を愛する人々が、彼女を慕つて外国からもお墓参りにやってくるらしい。妬ましいほど幸福な人だと思う。彼女に関わった誰もが、彼女を狂おしいほど愛してしまう。

でも彼女は一体誰を愛していたんだろう？

彼女が愛していたのは小説と裕晶だけだったんだろうか？

私たちは秋桜の花束を手向けた。叔母さんが二番目に好きだった花らしい。今の時期に向日葵はなかったので、これで我慢してもらう。

私たちは黙って手を合わせた。

『何があつても、これから裕晶と一緒に歩いてゆきます』とだけ報告した。

ばらばらと細かい雨が降り出し、私たちは並んで空を見上げた。千切れた雲の谷間から、柔らかな陽光が漏れ出している。天気雨のようだ。

「ヒロ、叔母さんに恋人はおらんかったん？」

ちよろちよると動き回るダイフクを抱き上げ、手を合わせている裕晶の横顔を見て尋ねた。

「どうやる。僕の知ってる限りでは、おらんかったと思う。仕事以外では、滅多に一人で外出せえへんかった人やから。たまに一緒に旅行に行ったっけ。

うーん……だいたい僕と一緒にあったな」

裕晶は墓碑の周りを確認するように歩いた。それから親しみを込めて、自分の背丈ほどの墓碑をばんばんと叩いた。

「父親のことは全然聞いてないん？」

「なんか自慢げに、アメリカ力で精子バンクを使って、人工授精したとか言ってたな。

だから父親はおれへんのやって。あの人らしいと思う。」

とにかく滅茶苦茶な人やったから」

「どんな風に？」

「とにかく憑かれたみたいに小説を書いていた。

一度小説を書き始めたら、書斎に鍵かけて出てけえへん。

飯なんかろくに喰わへんし、風呂だってうるさく言わな、絶対に入らへん。

僕が面倒見てやるまでは、点滴打ちながら書いとっただけ」

「あんたが叔母さんの面倒みてたん？」

本当に滅茶苦茶な人だね。

「母さんが小説を書いてる時はな。でも毎日がお祭りみたいで楽しかった」

「それであんたが赤ちゃんの時、よく餓死せんかったね」

「さすがに三年くらいは、小説書かへんかったらしい」

「ふーん」

自分の母が、叔母さんでなくて良かったと少しほっとした。

「何でも一所懸命になってまう人やってん。何かやり始めたら、本当に命懸けてやってしまう」

「お母さんのこと大好きやったんや」

裕晶は影が差したように、一瞬寂しげな表情を浮かべた。

「母親っていうより、なんか親友って感じやったな。でも、今は親子がおる」

胸が締め付けられるような、静かな大人の男の表情だった。

『ちよつと、そういう男っぽいところ、急に出さんといてよ。』

『なんかエッチな気分になるやん』

「あんた、なんで急に呼び捨てなん？ まだガキのくせに偉そうにっ！」

ときめいている自分を気付かれなくて毒づいてみた。

「なんでって、もう今日から俺たちは姉弟じゃないから。朋子は俺の嫁さん。母さんもすごい喜んでくれてる」

「ふーん。じゃあたしはなんて呼べばええの？」

わざとふてくされたように言ってみた。

「今まで通りでええよ」

「ふーん」

「呼び方が気に入らへんの？」

「別に」

「怒ってんの？」

「別に……」

そんな会話に感動して、胸が沸騰したように熱くなった。絶対泣

きたくなかったので、必死にこらえようとした。でも次から次へと涙が溢れてきて、止まらなくなった。

裕晶は私を抱き締め、頭を優しく撫でてくれた。とうとう我慢できなくなつて声をあげて私は泣いた。

裕晶は全然泣かなかった。

自分だけが馬鹿みたいに泣き続けた。

その状況の滑稽さに気付くと腹が立つてきて、裕晶のシャツで思いつきり鼻をかんでやった！ 私たちはその場に座り込んで、長い間笑った。

私の顔は、降りかかる細かい雨、そして涙と鼻水で、ぐちゃぐちゃになった。この日を一生忘れないでおこうと思った。この想い出があれば、どんなにつらいことがあっても、がんばって生きてゆけるよ。

生まれて来て良かったって、本当に思った。

『ヒロ、今日のこと、絶対忘れたりしないよね』

いつの間にか小雨は止んでいた。ふと私は自分の周りを見回した。

世界はその姿を全く変えていた。

世界は美に溢れていた。

ありふれた夕焼けだった。
でも広がっているものは、これまでと全然違う。

目の前にある蜘蛛の巣を取り払ったように、初めてまっさらな気持ちで、世界に溢れている美を私は眺めていた。

微細なふるいにかけられた太陽光線の欠片は、自身の熱によって溶解し、青い空のデッサンを少しずつ朱に塗り替えてゆこうとしている。

鳥たちが巣に帰ってゆく姿があった。

今はもう遠くに去ってしまった雲は朱の光に浸食され、深いすみれ色に滲んでいる。

風が私たちの側を優しく通り過ぎていった。

裕晶が私の肩を叩き、背後を指差した。

虹だった。小さく可憐なアーチの欠片だった。

私はその美しさに魅せられ、激しく心が震えた。

私の意識は飛翔していた。

瞳が、見えるはずのないものを捉えていた。

色とりどりの宝石をばらまいたように煌めく、天蓋を埋め尽くす無数の恒星と銀河。

それら全ての息吹を感じることが出来る。

私は抱き締められていた。私は世界に抱擁されていた。

そのことに、全く気付いていなかったただけなのだ。

虫たちが美しい声で私たちを祝福している。

ダイフクは私の胸で、「僕のおかげだぞ」とでも主張するように、短く鼻をならした。

裕晶は私の背中を包むようにそっと抱いた。

「ヒロ、世界ってすごく綺麗」

その言葉以外、何も思い付けなかった。

「うん」

「綺麗すぎて泣けてくる」

「そうかな？」

裕晶が私の横顔を覗き込もうとするので、私はそっぽを向いた。

「ヒロ」

「何？」

「私、神様っておと思うわ」

「なんで？」

「感じるん、愛を、とても。『子供たちよ、愛している』って、人は自分に囚われて、気付かなくなってしまうんやね。

愛されてるってことに」

「何それ……何か悪いもんでも食べた？」

「いつかきつと、あんたにも分かる時が来ると思う」

私たちは虹が消え去ってしまうまで、夕焼けに染まる墓所に立ち尽くしていた。なんだろう、もういつ死んでも仕方ないみたいな変な充実感に胸が満たされていた。

私と裕晶に新たな日課が加わりました　ダイフクのお散歩っ！
先生とのレッスンがない日、私と裕晶は夕食後ダイフクを散歩させるようになったんです。

やっぱ私たちのカミングアウト（？）の余波かなあ　最初は犬を飼うことに断固反対したお父さんだけれど、最終的に我が家で最もダイフクを猫可愛がり（？）する人物となった。

父はよく犬小屋の前で、ダイフクに食事を与えながら、背中に哀愁を漂わせ語りかけてます。

私のレッスンがある日には、父と母と一緒にダイフクを散歩させてます。隔日交替だね。

ダイフクはピアノの音が大好きで、ショパンの子犬のワルツを弾いてやると、ピョコピョコと尻尾を振り、剽軽な仕草でぐるぐると部屋を駆け回って、嬉しそうに吠える。

私はダイフクの遊び相手にと、黒い子犬の縫いぐるみを買ってあげた。縫いぐるみを振り回し、じゃれる姿を、私と裕晶は『オセロ状態』と呼んでいる。その用法をここに示しておきましょう。

「あれ、ダイフクはどこ行ったん？」と裕晶。

「ダイフクなら、あんたの部屋でオセロ状態よ」と私、以上。

ダイフクは大層このパートナーを気に入ったようで、まだガキのくせに、縫いぐるみの上に乗っかって、妖しげな行動（？）をよくとっている　この点に関しては、少々先が思いやられる……。

幸運なことだけれど、ダイフクが私たち家族に与えた影響は、予想以上に良いものだった。

ダイフクは、私たちのカミングアウト後の生活を、父と衝突なく

スムーズに運ぶ、潤滑油の役割をしてくれた。父と母もダイフクを紹介して一緒に散歩にゆくことで、より一層絆が深くなったような気がする。

『棚からぼた餅ではなく、棚からダイフク』だね！

母に「これ以上家族を増やさないでよ」と釘を刺すと、「それはあんたらでしょ」と切り返された。

さすが亀の甲より年の功、一本取られました……。

高校卒業後、ドイツの音大へ留学することが内定した。入賞したコンクールの審査員をしていた、私の尊敬するピアニストの推薦により、有り難いことに大学から奨学金も出して貰えることになった。

先生とのレッスンも、ライバルの出現により、以前にも増して充実したものになっていた。ライバルとは、先生が新たに教えるようになった、私より三つ年下の女の子だ。

彼女はフランス人形みたいな顔をした華奢なお嬢様のくせに、鍵盤から火花が出ているんじゃないかと思うくらい、轟然と凄まじい勢いでピアノを弾く。弾いている後姿からは砂煙でも上がっているみたい。

先生によると、彼女は恐ろしく負けず嫌いな性格らしい。

彼女は、いかつい運転手付きのメルセデスベンツでやって来て「ふん、あんたなんかには絶対負けないわ」という風に、いつもつんとすましている。

会話を交わしたことはないけれど、彼女の奏でる音が好きなので、家事を手伝いに来たふりをして、ピアノを聴きにいつている。その際、先生はわざと私に聞こえるような声で「朋子のほうが断然良い音だわ」と言っ、彼女の闘志に火を点けて教えているので、いつ

も苦笑してしまう。

彼女の弾くチャイコフスキーはどれもチャームニングで、私はいつもうっとりしてしまいます。

もう一つの密かな楽しみは、彼女の連れてくる白い子羊くらいの可愛いペット。

先生には全く見えていないようなので驚いたけれど、図書館で調べると索^{さくめい}冥という麒麟の一種なのだそうだ。

賢そうな蒼い澄んだ目をしていて、何が好物なのか実験すると……シュークリームがかなりお気に入りみたい！

柔らかい白い毛を撫でると、音階のような美しい泣き声をして私をじっと見つめます。

とにかく怖いくらい幸福で、順風満帆な生活でした。

毎日が愛する人々とワルツを踊っているようでした。

私、わたし　　時の流れ、星の海　　たゆたう、たゆたう。

ふう〜ここまで一息に話してしまいましたね。少し退屈でした？
トモのわがままに付き合い、あなたが私の記憶に触れて下さったことを心から感謝しています。

本当にありがとう！

あ、そろそろ　戻らないといけない時間が来てしまったみたい
です。

あなたとこの星で巡り逢うことは出来なかったけれど　いつか
どこかの星であなたと出逢う幸運に恵まれたなら　私の歌を聴い

て頂きたいと思います。

そして握手をして、再会を喜び合いましょう。だって私たちは、友達ですもの！

…… なんですか、その微妙な表情は。

あなたはきつと忘れてしまっているのでしょうかね。遠い昔、私たちは美しい星で親友だったことを。

またそんな素敵な物語を紡ぎたい 心からそう望んでいます。

それでは、私が愛する人々と過ごした、最後の夜についてお話しますね。

その日はバレンタインデーでした。

私はその日18才になったのです。

私は裕晶に手作りのチョコレートと、母に手伝って貰い、初めて編みあげた緑色の毛虫みたいに不細工なマフラー、フルトヴェングラーが指揮した、ベルリンフィルのベートーヴェン・交響曲第九番のCDをあげました。

今思うと、私がベートーヴェンの第九を裕晶にあげたのは 虫が知らせたからだと思っています。

裕晶は、渡すのには少々遅すぎた不細工なマフラーを 本当に嬉しそうに首に巻いてくれました。

私の想像していた通り、淡い草色のマフラーはよく似合っていました。

裕晶は私に、少し照れながら、水色に透き通ったトパーズの指輪をくれました。そして、「二十歳までに、トパーズの指輪を好きになった人から貰った女の子は、幸福になれるんやて」と言いました。私はその言い伝え（？）を、素直に信じる事が出来ました。

私はもう充分幸福だったからです。

裕晶は私の左手の薬指にトパーズの指輪をそっとはめてくれました。

トパーズは私の薬指で、人魚の流した涙の色のように　水色に哀しそうに光っていました。

……泣き出しそうなくらい嬉しかった。

私はその日、裕晶とつまらないことで喧嘩をしました。

あいつが断りきれずに、幾つかのチョコレートを、女の子から受け取ったことが原因でした。激しく言い合いをする私たちの表情を、ダイフクが心配そうに、代わる代わる見つめていたのをよく覚えています。

結局、チョコレートを全て返却するということで、話は決着しました。私たちはダイフクと一緒に散歩する途中で必ず寄ることにしていた、住宅地の真ん中にある人通りの少ない公園で、キスをして仲直りをしました。

お互いの気持ちを確かめ合うような、素敵な口づけでした。

それが私たちの最後に交わした、お別れのキスになりました。

私が朋子としての生涯で、ただ一つ後悔していることがあるとすれば、その晩、裕晶と喧嘩をしてしまったことです。その夜が最後の夜だと知っていれば　私はきっと、一日中裕晶と抱き合っ

ごしたでしょう。

……でもそれは、あまりに望み過ぎというものです。

公園を出たところで、ダイフクが突然、手に持っていた細い鎖を強く引つ張って、道路の反対側へ飛び出しました。

ダイフクの勢いに、私は手からその鎖を離してしまったのです。

私は、咄嗟に鎖を掴もうとして、不用意に七歩くらい前に歩きだしました。その時、視界に強烈なヘッドライトの光が飛び込んできました。無理に引き延ばされたような、不気味な黒い車の影が、私の目の前にありました。「どくん」という、自分の心臓が収縮する鈍い痛みを感じました。

次の瞬間、私はタクシーにはね飛ばされてフロントガラスを割り、弧を描いて、タクシーの後ろにドスンという鈍い音を立てて、頭から墜落しました。衝撃や、それに付随する痛みは全くありませんでした。

私ははね飛ばされた自分の姿を、他人事みたいに空から眺めていたのです。

私は、道路の真ん中で、壊れた人形みたいに横たわっている、自分の姿を見つめていました。顔が全く傷付いていなかったので、少しほっとしました。目を閉じた自分の顔を、ちよつと綺麗だなんて思いました。

とても嬉しかった。

すぐに裕晶が私の側へ駆け寄ってきて、私の名を叫びながら、何度も揺り起こそうとしました。

ダイフクも甲高い声で泣きながら、申し訳なさそうに私の指を舐めています。

後頭部から、悪い冗談みたいに、血がどくどく流れ出していました

た。

私は『人間ってこんなに激しい勢いで出血するものなのね』と、半ば感心していました。

裕晶は首に巻いていた草色のマフラーをむしり取って、私の後頭部を圧迫止血していました。草色のマフラーは、みるみるどす黒く変色してゆきました。

頭が少し禿げたタクシーの運転手さんが、運転席から転がるようにして飛び出してきました。そして私の姿を一目見るなり、両手を突いて顔色を失い、その場にしゃがみ込みました。

裕晶は私を抱き締めながら、「救急車を早く呼べや！」と彼を怒鳴りつけました。裕晶が憤怒の表情をしているのを見たのは、その夜が初めてです。

裕晶は怒りでぶるぶる震えていました。

震えながら何度も何度も私の名前を呼んでいました。何とか裕晶の声に答えよう、目を開けて「大丈夫」と微笑もうとしても、無駄でした。私はぴくりとも動きませんでした。

私は自分が死んだことを理解しました。

すると誕生してから両親と過ごした日々の記憶や、裕晶と一緒に過ごした日々が　走馬燈のように、頭の中を駆け巡りました。死の直前、一瞬にして自分の生涯を回想するというあの噂は本当です。

私は神様に、ただ一度祈った日のことを想い出しました。

裕晶を一人の女性として、愛し始めた日のことです。

『裕晶に生きる力を与えてくれるのなら、自分の命を捧げる』と私は祈ったのです。

裕晶は今、こうして生きている。

それだけでなく、神様は私に十分なボーナスまで与えてくれたのだと思いました。

『でも裕晶と離れることが辛かった』

裕晶とこの星を旅してみたかった。裕晶の赤ちゃんを産みたかった。そして一緒に生きてゆきたかった。そう思った時、私は過去の私たちの姿を見ました。そこは天空に蒼い二つの月が輝いている世界です。その時間でも、私は裕晶を誰よりも愛していました。

私は自分が犯した罪を見ました。

心が千切れてしまうくらい、哀しい罪でした。

私はまだ決まっていらない、未来の私たちの可能性も見ました。形を変え、無限に織りなされてゆく、私たちの姿を見ました。その姿を見て、私はこれで良かったんだと納得しました。

私は死んでしまった朋子を必死で抱き締めている裕晶に、別れを告げました。

私は細かい粒子になって、裕晶を優しく包んであげました。無限に近い私の粒子の一つ一つで、裕晶に愛を伝えました。

『裕晶、覚えていて、私があなたを愛していたということ。全ての出会いは必然だということ。』

私という実存は、肉体の滅失とは何の関わりもないのだとい

うことを。

私たちは決して無に還るのではなく、形を変えて存在していく。
金の紐は結ばれ、繋がってゆく。何も失われはしないのよ。

あなたが私に逢いたいと想う時、私はどこにいても、きっとあなたを見つけ出してみせる。

幾つもの銀河を越えて、あなたを優しく包み込んであげる。

あなたが奇跡を信じることができるようなら、私たちはきつとまた再会できる。

私たちは繰り返しステップを覚えるみたいに、踊りながら再び出会っの。

私は必ずあなたの側にいる。だから 哀しまないで。
私たちはあの蒼い姉弟の月が輝く大地で出逢っていた。
そしていつかきつと また逢える。

これは全て私が望んだこと 全ての別れも必然の集まりだから
□

裕晶は抜け殻になった私を抱き締めながら、泣いていました。
私の想いは、しっかりと裕晶に届いたようでした。

私は姉弟の月が美しく輝いている、あの懐かしい星へ帰ろうと思います。
います。

何故なら、あそこは私たちが出会った 大切な故郷だから。

私は風が好き。

そよ風が洗ってゆく、あいつの横顔が好き。

私は雨が好き。

梅雨の長雨の中、私とあいつは一つの傘の下で、雨の滴を浴びて光る紫陽花を見た。

私は愛を歌いあげる、小鳥たちの真摯なさえずりが好き。

健気な花たちの美しさが好き。私たちは咲き乱れる桜の木陰で、家族で笑いながらお花見をした。

私は月が好き。

夜空を見上げ、月光に白く照らされているあいつの広い背中が好き。あいつのよく通る声、あいつの肌の香りが好き。

この指から紡ぎ出された幾つものメロディよりも、あいつが好き。世界中の誰よりも、私はあいつを愛している。

私はこの世界が好き。

生きているあいつを懷に抱き、ゆっくりと巡るこの星が好き。

あいつが呼吸しているこの星の大気、あいつが踏みしめているこの星の大地、人々のために雨を運ぶ雲たち、あいつの哀しみを癒してくれるだろう星々の煌めき。

あいつを優しく包む全てが美しく、全てが愛しい。

あいつは私のすべて。今までも、そしてこれからもずっと。

これは短い愛の物語。

青空を仰ぎ見ながら、雨を待つ小さな蛙みたいに、私が渴望して

いた 愛の物語。

友よ、勇気をもって、あなたが心から望む道を歩んでください。
この世界は自分の想いに出会ってゆく旅なのです。

ですから不安に怯えるのではなく、忍耐強く希望を保ち続け、行動してください。

そうすればきっと心に抱いた希望に出会える日がやって来ます。

蒔いた想いという名の種は、必ず刈り取られなければなりません。
あなたがこの世界に蒔く種子が、出会う人々への思いやりであり、
愛であり、希望でありますように。

これからあなたが紡いでゆく物語が、生を享けた歓びに溢れた、
美しい物語であることを祈っています。

あなたとの再会の日を夢見て おやすみなさい。

【裕晶・風の岬にて】

姉の死や、姉が僕に与えてくれたものについて、僕は誰にも語るうとしたことはない。

妻にさえ、姉について詳しいことを語ったことはない。

それがずっと出来ないでいた。

自分にとって、もう一度ゆっくりと心を引き裂かれる作業だったからだ。

何を語っても、言葉にしてしまえば嘘になってしまう。どう語っても、彼女の愛を充分伝えることは出来ないと感じていた。でも僕は今、語り始めようと思う。自分に起こった忘れられない出来事を。

人が何かについて真摯に語り始める時とは、かけがえのない何かを失った時だと思う。

大切な何かを失った時、即ち自分の無力さを痛感した時、人は初めて謙虚になれる。そしてその場にうずくまり、自分を見つめ直す。自分に何が足りなかったのか、自分がどんな過ちを犯したのか。

語り始めるまでには、膨大な時間が必要だ。

その時間は、失ったものの大きさに比例する。十年、二十年かもしれない。あるいは不幸にも、一つの生でその時間を得ることが不可能なことだってあるだろう。それは決して珍しいことではないのだ。

語ること、それは失った者を埋葬するという行為だ。
埋葬とは、死者のための行為ではない。自己の心を回復しようとする試みに過ぎない。

僕がこれから彼女たちのことを物語ろうとするのは、愛した人を失い、心の一部が死んでしまったからだ。一人は姉、もう一人は母。

僕は今まで書くことを全く放棄していた。弁解すれば、時が満ちるのをずっと待っていたんだと思う。

僕という幹から実が膨らみ、色付き、熟す。そして枝からその実が失われる時を。

失われた実は一体どこへゆくのだろうか？

小鳥や森の獣たちの糧となり、その種子は彼らによって運ばれ、どこかで新たな命として芽を息吹かせるのだろうか。

それとも足下でただ腐敗するだけなのだろうか。それはまだ分からない。

しかし僕には責任がある。生き抜いて、彼女たちに「俺、けっこう頑張ったやろ」という義務が。

失ってしまったものだけを鮮明に描くことが出来る。

輝き、色、香り、手触り、そして色々な想い。他の人はどうか分からない、しかし自分はそういう種類の人間らしい。

おそらく母が物書きになったのも、きつと誰にも言えない、こみ入った事情があったのだろう。僕にはそれが分かる。母は良きにしろ、悪しきにしろ「まとも」じゃなかった。

今、風の岬と呼ばれる漁村で、開業医をしている。

京都にある大学の医学部を卒業し、インターンを終えた翌月には、もうここで暮らし始めていた。僕には母が遺してくれた、まとまった財産があった。その遺産でこの村に小さな診療所を建てた。

今年八歳になる娘が二人いる。双子だ。娘を持つというのは良いものだ。母親に似て、二人揃って少々口うるさいが、日々美しく成長してゆく姿を見守るのは感動的ですらある。妻と共に僕の大切な宝物だ。

娘が奪われる日が遠からんことを心から願う。

村の人々は「先生、先生」と慕ってくれている。僕は水虫や便秘、骨折、漁師の人々の裂傷、子供の急な発熱、お年寄りの神経痛など何でも診る。毎日ただ話をしにくるだけのお婆さんだっている。夜中でも急患があれば、電話一本で往診する。毎日が忙し、それがとても嬉しい。話が少々逸れたな。

僕が語ろうとするのは、愛していた人々の記憶だ。

僕は、自身の為だけに物語を書くこうとしている。

記憶は少しずつ失われ、輝きを失ってゆく。それは仕方がないのかもしれない。

しかし彼女たちが与えてくれたものについて、どこかにずっと留めておきたいと思う。

少なくとも自分が生きているあいだ、その事実が失われてはいけないのだ。

僕には自分のものではない、奇妙な記憶がある。だが、生まれ変わりであるとか、そんな怪しい言葉が嫌いだ。そんな言葉を使って彼女たちとの絆を表現することは、彼女たちを冒涇することに他ならないと思っている。

僕たちは出逢っていたのかもしれない。そこで何かがあっ

たのかもしれない　しかしそんなことはどうでもいいことなのだ。
僕たちはこの世界で今生きている。それが一番大切なことから。

書斎の携帯端末を覗くと、単身赴任している妻から映像メールが届いているようだった。仕事に情熱を傾けるのもいいが、たまには娘の面倒をみるよと少し思う。愛しい娘たちは、毎日少しずつ、とびきりの美人に成長しているのだから。

二階の子供部屋を覗くと、娘たちはそれぞれお気に入りの楽譜や絵本を抱いて眠っていた。美しい寝顔だ。二人はどんな夢を見ているのだろうか？

僕は娘たちを護ってゆかねばならない。

かつて姉や母が自分を護ってくれたように。たとえそれで命を失うことになっても、彼女たちを護る。あんな辛いことは、もうたくさんだ。

僕はまず、うつろい始めている母の記憶から語り始めようと思う。

僕の中の誰かが言う。

『ただ一つの願いは、あの人に愛されたい。
たとえ世界の全ての人間を敵にしようとも
それが罪の始まりだ
った』と。

物心がついた頃から繰り返し見る夢があった。

そこは見たことのある風景で最も開けた場所だ。

どこまでも名も知らない黄色い花と、自分の膝の辺りまである草
が生い茂った平原が続いている。どこなのかは分からない。母と行
ったこともない　でも確かにその風景に見覚えがある。

そこは少し肌寒い。

風が通り過ぎてゆくと、草花はうち寄せる波のように忙しく頭
を揺らした。

見上げると夜空には二つの月がある。蒼い月は夜の闇を穿ち、向
かい合うように仲良く浮かんでいる。

名前は『双子の姉弟の月』僕はその名前さえ知っている。

透き通った光を放つサファイアブルーの双子は、まるで草原の先
にある村や森を、蒼く塗り変えようとくすくす囁き合っているよう
だ。

とても静かだ。

時折、風が髪を優しく梳くように流れていく。傍らには茸毛の馬
が一頭、草を食み続けている。

狼の遠吠えが、草原の先にある谷の方から微かに聞こえてくる。

ここからその谷は見えないけれど、その谷は確かにあるのだ。
そしてそこがこの国の果て　国境の谷には、高い石垣と空堀り
を備えた、石造りの堅牢な城塞が聳えている。

葦毛の馬は首を擡げ、狼の遠吠えにじつと耳を澄ませた後、潤んだ瞳を僕の方へと向けた。

「大丈夫」という風に頷いてみせると、安心したようにまた草を食み始める。

僕は草原に寝ころがり、ぼんやりと虫たちの声に耳を澄ませていく。

白樺の皮を巻き付けた竹笛を懷から取り出し口をつけると、甲高い素朴な音色が、誰もいない草原に響き渡る。

聞き覚えのある懐かしい旋律。この歌は誰かに　いや、きっと大切な人に教えてもらった歌だ。

笛の音は風に乗って運ばれ、大気へ拡散し、ゆっくりと辺りに溶け込んでゆく。

澄んだ女の歌声　歌声は自分が吹いていた笛の音とシンクロし
やがて導いてゆく。

慈愛に満ちた美しい歌声　これはきつと子守歌だ。

しかし子守歌がこの草原に聞こえてくることはあり得ない。この歌は、脳裏にずっと響き続けてきた、記憶の音なのだ。竹笛を吹く息を止めても、子守歌はずっと僕の中に留まり続けている。

女の顔の輪郭がぼんやりと浮かび上がってくる。

乳のような滑らかな肌、青い静脈が透けて見える細い首筋、尖った顎や薔薇色の薄い唇、愁いを帯びた碧眼や長い睫、腰までゆったりと波打つ黒髪、そしてしなやかな白い腕。

濃い乳白色の霧の中からゆっくりと近付いてくるように、次第に姿が鮮明になってくる。

『誰だろう、この人は？』

心に焚き火のような小さな熱と光が灯る。

闇夜に蛍を見付けたように、幻惑され月に手を伸ばす。熱は微かな痛みに変わり、痛みは軽い痺れに変わってゆく。

いつしか僕は、夢の中の男へ完全に同化している。

息が詰まるようなその女への渴望　と同時に、女の元へゆく決心もつかない。

結末は既に、大きな力によって決められている。

嘔吐しそうになる。酸い胃液がせり上がってくる。もう何日も水以外は口にしていない。

紅蓮の太陽が沈み、冴えた蒼い双子の月が昇ってくるのを何度もぼんやりと眺めながら、ただ一つの事だけを考え続けていた。しかしいくら答えを求めても　無駄なのだ。

たとえ誰も望まない、誰のためにもならない結果であったとしても、それは教義であり、この国の秩序を維持していく法なのだ。私情を挟むことは、決して許されない。

苛立ちに突き動かされるように愛馬の背に跨った。息をするのが苦しいほど動悸が激しい。手綱を握る手が震えておぼつかない怖いのだ。

猛者たちがひしめく戦場へ赴き、死が幾度も鼻先をかすめても動じなかった自分が、非力な女の元へゆくことに怯えている。戦場では誰よりも頼もしい葦毛の駿馬は、無情にも旋風のように疾駆した。

暫くすると、僕は女の姿を見つめ立ち尽くしている。

どこかの農家の庭先だろうか？

白い百合の花が咲き乱れている。僕の息はひどく乱れ、手には長い太刀が固く握られている。

切っ先から血を滴らせた剣の刀身は、月光を浴び妖しく銀の光を放った。

足下にあの女がいる。

女は足を崩し、ぐったりして動かなくなった男を抱きかかえていた。

男の喉元から濃厚な葡萄酒を注いだように血液が溢れ出し、血溜りを作りながら、地面へ染み込み始める。女の白いサリーは男の血を吸い、みるみる赤黒く変色していく。

男は既に意識を失い絶命しているのだ。

手応えはあった。何度も経験してきた手応え。渾身の力を込めて喉を突き通し、僅かに切っ先がうなじへと飛び出す感覚。

男は喉を押さえて地面を転げ回り、口から血の混じった叫び声をあげ、やがて静かになった。

辺りには血の臭いが立ちこめ、微かな死臭が漂い始めている。

この臭いもよく知っている。戦場の臭気。死神が冥府からゆつくりと近づいてくる臭い。この忌まわしい死臭の中で、僕は育った。

女は男の頭を抱きかかえ、呆けたように子守歌をとぎれとぎれ歌い始める。

ぼつりと歌声は止む。そして再び歌い出そうとした声は嗚咽に変わる。

女は非難の眼差しを向ける。碧眼は涙で潤み、頬に流れた涙は、

男の血と泥で混ざり合い、月光の中で透明な光のみを反射した。女の泣き顔を見て、この女を誰よりも美しいと思った。

僕は自分を責め続ける。

なぜ彼女たちをそっとしておいてやらなかったのだろうか？
なぜ愛されたいと望んでしまったのだろうか？

女の瞳は憎悪に青く燃え、自己の全存在をかけて僕を否定していた。

『人殺し』

その夢から覚めると、必ず涙を流していた。

全力疾走した後のように動悸が早い。

蒲団の中に潜り込み、この呪いの儀式が通り過ぎるのをじっと待つ。やがて鼓動が緩やかになると、手足が冷たくなり、待ち構えていたように、孤独と不安が交互に押し寄せてくる。

我慢できなくなってベッドから抜け出し、真っ暗な廊下を渡って母の書斎へと歩いてゆく。

扉から暖かそうな光が細長く漏れ出していて　その明かりを見ると固くなっていた心が解れ、いつも声をあげて泣き出しそうな気持ちになった。

「おかあさん」

母の書斎のドアを、恐る恐るノックした。

「どうしたの？　また怖い夢でも見た？」

暫くするとドアのロックを外す音が聞こえ、書斎の扉がゆっくりと開かれる。母は久しぶりに逢った友人へ向けるような、大袈裟で、少々演技がかった笑顔で僕を迎える。そして膝を屈めて僕を抱き締め、頬ずりする。

母の頬の冷たさや柔らかかさ、そして胸の温もりを確認して安堵する。

『よかった、ぼくはまだここにいる。あそこにはいない』

その夜は僕が眠りに落ちるまで、母は添い寝をしてくれる。眠りに落ちながら、自分を戒める。

『よいこになろう　もうわるいことはしちやいけないんだ』

僕は父の名を知らない　おそらく母も。

彼女が知っているのは、父親の遺伝子のデータだけなのだ。学歴、髪の色、容姿、そして簡潔な性格の説明。母は精子バンクを使い、人工授精によって僕を受胎したのだから。

「あなたは私の分身なのよ」

母は僕の瞳を覗き込むようにして、よくそう言った。それはまるで瞳の中に、誰かの面影を探しているようだった。

母の細く冷たい指が頬に触れると、嬉しさと哀しみが入り交じった、落ち着かない気分になった。肌を通して伝わる母の心は　いつも誰かを捜していた。

母はもの静かで美しい女性だった。

水泳が好きなせいかな体はほっそりとしていて、いつも年齢よりかなり若く見られた。菜食主義者ではなかったが滅多に肉を口にしない。彼女の好物は、有機栽培の納豆とひじきの煮付け、大根のサラダと出汁巻き卵、そしてきんぴらごぼう　要するに料理として、それほど手のかからないものばかりだ。

艶のある長い黒髪が印象的な人だった。銀色のフレームの眼鏡をかけ、睫がとても長い。黒目勝ちの瞳には深い知性と意志の強さが宿っている。

彼女は小説家だった。

十九歳の頃に書いた中編小説が文芸誌の新人賞を受け、その作品が芥川賞の候補となった。

そして二作目に書いた小説で、彼女は芥川賞を受賞した。二十歳

の才媛はその美しい容姿も手伝い、たちまち時代の偶像へと祭り上げられた。

テレビ番組やCM、小説には何の関係もない雑誌さえ、しつこく彼女に出演を依頼した。

しかし彼女は自分の小説以上に彼女自身が注目され、商品化されることを拒絶した。彼女は理不尽で横暴な世間の注目に耐えかね、ボストンの大学へと編入し、そこで学生生活を続けながら黙々と小説を書いた。

彼女の描く小説は特別だった。

彼女の小説は一般の読者だけでなく、同時代の批評家や作家にも絶えず待ち望まれていた。

作品は同年齢の作家たちとは別格の扱いを受け、全てが英語と仏語に翻訳され、ヨーロッパやアメリカでも好評を博した。どちらかというと地味な作風であったのに、書く小説全てが、純文学とは思えない売り上げを記録した。

預金口座には億単位の金が振り込まれたが、彼女は生活ペースや価値観を変えることはなかったし、自我を肥大させることもなかった。彼女は自分の小説に並み外れた自負心を持っていたけれど、だからといって自分が偉い人間だとは微塵も考えていなかったからだ。

『モーツァルトの音楽が素晴らしいといっても、
彼が素晴らしい人格を持った人間だったとは限らない』と、母はよく言っていた。

彼女は、その収入の大部分を匿名で世界の貧しい誰かに分け与え続けた。

しかしそれは彼女にとって、ただ単に排気ガスをまき散らす大きな高級車や、広大な屋敷や宝石がたまたま必要だけで、彼女はそういったものにまるで興味が持てなかった。

彼女は税金を払って旅行と生活が出来るお金と、静かで整頓された書斎、そして足をゆったりと伸ばすことが出来る浴槽さえあれば良かった。情熱の対象は 人類共通の記憶として燦然と輝く小説を書き上げること。

彼女の起こしたブームを、ある批評家は「戦後以降続いた文学の衰退に、新たな息吹と方向性を与えた」と表現した。

しかし人々からどんなに甘い賞賛の囁きを受けても、絶対的な潔癖さをもって、時代におもねることはしなかった。

なぜなら本質的に、彼女は自分のためだけに小説を書いていたから。

彼女は物語の中で呼吸をし、苦悩でのたうちまわり、怒り、恋をしていた。それは肉体と精神に、激しい消耗を強いた。彼女は点滴を受けながら小説を書き続け、脱稿する度に過労で入院する 命を削るような書き方だ。

それゆえ彼女の創作ペースは、半年で二編長編小説を書き上げるかと思えば、数年全く何も発表しないという風に、予測不能でまたそれがつれない麗人を追う青年のように、読み手の熱をより一層高めた。

彼女の小説は、様々な時代、様々な個性の男女によって彩られている。

しかし描かれていることは極めてシンプルなものだ。

愛する者を失った喪失感と孤独 人間を破滅させるほどの真摯な希求。

「人類はアフリカの大地で誕生した頃から、結局、誰かが誰かを求める『たかが』という部分に強く感応し、拘泥する生き物なのよ」

母は眼鏡を外し、僕の頭を撫でながら、よくそう諭した。

「ある時まで 私だけはそうじゃないと思っていた。

でも小説を書き始めて、誰よりも『たかが』を求めていることに気付いたの。

私も人類の『たかが』一個体に過ぎなかったの。

そしてキミが私の答え。キミはもう一人の私。

鏡に映しても決して触れることが出来なかった もう一人の私の姿」

僕はそういうエキセントリックでラディカルな母に育てられた。でも僕はどちらかというと、自分を平凡な男だと思う。

幼い頃の僕は、良い子になろうと必死だった。

母の用事は進んで手伝い、用事が無い時は頼み込んでまで、お使いへいった。

小学校では、同級生に公平且つ親切であろうと努め、イジメられている子を庇うためには喧嘩までした。勉強は一番にならない程度に熱心に頑張った。満点を取りそうになるとわざと間違った。

『自分は目立ちすぎてはいけない』そういう強迫観念に囚われていた。

しかし皮肉なことに、謙虚で成績優秀な背の高い少年を、女の子と先生は好むものだ。

僕は意に反して、小学校生活のほとんどを学級委員として過ごした。『委員長体質』とでも思われたのか？

目立ちたくないことが、逆に人目をひいてしまう。人生とは得てして そういうものなのかもしれない。

『成績優秀、正義感が強い。快活で優しい子、人の心の痛みがわかる子』通信簿にはそのような言葉が並び続けた。

その賞賛の言葉の一つ一つが、勝ち取ったトロフィーだった。母、クラスと同級生、教師たちの期待に応えようとずっと必死だった。

『嫌味にならない程度に成績が優秀であること。

正義感が強く、清潔で控えめであること。

たまに冗談を言って人を和ませること』

幸せになろうと必死だった。

一刻も早く、自分の心の底にある得体の知れない闇が打ち払われ、罪が赦される日を怯えながら待ち続けていた。

いつの頃からか新聞をよく読むようになっていた。

辞書を片手に、貪るように全ての記事に目を通した。おかげで小学校5年の頃には、ほとんど読めない漢字がなくなっただくらいだ。

僕が探していたのは悪と悲しみ 正確に言えば、誰の目にも善

悪がはつきりとした、極めて単純な事件だった。

夢中になって悲劇的な事件だけを探し続けた。

貧しく不当な扱いを受けている人間は、世界に溢れていなければならぬ。豊かで幸福な暮らしを営む人々が増えることは、自分の罪が赦される機会が減ってしまうことに他ならない。

事件が不幸で悲劇的な結末を辿るほど、その夜、安心して眠りに就くことが出来た。

『社会的弱者のために』

その言葉を新聞の中に、初めて見付けた時の高揚感を忘れること

が出来ない。まるで灰色の厚い雲間から漏れた一条の光が自分を照らし、天から啓示を与えられたようだった。

それは新聞の中では『自由・民主主義・人権』くらい、擁護しなければいけない、万能で正しい言葉だ。この言葉を疎かにする者は、魔女狩りのように、罵りの言葉で焼き殺されかねない。

僕にとって、欠くことのできない魔法の呪文になった。

「困っている人を助ける仕事ってなんやろう？」

母の喜ぶ顔を想像しながら、自分の真剣さを伝えるために、少し厳粛な表情を作って尋ねた。

その日はクリスマスイブで僕と母はケーキを食べていた。

母は僕の顔を、愛情の籠った眼差しで見つめた。息子の成長を喜ぶ表情。母のその表情を見るのが一番好きだった。

「そうね。物書き 少なくとも小説家じゃないことは確かね」

母はケーキの上に乗った苺を、フォークで弄びながら答えた。

僕は「メリークリスマス」と書かれたチョコレートを囓り、細く長い気泡を立ち上らせている子供用のシャンパンを飲んでいた。

「歴史をじっくりと眺めてみると、政治家でもないのかもしれない

」

母は真意を探るように、僕の瞳を見つめた。

「Professorionっていう言葉があつて、医者と弁護士、そして牧師はお金儲けのためにしてはいけない職業って言われてるけど、今の日本じゃどうかしら？」

自分の良心次第なんでしょうけど。

まあ、この頃の宗教にも色々あるみたいだしね

」

母はそこまで一息で言ってしまうと眼鏡を外し、テーブルに置か

れている緑のフェルトでレンズをゆつくりと磨いた。思惟に移る前の母の準備だ。猫が獲物に飛びかかる前に、腰を振るのに似ている。

母は眼鏡を灯りに翳し、丁寧に汚れの有無を確認してから、眼鏡をかけ直した。

「歴史において宗教という存在自体、開祖が死亡し、教団というシステムが確立された時点で、権威や権力を維持する機構に変容し、人を幸せにするという目的のものではなくなってしまうのかもしれないわね。」

現代ではどうかしら？

「マザーと呼ばれた聖女がいたね」

母が自己の思考の中へ閉じ籠もってしまう気配を感じ、慌てて質問をした。

「マザー？ お母さんってこと？」

「ん、ああ 修道女ね。」

もともと地理の先生だったらしいけれど、神の声を聞き、貧しい地域へ赴き、捨て子を拾って育てたり、病気にかかって死んでいく人の世話をし始めたの。

次第に彼女を慕う人々が集まり、彼女は新しい修道会を組織した。

彼女たちは、とにかく貧しく弱い人々に自分を捧げ、愛してるのよ。彼女たちは貧しい人の中に、きつと神様の姿を見ているのね。

神様は貧しき者、罪人、病人と共に生き、彼らを慰め、救うために手を差し伸べて下さる。

だから彼女たちも貧しい人と同じものを食べて、神様に祈りを捧げ、その人たちと一緒に笑ったり、泣いたりして暮らしているのよ」

何の前触れもなく、女の歌声が脳裏に降ってきた。繰り返す夢の中で聞いた、あの声だ。

清らかな歌声　目覚めている時に聞いたのは初めてだった。

女は頭の中に留まり、あの歌を歌い続けた。

英語でも仏語でもない、この世界では聞いたことのない異国の言葉。しかしその歌詞の意味を、僕ははつきりと理解できる。

『眠れ、眠れ、母の胸で。私は滅び、土へと還り、金の稲穂に姿を変える。』

私は滅び、稲穂となり、お前の体の肉へと還る。

私の涙は川へと還り、海へと注いで、魚に変わる。

私は還る、おまえに還る　わたしは、ここよ』

固い棒で殴られたみたいに額に激しい痛みが走り、女の断片的な記憶が蘇ってきた。

あの女が生活している姿　貧しい人々と共に笑い、涙を流し、

女神に祈りと歌を捧げる姿。

彼女たちは満ち足りて暮らしていた。僕は知っている。その種の人々が持つ確信に満ちた瞳、静かな表情を。

『俺は一体どうすれば良かったんだ！』

僕の中で、誰かが叫んだ。

あの女は俺を哀れんでいた　軽蔑し、拒絶していた　そして

憎んだ。

地下の水脈が破れ地上に噴き出すように、記憶の底に埋没していた、たくさんの人々の姿が溢れ出し、止まらない。

『兄の王よ、魂の滅失と肉体の滅失、私たちはどちらを選ぶべきでしょう？』

聞き覚えのある声で赤毛の男が言った

『私を海へ!』

黒髪の聖女は叫び、俺は力一杯、胸に抱いた彼女を崖から放り投げた。

『ただお前に抱かれ、お前の子を生し、育てられればよいのだ』

雪のような白い裸身に美しい金の髪を靡かせ、窓から双子の月を眺め、女が囁いた。

『俺はこの時をずっと望んでいたのかもしれない』
僕の中で誰かが呟いた。

これは一体なんだ?
熱い涙が頬を伝い零れた。うつすらと血の滲んだ涙だった。

「そんなこと僕にはできへん　そんな心の綺麗な人間やない」
感情を抑制出来なくなり、取り乱して同じ言葉を何度も繰り返した。どうにかしてこの状態から逃げ出したかった。

「どうして泣くの　キミちよつと!　目が真っ赤よ」
母は僕の手を取って、自分の手で優しく包んだ。冷静さを装っていたけれど、声が少し震えている。

「僕はそんなええ人間やない。そんなの無理や!」
泣きながら叫んだ。

『俺を哀れむのは止めてくれ!』
頭の中で誰かが怒鳴った。

「一体どうしたの?」
振り解こうとする僕の手を母は強く握った。そして息が出来ない

くらい強く、僕の体を抱き締めた。

母は僕の顔を覗き込み、怪物を見るような目で見つめた。何かが起こっていることに気が付いたようだった。

彼女は僕の中に、何かがいることに気付いた。

「キミは誰なの？ キミは本当に裕晶なの？」

キミは別に正義の味方にならなくてもいいんだよ。

誰にも言い訳をしなくていい」

母はまるで初めてキスするみたいに、眼鏡を外すべきか外さないべきか戸惑っていた。

そして決心したように眼鏡を外し、目を閉じて、僕の唇に触れるか、触れないかの、不器用なキスをした。

「キミがどんなに悪い人間でも 私はキミを世界で一番愛してるから」

自己の存在を見失い、涙に溶けてしまっくらい激しく泣いた。僕の中の誰かは、その言葉だけを待ち望み、ずっと深い闇の中に閉じこめられていたのだと思う。

その日から、奇妙な夢が僕を苦しめることはなくなった。

時間は他の子供たちと同じように、うち寄せる初夏の波頭のように、穏やかに流れるようになった。

母が僕を出産して12才になるまで、僕たちは大阪南部にあるベツドタウンに住んでいた。丘陵地帯を切り崩し、計画的に開発したいわゆるニュータウンで、緑や公園、遊歩道に囲まれた美しい街だ。

僕たちは『月に近いから』という理由で、15階建てのマンションの最上階に住んでいた。

今でもよく思い出す　月や星空の美しい夜に、母と二人でよく散歩にいったことを。

お気に入りの公園のベンチに座り、二人で色々な話をした。

小学校の行事や同級生の話、二人で見た映画や絵画について、母が次に書くこうとしている小説のこと。夏にはソーダのアイスクリームを食べながら歩き、公園で線香花火をし、真冬には軽トラックで売りにやってくる焼き芋を食べた。

小説の構想について聞かされる時は、宣戦布告の文書を受け取る外交官のように、とても緊張した。

僕は迫り来るハリケーンに備えるべく、生活必需品や調味料、冷蔵庫の食料の状況を点検した。そしてなるべく、破滅的な愛について書かないよう母に勧めた。

天才という言葉が、狂気を孕んだ集中力をもつ人間にのみ与えられる賛辞なら　母は紛れもなく天才だった。

彼女は一度小説を書き始めると書斎へ閉じ籠り、昼夜の別なく凄まじい勢いで執筆した。

30時間ぶつ通しで書き続けていたかと思えば、20時間眠り続け、42時間書き続ける　極めて非人間的な生活リズムで彼女は

小説を書き進めた。必然的に脱稿するまで、家事の一切は僕の仕事になった。

想像できるだろうか？

学校から帰宅すると、近所のスーパーに出かけ、夕食の食材や生活必需品（洗濯洗剤から母の生理用品まで）を買い揃え、掃除と食事の準備をして、母の下着を洗っている小学生の姿を。

おそらく現在の日本では、そう頻繁に聞く話ではあるまい。

しかし多くの子供が、接近する台風の上陸を期待しているように、僕にとって母の創作活動期間は、ちょっとした冒険だった。

銀行のカードを見つけたし、預金を下ろす、（予想通り、暗唱番号は僕の誕生日か母の誕生日だった。おそらく彼女に推理小説を書く才能はなかった）行ったことのない隣町のスーパーに、広告を見て自転車で買い物にゆく。

彼女の小説によって我が家の生計は成りたっていたから、母の役に立っている自分が誇らしかった。そして僕はその期間、母の保護者気分を十分に満喫していた。

恐ろしいことに、執筆期間中、母にとっての現実、完全に小説の世界へとシフトしてしまう。

書斎のドアを叩き続け、うるさく食事を取るように勧めると、母はリビングキッチンへ、夢遊病者みたいな足取りでふわふわとやってくる。

書斎からばさばさの頭で出てきた母は、ある時は運命の恋に落ちた乙女の瞳であり、ある時は復讐と嫉妬の炎に悶える女でありある時は死を切望している女だった。

僕がしつこく話しかけると、彼女は虚構の世界から戻ってきて、申し訳なさそうな表情で、砂を噛むように食事を取った。

「美味しい？」と聞くと小さく頷き、「まずい？」と聞いても小さく頷く。

多分味などは、何も感じていないのだろう　しかし点滴を打ちながら小説を書くよりも、よほど人間的だ。

食事が終わると、手を引いて無理矢理脱衣場に連れてゆき、風呂に入るようにしつこく説得する。

浴室に入ったのを確認して、着ていた服と下着を洗濯機の中に放り込み、洗剤の香りをする洗い立ての下着と、服を脱衣場に置いておく。たまに母が下着を穿き忘れると、書斎を叩いて下着を放り込むこともある　母が脱稿するまではこの生活が続く。

まさに、『欲しがりません、書くまでは』の世界だ。

唯一の救いは、彼女は長編小説であろうと、異常な集中力を発揮し二ヶ月程度で脱稿することだった。

母は自分が母なのだという意識が乏しい人間だったと思う。

母性が欠如していたというのではない。

まず彼女は母である前に、並はずれた感性と美意識を持った芸術家だった。

小説を書いていない時期には、名前の覚えられない凝った料理を作り、部屋を花で飾り立て、勉強の進み具合をこまめに見てくれた。執筆期間とは対照的に（迷惑なくらい）僕のために時間を惜しむことはなかった。

彼女と僕の関係は、少なくとも教科書や映画、小説の中に描かれている母子とは、全く異質なものだっただ。

彼女と僕はいつも対等な関係であり、親友であり、パートナーだ

った。

彼女は小さな頃から僕を子供ではなく、完成された人格のように扱った。

『自分で考え、自分で決断しなさい』

それが彼女の口癖だった。

今になって考えてみると、あるいはその事が、母が僕を（誰かと）セックスによって生み出していないということに、起因しているのではないかと思う。

母は、同じ年頃の子供がおもちゃをねだっている隣で、僕にニ―チエやサルトルについて説明し、感想や意見を求めた。正直言つてそんなことは僕にとつてどうでも良かったが、取り敢えず感想を述べると、一々感心したり、大人げなく同意できないと反論した。

しかしそうかと思うと、誕生日に突然、絵本やロボットのおもちゃを買つて来たり、「可愛いスカートとブラウスを見付けた」と無理矢理着せようとしたり（断固拒否した）、その教育方針は謎に包まれていた。

おそらく彼女はずっと向こうの世界にいて、この世界に帰還すると、その場の思いつきで行動していたのだろう。もしくは、何も考えていなかったというのが妥当な結論であると思われる。

また、母は何故か、僕を名前で呼ぶことを極力避けていた。呼ぶときは「おい」話すときは「キミ」。その理由はいまだもって不明だけれど、母の少し甘えの含んだ声を、今でも懐かしく想い出すことがある。

「なんだか世界に現実に存在する人間は、私とキミの二人だけみたい。」

周りの人々はみんな私が作り出したフィクション　仮想現実かもしれないわ」

母と過ごした最後の夜、彼女はドラマを見ながら思いついたように言った。

「あのさ、世間のまともな人たちにしてみたら、きっと僕らをフィクションやと感じるんじゃないかな。」

その方が絶対普通やと思う」

正月に一箱買って、まだ残っていた蜜柑を食べながら投げ遣りに答えた。瑞々しい果汁が口に広がり、舌にほどよい甘さが広がる。

ドラマの中では、戦争によって孤児となり、異国の地で育った男が故郷へ帰ろうとしていた。

「そうかしら？」

「そらそうでしょ」

「なるほどね。でもそれはある意味当たっているかもしれない。私たちはこの世界のどこにも属していないもの」

「僕は小学校の六年三組に属している」

断固抗議した。僕まで月の住人にされてはたまらない。

「そうね。キミは六年三組の学級委員だね。でも早く大人になりなさい。」

そして故郷に二人で帰りましょう」

『また始まった。次は一体どんな小説の構想だ？』

「故郷？　僕はここで生まれたんと違うん？」

蜜柑を頬張りながら、テキストに、母の調子に合わせて質問した。母が僕との会話で小説の構想を膨らませるのは珍しいことではなかったからだ。

「そうよ　でも正確には違う」

母は『正確には』という言葉を強調し、乾いた声で言った。母からは聞いたことのない、恐ろしく冷酷な声の響き。一瞬、テレビから聞こえてきた声なのかと、耳を疑った。

「正確にはどこなん？」

珍しく食い下がった。いつもの母の、虚構の世界での世迷い言とは思えなかったからだ。

一歩も引かないという意志で母の瞳を捉えた。それは母をひどく驚かせたようだった。

母は眼鏡を外して少し屈み、視線を同じにして僕を抱き締めた。そして僕の手を引いて、ベランダへと歩いていった。

暦の上では既に春は到来していたけれど、夜風ははつとするほど冷たく、母の手がとても熱を帯びていることを僕に気付かせた。いつも冷たい母の手が、こんなに熱を帯びているのは、寝込んだ時くらいのものだ。

母は遠くの街の光を物憂げにじっと見つめていた。母の横顔や、風に靡く長い髪を美しいと思った。

僕はまだ12才の子供に過ぎなかったけれど、痛いほど、この一瞬が永遠でないことを悟っていた。

暗闇の中で、僕に封じ込められている誰かが涙を流した。彼は早春の夜風から、忍び寄ってくる孤独の臭いを嗅ぎ分けていた。

僕は考え続けていた。

僕たちはいつまでこうやって、この距離で引き合っていたら
るのだろうか。

どちらかの重力がこれ以上大きくなってしまえば、どちらかを永遠に損なってしまうかもしれない。それを痛切に感じていた。そしてその破壊的な重力は、毎日僕の中で確実に成長しているのだ。はつきりとした性別を持たなかった僕の身体と心は、毎夜眠ることに男へと変わってゆく。

オリオンの三連星が、僕らを静かに見下ろしている。僕たちは早春の夜空を無言で眺めた。

「時間はただ無慈悲に流れてゆくだけなのかしら？」

キミに逢った時間の軸は、本当に12年前からだけなのかしら？

彼女は12才の僕にそう問いかけた。心の底から絞り出された、精一杯の愛の言葉だと分かった。

もし僕が彼女の息子ではなく、彼女に見合った時間を重ねていた男なら、彼女の小説のように、その時二人の間にささやかな奇跡は起きたのかもしれない。

しかし僕は未成熟なガキであり、体は彼女の肉によって作られている。母の手を強く握り返すことが精一杯だった。

母は微笑んだ。とても淋しそうに。そして小さな僕の手を見つめた。

「キミが大人になったら、きっと色々なことが分かるわ」

そういつて母は僕に頼ずりした。

今までたき火に当たっていたみたいに、とても暖かく柔らかい頬だった。

「 ヒント、言つてや」

「そうね 双子の蒼い月が輝く、約束された大地、かしら」

僕は確信した。

やはりただの悪夢ではない。男の声は幻聴なんかではないんだ。

あの場所は、確実にどこかに存在するんだ。

僕は夢の話を一言も誰かに話したことなどなかった。

誰かに話してしまえるほど、自分にとって些細な問題ではなかった。誰かに話してしまえば、取り返しがつかないことになるかと恐れてさえたのだ。

「どうしたの？ キミ、顔色が悪いよ」

潤んだ母の瞳は、12才のガキの僕を捉えていた。母の瞳に捕えられ、暫く動けなかった。

「なんでもない もう寝る」

「そっか。おやすみなさい」

母の手はまだ僕の体温を求めていた。しかしその場から離れた意志の力を振り絞って。

振り払った母の手が、群からはぐれた白いイルカみたいに、夜風の中を独りぼつちで泳いだ。今でもその白い手のことを思い出す度に、僕の心は締め付けられる。

それが母と交わした最後の会話になった。

ベランダから立ち去る時、独り月を見つめていた彼女の淋しそうな横顔を覚えている。

だから母を思い出す時、いつも始めにその淋しそうな横顔が蘇ってくる。僕の中で彼女は永遠に時間を止め、憂いを帯びた美しい姿

のまま、月光に照らされ続けている。

母は翌朝、飛行機で東京に発った。彼女が書いた小説が、優れた短編小説に与えられる文学賞を受賞し、その授賞式へ向かったのだ。母と500人の乗客を乗せ、飛行機はエアルートを大きく外れ、日本アルプスのなだらかな山の中腹へ墜落した。

人々の体は原型を留めないほど損なわれ、あるものは下半身が見つからず、あるものは完全に炭化し、あるものは激突した衝撃で、隣り合った乗客の二つの頭蓋骨が一つになった。乗員乗客のうち、生存者は皆無という悲劇的な事故だった。

僕がいつも新聞で捜し求めていた悲劇的な事故は、喜々として母をその懷に抱き、翌朝の朝刊の一面に書きなぐられていた。天才小説家の悲劇的な死　彼女は日本文学史における、何番目かの伝説になった。

結局、母の遺体が特定されることはなかった。

銀色のフレームの眼鏡だけが、無傷で発見されただけだ。だから母の墓には、遺骨は納められていない。彼女の書いた小説だけが納められている。

僕はそれをとて彼女らしい最後だと思う。

彼女はミューズに、自分の血と肉と骨まで捧げてしまったのだ。

僕は母が、『双子の月が輝く故郷』へ帰ったのだと信じている。一足先に彼女は旅立ったのだ。そしていつの日か僕は、故郷で彼女と再会できるのかもしれない。

僕は彼女になんて声をかけるだろう？

彼女は僕になんて答えるのだろうか？

母を失ったことで、僕はたった一人の肉親を失い、この世界に一

人取り残された。

でもそれはただ新聞の社会面に書かれている悲劇的な認識であつて、僕に起こつた正確な表現ではない。僕は新聞に書かれていた、あの僕が心待ちにしていた、甘い精神安定剤の本当の味を知つた。僕は自分の半身を失つてしまった。世界がその輝きや美しさ、そして意味を失つたということだ。

『キミはもう一人の私。
鏡に映しても、決して触れることが出来なかつた。もう一人の私の姿』

母が言つたように、僕はもう決して鏡の向こうの自分に触れることは出来ない。それは僕を孤独で打ちのめし、僕の中にいる誰かを呼び起こした。

しかしその一方で、母の死は安堵に似た奇妙な感情をもたらした。それは結果として数年後に起こつたかもしれない、致命的で、破滅的な運命を回避させたのかもしれない。

あの『双子の姉弟の月』は愛し合つたのだろうか？

僕には分かる。『姉の月』と『弟の月』は互いを愛し、どの星よりも強く引き合い、お互いを粉々に損ないそうになった。そして二つの月はその必然を恐れながら、ずっと切望していたのだ。

ある夜、女神は二つの月の想いを知り、姉の月を、違う星空へと旅立たせた。そして空には、ただ一つ弟の月だけが残つた。

今でも月が美しい夜には、僕は母の眼鏡を持って散歩に出る。そして月へ眼鏡を翳してみる。

眼鏡は何も歌わない。

ただ静かに輝いている。

深夜から降り始めた小雨は、天の水瓶をひっくり返したような豪雨に変わっていた。

僕はその激しい雨音で目を覚ました。

白いレースのカーテンを翻して窓の外をぼんやりと眺める。

まだ日の昇らない闇に閉ざされた世界は、墨で書かれた掛け軸の風景のように、密度の低い仄暗い黒にぐっしりと濡れていた。

道路に目を遣ると、溝から溢れ出た濁った雨水が、アスファルトを流れる薄い膜と雨の波紋を幾つも作り出している。目覚まし時計のスイッチを切った。午前3時40分　いつもより10分早く目が覚めたようだ。

足下で眠っていたダイフクが顔を上げ、気遣うような目で見つめている。僕は「寝とけ」という風に、頭を撫でた。

ベッドの下にきちんと畳まれている紺の作業ズボンを穿く。そして胸元に「吉本商会」と橙色の糸で縫いつけられている作業服の上着、滑り止めが付いた厚手のゴム手袋、そして替えの下着とズボンをナップサクへとつめた。今日はずぶ濡れになるだろう。

なるべく物音を立てないように部屋を出る。そしていつものように、隣にある姉の部屋の扉を開き確認した。

『姉はもういない　　姉は死んだんだ』

主を失った真つ暗な部屋　　だけどここの部屋には、失われた姉の残り香がまだある。乳のような甘い香り。愛しい人の肌の香り。

「いつてくる」

闇の中に、囁くように一言声をかけて、扉をゆつくりと閉めた。

階段を下りてリビングキッチンへと歩いてゆき、部屋の灯りを点ける。食卓の上にはお茶が入った水筒と弁当箱、朝食用のラップに包んだおにぎりが三つ置いてある。叔母さんが昨日の晩に作っておいてくれたものだ。廊下からゆつくりとした、干からびたスリッパの音が近づいて来るのが聞こえた。

「おはようヒロくん、今朝はひどい雨やね」

叔母さんは薄いピンクのパジャマの上に白いカーディガンを羽織り、身を縮め両手を抱くようにして入ってきた。

顔は病人のように蒼白い。その姿は、瞳が持つその人特有の表情を除けば、僕の母に瓜二つだ。当たり前か、双子なんだから。

「叔母さん、眠っというて下さい」

「ええんよ、自然に目が覚めたから」

叔母さんは味噌汁を温め直し、お茶を入れてくれた。僕は椅子に腰掛け、皿の上に乗っているおにぎりを頬張った。中にぎっしりと昆布が入っていて旨い。

「ヒロ君、どう、お仕事慣れた？」

叔母さんは湯気の立った蜆入りの味噌汁を椀に装って手渡してくれた。

「はい」

「みんな親切にしてくれる？」

「はい」

「そう、よかったわ。気が荒い人が多いと思うけど、みんな根はえ

え人ばかりやから」

叔母さんは力なく微笑み、そして黙り込んだ。

姉が死んでから、僕たち三人はずっとこうだ。

会話を交わす　そして次の瞬間には、姉の死がぼんやりと脳裏に浮かび上がってくる。

死化粧を施した姉の美しい顔。

地上から失われてしまった僕だけのもの。

僕を見つめる潤んだ瞳、乳房に耳を当てると聞こえてくる力強い鼓動、唇と舌の柔らかな温もり、細く長い指から紡ぎ出される心地良いピアノの音。

「明日は朋子の四十九日やね……」

叔母さんは我に返ったように、僕の顔を見つめ直した。

「はい」

「これで　本当のお別れやね。明日は正午からお寺へ行くから、ヒロ君も朋子と最後のお別れをしてね……」

叔母さんは、消えてなくなりそうな微笑を浮かべた。弱々しい、諦めの表情。涙をこらえようとしているのが分かった。

『嫌だ!』

黙っておにぎりを頬張り、蜆の味噌汁を口の中に流し込んだ。ただ激しい雨音だけが、何も映っていないテレビの砂嵐のように、虚しく部屋の中に響いていた。

叔母さんは、僕の食べる姿をぼんやりと眺めている。

「ごちそうさまでした」

両手を合わせて、頭を下げる。

「お粗末さまでした」

おばさんは僕の頭をちょんちょんと叩いてから、流しに食器を移し洗い始める。

給湯器の点火する「ぼっ」という音が、僕の耳に無遠慮に、悲痛に響いた。

それは斎場で姉の身体を棺ごと焼き払った、あの劫火が点火された音と同じだった。

姉を『僕の世界そのもの』を文字通り焼き払った劫火。

なぜ姉は18歳で死ななければならなかったのか？

この世の汚れから最も遠い人だったあの姉が。

もっと卑怯で、もっとくだらない奴らがこの世には溢れているというのに。

僕が死ねば良かったんだ。

姉の身体は、彼女の遺志によってバラバラに分解された。

姉はタクシーに跳ね飛ばされて後頭部を強打し、脳死状態に陥り救急隊員の心肺蘇生を受けながら、病院のICU（集中治療室）へと担ぎ込まれた。

彼女はこの事態を予測していたように、臓器提供意思表示カード（ドナーカード）を、自分の部屋にある学習机の上にそっと置いていた。

机の上には、楽譜と緑色の表紙の新訳聖書、朋子語録というメモ帳、家族四人で温泉にいった写真、そして天使の絵が描かれたドナーカードがひっそりと置かれてあった。

僕は自分独りで、姉と一つの世界を共有していると考えていた。同じように物事を感じ、抱き合い　そして何でも話し合っていると思い込んでいた。

しかしそれは僕の幻想に過ぎなかった。

姉はドナーカードのことなど、一言も話したことなんてなかったのだ。聖書を読んでいたことさえ、僕は知らなかった。

カードには、角膜以外の全ての臓器を提供する意志が記されていた。姉は彼女だけの世界を持っていたのだ。

あの時、僕は救急車の中で事態の恐ろしい成り行きにただ震えていた。震えが止まらなかった。

救急隊員は「ヨシモトさん！ トモコさん！ 聞こえますか！
ヨシモトトモコさん！」と、何度も姉の名前を大声で叫び、懸命に心肺蘇生を繰り返していた。

たった数十分前に僕の胸の中で、薬指にはめられた水色のトパーズの指輪を嬉しそうに眺めていた姉が、死んでゆくとしていた。僕はこれから起きようとしている事態を、うまく飲み込めなかった。左脳が論理的に理解し、整理することを拒んでいた。

『嘘だろ……こんなことあつてたまるか。
許されてたまるか。ふざけんなよ！』

こんな何かの間違いに決まってる……間違いなんだよ。おかしいんだよ。嘘なんだよ。
絶対ありえねえことなんだよ！
夢なんだよ
『』

頭の中では繰り返し姉の笑顔だけが、セピア色に滲んだ映画の回想シーンみたいに、何度も何度も繰り返されていた。

加害者であるタクシーの運転手は、そのまま警察の事情聴取に連れていかれ、叔父さんと叔母さんは僕の電話から一時間半後、市内の赤十字病院に車で駆けつけた。

「残念ながら、娘さんは深刻な状態です」

救急部長だと名乗った、猪首の浅黒いボディビルダーのような体躯をした背の低い医師は、冷静にそう言い放った。

叔父さんは厳しい表情で腕を組んで座り、叔母さんは血の気の引いた蒼白な顔で、僕の腕を握りしめて座っていた。

最悪だった。この世でこれ以上最悪な事態は考えられない。まだ核ミサイルが20分後飛んできた方がましだ。

僕はこの世の全てを呪い、世界の終焉を望んでいた。

「娘さんは脳に重篤な出血を起こし、深い昏睡状態にあります。」

こちらに運ばれてきた時点で、既に自発呼吸は停止していました。手術を行い、強心剤を投与していますが……現在は人工呼吸器を付けている状態です」

医者はCTスキャンの結果、心拍数と血圧、そして脳波が平坦だということ丁寧に説明した。

それは生存の確率が絶望的だということの婉曲した表現だった。

「娘は助からないということですか……」

医者は、叔父さんの目を真っ直ぐ見つめて沈黙した。

それが返事だった。

静寂は叔母さんの悲痛な叫びによって打ち破られた。

「朋子を助けて下さい！」

足りないものがあつたら、私の身体から切り取って下さい！

お願いします 先生お願いします 朋子を朋子を助けて下さい
！」

その言葉は僕が口にしようとしていた言葉、そのものだった。
しかし叔父さんは、会社のネームが入ったジャンパーのポケット
から、ゆつくりとそれを取り出したんだ。

「娘の部屋にこんなものが」

叔父さんは微かに震える手で、黄色いカードを医者に手渡した。
差し出されたそのカードを見て、医師の表情が硬くなった。

「広志さん！ 私はいや！ 私は、絶対にいや！」

叔母さんは、医者からドナーカードを奪い取ろうと立ち上がり、
叔父さんはそれを無理に押し止めた。

「私は娘の意志を尊重してやりたいと思っています……」
叔父さんは、全てを覚悟した目でそう言い、叔母さんの肩を子
供を宥めるように抱いた。

「翡翠、朋子は自分の意志をしっかりと持った子や、中途半端な考え
でこれを持ってたんじゃないと俺は思う」

僕の身体からは怒りに満ちた蒼い炎が揺らめいていただろう。
こんなことは絶対に許されない、絶対に受け入れられない！

「僕は反対です！」
立ち上がって、挑むように叔父さんの前に立ちはだかった。正直、
殴りつけたい気持だった。

「ヒロ！ おまえはだまつとれ！

おまえにそんなこと言う権利はないんや！

自分の女も護られへんような奴には、そんなこと言う資格はないんや！」

そう言い放った叔父さんの目は、怒りに燃えていた。

僕はその言葉を聞いて打ちのめされた。叔父さんの言う通りだった。姉は僕の目の前で殺されたのだ。

「朋子は精一杯生きたんや……だから精一杯死なせてやりたいんや」
叔母さんは、姉の名前を涙混じりの声で、何度も呟き続けている。

「分かりました。移植コーディネーターに連絡しましょう」
猪首の医師は決意に満ちた表情でそう言った。

事故から九時間後には、死臭を嗅ぎつけたハイエナのように、移植コーディネーターが到着した。

こういう表現は、非常に偏見に満ちた、間違った表現だと思う。彼らの向こう側には、生命の危機に怯えている患者が存在することだって、頭では理解できる。

でもその時の僕は、彼らの迅速な対応に敵意しか抱くことが出来なかった。

その頃は臓器移植法が施行され、日本の救急病院全体が、息を潜めて脳死患者を待っているような、微妙な時期だった。

コーディネーターは背が高く、色の白い、のっぺりとした顔の中年女性だった。

顔ははつきりと思い出せない。しかし身長は、僕と肩を並べて立っていたから、170?くらいはあっただろう。

病院の廊下に、冷たいハイヒールの靴音が、規則的なリズムで響き、近寄ってくる。

僕は直感的にその音を死神の訪れだと思った。

ゆっくりでもなく、早足でもない足音。それは移植コーディネーターに課された、歩行訓練の成果なのだろうと僕は邪推する。

『靴音が早すぎれば、患者の死を待ち望んでいたようであり、遅すぎれば、刻一刻と死滅する患者の肉体、言い換えれば　その中の臓器に影響する』

止めよう、こんな言葉は。

しかし僕は姉が関わる様々な物事に対して、いまだに冷静な感情を持つことが出来ないでいる。僕から姉を引き離そうとしたもの全てに、激しい怒りと憎悪を覚える。今まで感じたことのない種類の感情。凶暴な血の色に燃えた灼熱の溶岩が、外へ吹き出そうと、ぐつぐつと煮え滾っているようだった。

何故って？ そんなことは決まりきっている。

『姉は僕の全てなのだから』

姉は独りで死のうとする僕を抱いてくれた、たった一人の人間だった。孤独に震える微かな僕の声を、聞き逃さずに抱き締めてくれた、たった一人の女性だった。

それなのに、僕を残して何故先に逝ってしまうんや。僕をこの世

あああ

姉の身体が今引き裂かれている。僕の朋子が今、引き裂かれている！　美しい身体が、脈動する心臓が！

どうしてこんなことになったんだ。

「いつたいこんなことが許されていいのか。夢なら早く覚めてくれ、一刻も早く悪夢よ覚めろ！」

頼む頼む頼む誰か誰でもいい誰か誰か誰かなんとかしてくれ！か
かか神よいるのならとと朋子を助けて下さい早く早く助ける！そ
う悪魔、ああ悪魔悪魔悪魔悪魔だっていい！タマシイたたた魂
魂魂魂魂だって、命だってくれてやる！ただ誰か誰か誰か誰か
誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰かだれかだれかだれかだ
れかだれかだれかだれかだれかだれかだれかだれかだれかだ
れかダレカダレカダレカダレカダレカだれかだれかだれかだ
れかだれかだれかだれかだれかだれかだれかだれかだれか

『姉ちゃんを、僕の朋子を、誰かお願いします。僕を助けて下さい』

その時、僕はどこにいたんだろう。

病院だろうか、自宅だったのだろうか。

叔父さんと叔母さんはどこにいたんだろう。僕たちはずっと

一緒にいたんだろうか。

その時僕は何をしていたんだろう。眠っていたのか。それとも起きていたのか。事故から臓器摘出手術まで、幾日経ったんだろう？

覚えていない。何も覚えていない。

僕が覚えているのは、棺に納められ、姉が自宅に帰ってきた時からだ。

あの日は一体何日だったのだろう？

姉の命日は2月18日だから、あの日はきっと18日だったのだろう。

僕は自分が死神を背負って生きているのだと知った。死神が僕の愛した女性を奪ってゆくのだと悟った。

『もう誰も愛さない』

姉の死に顔を見つめ、僕はそう心に誓った。

降りしきる小雨の中、姉の通夜はしめやかに行われた。

近所の老人や子供、奥さん連中がたくさんやって来て、姉の棺の前で声をあげ、代わる代わる大声で泣いた。

高校のクラスを代表してやって来た二人の男女、そして担任の教諭と校長は、神妙な面もちで型どおりの御悔やみの言葉を言い、帰っていった。

私立中学の制服を着た、凜とした雰囲気を持つ女の子が、一人で大きな白い薔薇の花束を抱え、弔問に訪れた。

彼女は真っ直ぐ背筋を伸ばし、厳しい表情で姉の遺影を見つめていた。僕の側を通り過ぎた時の瞳の哀しみの色と、側にある泣き黒子が印象的な子だった。

周囲の人々は、彼女の繊細な美貌と、白い薔薇の美しさに驚き、ざわつき始めていた。

僕はその白い薔薇を一目見て、姉を送るのに相応しい花だと思った。そしてこの子が、姉の本質を正確に把握していると思った。

彼女は姉のファンだと名乗り、棺の中に白い薔薇を納めるように、叔父さんに頭を下げて頼んだ。腰まである栗色の髪が、さらさらと彼女の白い頬へと流れていた。

白い薔薇の花束は、姉のしっかりと組まれた両手の側に、そっと置かれた。彼女は叔父さんに深々とお辞儀をして、決然とした足取りで帰っていった。なんだか怒っているような後ろ姿だった。

漆黒のドレスに身を包んだ老婦人も、タクシーでやってきた。姉の慕っていたピアノの先生だ。

老婦人はやって来るなり、叔母さんと抱き合い慟哭した。

その悲痛な泣き声を聞くと、胸が引き千切られるように痛んだ。彼女は棺の前まで、叔母さんに支えられてよたよたと歩いてゆくと、姉の冷たく固まった頬を触り、愛弟子の名を涙混じりの声で叫んだ。

「朋子！ 朋子！ 目を覚ましなさい！
お願いだから目を覚まして！

朋子、なんで、なんで死んだの！
まだ何も始まってないじゃない、誰もあんたの音を聴いてないじゃない！

これから、これからだったのに……なぜなの……なぜ私みたいな年寄りをいつまでも生かして……こんな良い子が死んでいくの？」

彼女はそう神を詰った。それは僕の叫びでもあった。
なぜ僕ではなく、姉なのか？

老婦人は尚も死者に語りかけ続ける。

「朋子 今朝から右の耳が聞こえるのよ。
何十年も何も聞こえなかった耳が、若い頃みたいにいきいきと音が聞こえるの。」

朋子、あなたなんでしょ、私の耳を治してくれたのは、あなた
なんでしょ
「

僕はその言葉を聞いて、こらえきれずに嗚咽を漏らした。

姉は心臓や様々な臓器だけでなく、音楽家に一番大切な聴力さえも、他者に与えたのだ。

姉の身体は翌日焼かれ、無機質な純白の骨に変わった。

箸でつまみ上げると、華奢な骨が、カラカラ、さわさわと、乾いた音を立てた。僕はその骨を砕いて、全て食べてしまいたかった。

姉の骨壺を抱き、駐車場に止めてあるマイクロバスに乗り込もうとすると、斎場の近くにあるキャベツ畑の水たまりで、雀たちが集まって無邪気に水遊びをしている姿を見付けた。

その微笑ましい光景を教えてやろうと姉の姿を探すと、姉は僕の手の中であつた。

ふと空を見上げると、大きな虹が架かっている。

一人で見つめる虹は頼りなく色褪せ、僕に失ったものの大きさを冷徹に認識させた。

示談交渉に來た人々のことも、裁判での個人タクシーの運転手のことも、何一つ話したくない。

その時の僕の醜い言葉や、醜い行動を思い出したいくないのだ。

叔父さんは大人だった。

叔父さんは腹が立つくらい冷静で立派だった。

「朋子、朋子を返して！」

その日のことを想い出す度に、叔母さんの悲痛な叫びが、僕の脳裏に蘇ってくる。

その週の日曜日の朝刊に、姉の死を悼む記事が掲載された。姉が尊敬する、ある演奏家が寄稿したものだった。

『天才ピアニストの死を悼む』

彼女の演奏を初めて聴いたのは、新進気鋭のピアニストが集う、国内唯一の国際コンクールの会場でした。私は審査員の一人として、その末席に名を連ねていました。

彼女の演奏は、一次、二次の予選課題曲を弾いた時点で、まるで彼女の演奏会にやって来たのかと錯覚してしまうほど、他のピアニストから抜きん出たものでした。

おそらく彼女は、審査員のために弾いていたのではありませんでした。

会場に集まった音楽を愛する全ての人々のために、演奏できる喜びを全身に漲らせて弾いていたのです。

中略

三次予選で彼女が選んだ曲はベートーヴェンのピアノソナタ第29番変ロ長調「ハンマークラヴィア」でした。

ご存知のようにベートーヴェンがこの曲を作曲した当時、演奏できるピアニストが存在しなかったと言われる、彼が最も心血を注いだ作品の一つです。

私は少し「おやつ」と思いました。

「少し背伸びしているのかしら」と思ったのです。

この可憐なお嬢さんには、もっと繊細な別の曲の方が向いているように思えたのです。

しかし雄々しく堂々とした音を聴いた時、私はまだ少女のあどけなさを残すこの17歳の女性が、並々ならぬ技量の持ち主だと改めて気付かされました。

そして聴き進めてゆくうちに、私はこの女性が、一体どんな人生

を送ってきたのか、とても知りたくなりました。

彼女は老練でした。

しかしその音は老練でいて、瑞々しい輝きを放っていました。矛盾に満ちた表現で恥ずかしいのですが、私にはそうとしか形容できません。

瞑目して聴き続けるうち、私は弾いているピアニストが、ベートーヴェンその人なのではないかと疑いました。

彼の魂が、吉本朋子というピアニストの肉体を通じ、今、私たちに語りかけているのではないか？

彼女の透徹した音は、それほど聴く者をしてたじろがせる情熱と生への追求を歌い上げていました。

彼女の音は、彼の魂が到達した世界の姿を伝えようとする、一途で真摯な想いに溢れていました。

演奏が終わると、ホール全体に聴衆の全てが呼吸を止めているような静寂がありました。

そして爆発するような、いつまでも鳴り止まない拍手と歓声が沸き起こりました。

私は拍手をしながら、自分が涙を流していることに気がきました。神に選ばれた、数十年に一人の天才が現れたのだと、その誕生の瞬間に立ち会ったのだと、確信していたからです。

本選で彼女が弾いた、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番変口短調も本当に素晴らしいものでした。

彼女は二週間で、最も才能を開花させたピアニストでした。聴衆はすでに、演奏以上に彼女自身に魅了されていたように思います。

私はその後、授賞式のパーティー会場で、彼女にサインを求められました。

正直に言くと、私の方がサインして貰いたかったくらいです。演奏の感銘を述べると、彼女は初々しく頬を染めて微笑みました。私は、彼女が誰に師事しているのかを尋ねて納得しました。その人は、私が三十数年前、リサイタルに足繁く通ったあるピアニストでした。

私は「ベートーヴェンが好きですか」と彼女に尋ねました。彼女は嫌いだっただけけど、とても好きになりましたと嬉しそうに話しました。

「どんな時も、ずっと天を見ていた人ですから。彼の声に耳を澄ませるんです」

「彼の声が聞こえますか？」

「ええ、とても。世界の奏でる音だっただけ聞こえます」

彼女は澄みきった瞳で私を見つめ、はつきりと言いました。

「世界？ 世界はあなたになんて語りかけてくれるの？」

「子供たちよ、愛している。」

私はここに在り続ける 在り続けてゆく」

彼女のその静かな言葉に圧倒されました。この若いピアニストの十年後の演奏を聴くまでは、絶対に死ねないわ、と思いました。

「あなたはまだ若いんですから、そんなに生きることを急がないで。その時私の口から、ついそんな言葉が出てしまったのを覚えています。それほど彼女は浮世離れた、透き通った雰囲気を持ってい

ました。

私はその日から一年を経ずして、彼女の葬列に加わるようになりました。生きる喜びが一つ失われてしまったのです。

葬列の中で、彼女の師である、人々から忘れ去られたピアニストと会話を交わしました。

彼女は涙を流しながら、演奏活動を再開すると私に告げました。私は神に選ばれた者の遺影を見つめ、もう一度あのピアノソナタを聴いてみたいと思いました。

あの音は、彼女だけしか奏でられない　　そういう種類の音でした。

僕はこの記事を切り取り、アルバムの、僕と姉と一緒に微笑んでいる写真の隣に収めた。

『姉ちゃん……僕は姉ちゃんを独りぼっちでは逝かせへん』

早朝、僕は姉と共に旅に出た。二度と帰るつもりのない旅だ。

叔父さんと叔母さんが寝静まった頃を見計らい、母の位牌が置かれた仏壇から、白木の箱に入った姉の遺骨と、二人で作った想い出のアルバムをポストンバッグへと詰めた。手袋をはめ、カシミアのセーターを着込み、革のジャンパーを羽織り、首には姉の血を吸った草色の手編みのマフラーを巻いた。

僕は行ける所まで、北へ行くつもりだった。鮭が故郷の川へと遡上するように、漠然と自分の死に場所は、暗く冷たい海だと思った。一瞬にして心臓が止まってしまふくらい 暗く冷たい海だと思った。

新神戸駅から始発の新幹線に乗り込み、東京へと向かった。どうしても寄らなければいけない場所があったからだ。

姉がどうしても一緒にいきたいと言っていたデイズニールランド。

僕は車窓から、夜が明けてゆく街を眺めた。隣の席には、姉が一緒に座っているような気がした。

哀しみはない。とても安らいだ気持ちでゆつたりとシートに座っていた。これが最初で最後の 姉との旅になるだろう。

死ぬと決めてしまうと、とても気が楽になっていた。

新幹線は大阪、京都を通り過ぎ、滋賀の田園地帯を通り抜けていった。ビルや住宅の群が途切れた、とても清々しい風景。確かこの辺りは母が生まれ育った街だ。母は幼い頃、琵琶湖でよく水遊びをしたと言っていたっけ。

僕は母と暮らしている時、そんな母の幼い頃の姿を、兄のような気持ちでよく想像していた。

彼女がどんな風に、どんな友達と遊んでいたのか。しかし母の側には、どんな友達よりも親密な双子の翡翠叔母さんがいたのだ。

なぜだろう？

母は死ぬまで、叔母さんのことを一度も僕に話さなかった。

理由は分からない。でも彼女たちはきっとこの湖の畔で、夕暮れまで一緒に遊んでいたのだろう。

月の放つ淡い光に包まれ、水を浴びせあう幼い双子の姉妹の姿を、僕はじっと思い浮かべていた。

新幹線は名古屋を通り過ぎ、富士山の前を通り抜けてゆく。山頂に雪を頂いた雄大な蒼い姿。僕はボストンバッグから骨壺を取り出し、姉にも聳え立つ富士を見せてあげた。

名古屋から乗り込んできた、向かいの席に座るビジネスマン風の若い男が、その姿を新聞の陰から、ちらちらと覗いていた。

昼頃には千葉にあるTDLに到着した。姉が生きていたらとてもはしゃいで、僕の手を引っ張って中へ入っただろう。

姉は普段クールであろうと努めていたが、いざとなると、そういう子供っぽい、可愛いところがあった。僕はそんな姉を愛していた。

『ヒロ、ぐずぐずせんと早く行こ！ 二人でミッキーを捜すんよ』

そんな姉の弾んだ声が聞きたかった。小さな背中をもう一度抱き締め、彼女の香りを感じたかった。そんな時抱き締めると、彼女は決まって嬉しさで泣き出しそうな顔で、僕の胸に頬を寄せた。

のんびりと園内を散歩した。平日でも、恋人たちや子供連れの

家族がたくさんいることに少々驚きながら。

そして日が暮れると、僕はまた北へと向かうことにした。
暗く冷たい海を求めて。

東北新幹線に乗るために、一旦舞浜から上野駅まで帰り、キャッシュデイスペンサーで預金を10万円下ろした。姉の好きだったハンバーガーショップに入り、オレンジジュースとフライドポテトを少しだけ口にした。

座席から日の暮れた東京を見下ろすと、人々が洪水のように、次から次へと駅から吐き出されてゆく。

全く無意味な光景　その中に僕の大切な人はいない。

この世界のどこにも、もう姉はいないのだ。

蟻の群れのように無価値な人の群　この光景を認識している自身が、無価値なのだから。

僕はカプセルホテルを見つけて入った。血の付いたマフラーはボストンバッグの中へ隠した。背が高いせいか、特にフロントで怪しまれた様子もなかった。ただ単に金さえ払えば、客に関心がないだけなのかもしれない。

風呂に入り、バッグを枕元に置いて、泥の中に沈みこむように、深い眠りに就いた。

せめて夢の中で姉に逢いたかったけれど、姉は夢の中には出てこなかった。

翌朝、東北新幹線に乗り込み、盛岡へと向かった。

昨日まであった風景への興味は消え失せ、何もかもがウザくなった。美しい風景さえも、もう僕には無意味だった。

バッグを抱くようにして眠り、車掌が乗車券を点検しにくる以外は目を覚まさなかった。ただ一刻も早く、暗く冷たい海へ 死を与えてくれる場所へ辿り着きたかった。

盛岡は深い雪に覆われていた。

特急に乗り換え、北海道へと向かった。津軽海峡を越えると、海は徐々に僕の望んだ、暗く冷たい鉛色へと変わっていた。

大気を包む鋭い冷氣、生命を拒む、むき出しの自然の厳しさ。

函館から特急に乗り、札幌へと到着するとカプセルホテルでまた一夜を過ごした。暖かいウーロン茶を一杯飲み、泥の中に沈み込むように眠る 胎内のような安らぎを与えてくれる暖かい泥の中で神経が研ぎ澄まされていくようで、夢さえも全く見なくなった。

翌日の早朝、札幌駅から、ちょうどやってきた列車に飛び乗った。各駅停車の列車は疎林を通り抜け、のんびりと苫小牧へと向かっていくようだ。広大な台地は深い雪に覆われ、寂寞とした原野の景観を、車窓越しに映し出している。

僕は一刻も早く旅を終えたくなっていた。もう電車はうんざりだ。

大きなストープが置かれた苫小牧駅の待合室で一時間ほど休憩し、僕は日高本線へ向かう一両だけのディーゼル列車に乗りこむ。駅の待合室で、日高山地が海へ没したような、雄大な岬の写真を貼った観光ポスターを見たからだ。その写真を一目見て、息苦しくな

るほどの複雑な感情を抱いた。恐怖と哀しみ　そして懐かしさ。
ここが僕の探し求めていた場所だ。

列車は吹雪で遭難した旅人のように、独り黙々と進んでゆく。
強い風に吹き飛ばされ、所々雪が禿げかけた海岸沿いの村の景色
が、いつしか僕の心を穏やかにさせていた。

少々尻は痛い、故郷に帰ってきたようなのびやかな気持ちだ。
暖かい車内の中でバッグを抱き、鉛色の海を眺めた。

もうすぐ姉の元へゆける、そう思うと、すぐに安らかな眠りに包
まれた。

僕の心は幸福感に満たされ始めた。もうすぐ　幾らでも眠るこ
とが出来る。

昼前に、終着駅に到着した。

岬へはここからバスに乗り換えねばならない。暖房を入れている
はずのバスの車内では、座席の床に落ちた雪が、いつまでも溶けな
い。

外を覗くと、バスは海岸線に沿って走っている。

岬に近づくにつれて道は高度を上げてゆき、海岸線の南の果てが
見え始めた。

東側にも鉛色の海が広がり始めている　僕はこの岬を知ってい
ると思った。

バスを降りると、三方を囲む海から吹き上げてくる強風に、吹き
飛ばされそう。断崖の直下から、水平線の近くまで連なっている
磯に白い怒濤が叩きつけるように打ち寄せている。ぞくぞくするよ
うな不毛な光景だった。

ここで死のう。

車窓から見えていた暗い鉛色の海へ、真っ直ぐ降りていった。眼下には凍てついた漁村の屋根が見え、その向こうに細長く浜が伸びている。

僕は砂浜に向かい、大股で波打ち際に歩み寄った。海が近づくに連れて鼓動が早くなる。それは死への静かな興奮。激しい風に吹かれ、怒りに荒れ狂う海を見渡し、暫く恍惚としていた。ここが完全に自分の望んでいた場所だと実感したから。

そこからは夢中だった。

持ってきた細いナイロンの紐で自分の手首とボストンバッグをしっかりと結び、バッグを胸に抱いて波の中へゆっくりと入った。氷のような冷たい波飛沫が顔へと当たって弾け、海水が靴とジーンパンへみるみる染み込んでゆく。

期待していた以上の冷たさだ。

心臓が激しく収縮し頭の芯が痺れ始める。

これでいいんだよ最初からこうするべきだったんだよなんてそんな簡単なことに気付かなかったんだ母さんが死んだ時死んでいればこんな思いはしなくて済んだでも姉ちゃんと逢えなかったそれでいいのかそれでいいんだよこんな辛い想いをするくらいなら死んだ方が良かったんだよ

「おめえ、何をしとる！！！」

怒鳴り声と共に、誰かが僕の肩を凄い力で握った。

万力で掴まれたような痛み。たちまち波がやってこない砂浜までずるずると引きずられた。力一杯抵抗しても、その手を振り解くこ

とが出来ない。

「バス停で見慣れ……男の子と女の子を見……気に……て着いてこいば、おめえ何をし……としとった！」

激しい風の唸りで、声が途切れ途切れに聞こえる。

「海を近くで見たくて」

咄嗟に、自分でも意味の分からない嘘を吐いた。面倒なことになった。

この男を殴り倒して、再び海へ入らなければ。

僕はじつと隙を窺った。背は僕よりも高く、壁のような分厚い体格をした中年の男だ。左手にはギプスを巻いている。

こいつを殺してでも　死ぬんだ！

「おめえ！　一緒にいた女の子はどこ行った！」

『！』

中年の男が僕の耳元でまた怒鳴った。日に焼けた男の眉間には幾本もの深い立て皺が刻み込まれ、目は血走っている。

『女の子？　こいつは何をゆうつるんや』

「僕は独りです！」

叫び返した。

「何言……！　肩まで髪を伸ばした、目の大きな、小柄な女の子と

……におっただろう。わしはその女の子が悲しー顔をして泣い……
気になってついて来たんだ」

「そ、その女の子はどんな服を着てました？」

「チェックの……スカートと真っしれーセータ……いた。寒いのに
コートも着……、目についた！」

強風は容赦なく、男の言葉を遠くへと浚ってゆく。しかし僕は、
男が話していることを理解した。間違いなく姉だった。それは姉が
事故に遭った当日に着ていた服装だった。

「たぶん僕の姉です！」

そう怒鳴ってから、ボストンバッグを開いて、白木の箱を男に見
せた。男はバッグの中身を確認すると、厳しい表情を作り、無言で
チャックを閉じた。

そして僕の手を掴み、引きずるようにして国産の四駆車の助手席
に押し込み、車を走らせ始めた。

激しいみぞれ混じりの風が、フロントガラスに叩きつけるように
吹き荒れている。寒さに震えながら、ぼんやりと激しい 潮騒にじ
つと耳を澄ませ続けた。自分の奥歯がガチガチと音を立て、止めよ
うとしても止まらない。

10分ほど走ると、男は大きな民家の前で車を止めた。中年の男
は、僕に付いてこいという風に、手招きした。

「母ちゃん、今帰った！」

中年の男は玄関先で、腹から発声されるずっしりとした野太い声
で呼びかけた。

「お茶入れてやってくれ、それから風呂と飯の準備だ」

「一体どうしたの？」

色白でふつくらとした体型の、愛嬌のある下膨れした顔のおばさんが、台所から頭だけを出して、僕をちらっと覗いた。

「ああ、わけーおぎゃく（お客）さんだな、ちよつと待つてよ」

家の中は外界とは別世界のように暖かい。部屋は床暖房が施されているようだった。男に応接間に通されると、おばさんが、お盆にお茶を四つ持つてやって来た。

「あれ、めんこい女の子はどこさ行つた？」

おばさんは、狐につままれたような顔をして、きよろきよろと辺りを見回している。

中年の男は飲んでいたお茶を嘔き出しそうになっていた。

「おい女の子ってどんな格好してた？」

男は妻の顔を見て、真剣な面もちで尋ねている。

「真つしれーセーター着て、赤と黒のチェックのスカートさ穿いてた。目のくりつとした、めんこい子だよ」

「いいから、お茶そこい置いとれ」

男はお茶を啜り始めた。

「あんたもお茶飲みな」

おばさんは人懐っこい笑顔で、僕にお茶を勧めた。僕は礼を言うてから、黙ってお茶を啜った。

嬉しかった。

姉は今でも僕の側にいるのだ。お茶を啜りながら、目を閉じて姉の気配を感じ取ろうと試みた。しかし僕には無理みたいだ。

「はやぐ風呂に入れ、そのままじゃ風邪をひいてしまうべ」

中年の男は僕の背中を馬鹿力で叩き、勧められるまま風呂に入っ

た。

身体が骨の芯まで冷えきっているせいか、かけ湯をすると暫く肌
に突き刺さるように痛い。僕は慎重に、足の先からゆっくりと、湯
気の立ち上っている浴槽へと身体を沈めた。そして親切な中年の男
が言ったことを頭の中で反芻した。

姉は涙を流していた。僕のために姉は泣いていたのだ。姉は死ん
でもなお、僕に生きることを望んでいる。そう考えると胸が熱くな
った。

湯に浸かりながら、姉が車に跳ねられた直後のことを思い返した。
僕はあの時、確かに姉の声を聞いたような気がした。

はつきりとした言葉ではない 想いのようなものだ。

哀しみではなく 世界への深い愛、未来への希望。

これまでもずっと考え続けていたんだ。

姉ちゃんはあの時、一体何を伝えたかったのだろうか？

さつき姉ちゃんはなぜ泣いていたのだろうか？

姉は自分の身体を、なぜ何の関係もない人々に与えたんだろう？

僕は、姉が独りで寂しがっていると思い込んだ。いや、姉が居な
い人生に耐えられそうになかった だから死を望んだ。

『姉ちゃんは僕に何を望んでるんや？』

「湯加減はどうだ？」

男は浴室の扉を開けて、僕に声をかけた。多分僕が、何かとんで
もないことをしでかさないか、心配して来てくれたのだろう。

「とてもええ湯加減です」

「そら えがった。おめえ、なんて名だ」

「裕晶、西埜裕晶です」

「わしは与田猛。タケさんって呼んでくれ」

「はい」

タケさんは安心したのか、厳しい表情を解いて笑った。素直で偽りのない笑顔。その笑顔を見て胸が熱くなった。世の中には素性の分からない他人のために、親身になって心配してくれる善良な人がいるんだな、と。

「おめ、泣いてるのか？」

「違うんです、ちよつと いえ、なんでもないんです」

「そうか、ゆつくり身体暖めれ。身体さしばれたら、心までしばれてしまうべ」

風呂から上がると、洗濯籠の中にある赤い花柄の派手なトランクスと白い無地のＴシャツ、ジャージがきちんと畳まれて置かれていた。ジャージには『HOKKAIDO UNIV』とプリントされている。息子さんの物なのだろう。

「裕晶こつちだ！」

しきりに呼ぶ声が響いてくる方へ歩いてゆくと、応接間では鍋の用意がしてあった。香ばしい味噌の香りが部屋一杯に充満している。タケさんは日も暮れぬ内から日本酒をちびちびと飲み、既に顔を赤くしていた。

「おつ、思った通り、タダシのがぴったりだ。さあ鍋だ、旨いから食べれ」

おばさんは柔らかな笑顔を浮かべ、僕に鮭や白菜をたくさん装ってくれている。暖かい、心の籠った素朴な味がして、本当に旨かった。僕は御飯を二膳も御代わりした。

昨日までの食欲のなさがまるで嘘のように、次から次へと貪った。タケさんはそんな僕の姿を眺めながら、手酌で熱燗を飲んでいた。

「息子さんが北大に通ってはるんですか？」

「ん？ いや一昨年まで、北大の医学部さ通ってたんだとも　雪
山で遭難して死んだんだわ。」

漁師の息子のくせに山が好きでな」

おばさんは曇りのない笑顔を崩し、涙ぐんでいる。

「本当にバカな奴だ。ここ出て行くときは、この村の医者になるつて、いっちょまえに偉そうな口叩いて出て行っただも　何もせんと死んでしまった」

タケさんはそう言つてコップ酒を呷った。

「裕晶は、どこから来たんだ？」

「神戸です」

「遠いところから来たんだな。裕晶は姉さんを亡くしたのか？」

僕は黙つて、湯気の立ち昇る汁を啜った。

「俺は女の子の涙を見た。哀しそうだった。その子は、おめえのとさ心配してるみたいだったべ」

「私もはつきりと見たよ。哀しそうな顔をしてたよ」

おばさんは涙をハンカチで拭いながらそう言った。

「わしはおめえが、何をしようとしたか聞こうとは思わね。」

だども、親さ悲しませるようなことは止めれ……親より早く死ぬことほど、親不孝なことはねえべさ」

タケさんは眉間に皺を寄せて、静かに言った。それは亡き息子さんへの言葉なのだろう。

「これ私が作ったんだわ。煮染め昆布、美味しいよ」

おばさんは、小皿に盛った昆布を手渡してくれた。甘く煮た肉厚の昆布だった。噛みしめるとダシが口の中に広がり、上品な余韻をもって溶けてゆく。

「おいしいです」

「当たり前だ、ここの昆布は世界一だべ」

タケさんが、また馬鹿力で僕の背中を叩いたので、激しく噎せた。タケさんは豪放磊落に笑うと、しばらく物思いに耽るように、柔らかい静かな目でぐつぐつと煮える鍋を見つめていた。

「裕晶、おめえが生きたくとも、生きられねえ病気に罹ったとしたら、心から大切に思っている人に、一緒に死んでくれと頼むか？ わしなら前を向いて、希望を持って生きていつて欲しいと願う。」

少なくとも親が子供に望むのは、あとは人様に迷惑かけちゃなんねえって思っくらいだ。

裕晶、後でおめえん家の電話番号さ教えれ。

俺が親父さんに上手く言っというてやるべ。

したから今晚はぐっすり眠ってこわい（疲れ）さ取って、頭の中を整理しろ」

僕はその晩、タダシさんの部屋で眠った。

灯りを消してからもずっと、僕はタケさんの言葉に思いを巡らせていた。

翌日の午後、叔父さんは飛行機、鉄道、バスを乗り継いで風の岬にやってきた。叔母さんは度重なる心労で倒れ、入院しているという。

叔父さんは僕の顔を見るなり、いきなり胸ぐらを掴み、一発殴った。ハンマーで殴られたような衝撃だ。口の中が切れてひどく出血し、顎の噛み合わせが変になって、口を大きく開けられない。

叔父さんに手をあげられたのはこれが初めてだった。

「俺たちがどんだけ心配しとったと思うんや！」

叔父さんは、僕の顔を睨みつけて怒鳴った。

「たえ血は繋がってなくても、俺たちは家族や！」

こういう時やからこそ、三人で支えあっていかなあかんのに、おまえはなんて自分勝手な奴なんや！」

僕はその言葉を聞いてハツとした。

僕たちは家族なんだ。

胸が熱くなった。

「すいません……」

自分の感情に囚われ、叔父さんと叔母さんの気持ちを何一つ考えていなかった。

「本人も反省してるみてえだ、もうええだろ」

タケさんはそう言って、叔父さんの肩を叩いた。タケさんは僕たちにもう一泊していくように言い、叔父さんもその申し出を恐縮しながら受けた。

その夜、叔父さんとタケさんは盃を交わすうちに、すっかり意気投合したようだ。宴の終わり頃には、肩を寄せ合うようにして、自分たちの息子と娘について、涙ながらに語り合っていた。

僕は先にお風呂を頂き、タダシさんの部屋で休んだ。

部屋の窓から、黒々と強風に蠢く森を見つめながら、僕は姉に問い続けた。僕に何を望んでいるのかと。

翌日、叔父さんは見送りに出てくれたタケさん夫妻に丁寧にお礼を言い、現金封筒を手渡そうとした。しかしタケさんは、頑なに最後までその封筒を受け取ろうとしない。

叔父さんはバスの乗り際に再び早口でお礼を言ってから、奥さんが着ているオーバーのポケットに現金封筒をねじ込んだ。

車窓越しのムっとした顔のタケさんに向かって、叔父さんは何度も頭を下げていた。

タケさんと奥さんは、荒れ狂う風に吹かれながら、僕たちの姿が見えなくなるまで、力強く手を振り続けていた。

眼下にひろがる絶壁と荒れ狂う海を見ながら、岬の駅までバスは進んだ。鉛色の海と空の際の辺りに広がる、弱い陽を浴びて煌めく白い線が、次から次へと溢れてくる涙で滲む。

車内の中で、叔父さんと何一つ言葉を交わせなかった。

眼下に一面の雪を残して、新千歳空港から飛行機は飛び立った。僕は姉の遺骨が入ったボストンバッグを抱き、飛行機の窓から雪景色を見つめていた。

「ヒロ 帰ったらまず病院へ行つて、ヒスイに謝るんやぞ」

叔父さんは飛行機の中でただ一言そう言った。大阪国際空港には二時間ほどで辿り着いた。

六甲道駅に着くと、僕たちはタクシーで叔母さんの入院している病院へと向かった。そこは昔、僕が入院していたあの病院だ。

病室へ入ると、ベッドの前で頭を下げて謝った。申し訳なくて、叔母さんの顔をまともに見ることが出来ない。叔母さんは僕を抱き締めて激しく泣いた。

「もう、ええんよ、もうどこにも行つたらあかんよ。

分かった？ 分かったヒロくん？

朋ちゃんだけやなくて、ヒロ君までおらんくなったら、うちらは子供がおらへんくなるやん。

わかる？ ヒロ君はうちらの子供なんよ。

分かった？ 分かるよねヒロ君」

叔母さんはそう何度も言い、僕の背中を優しく擦ってくれた。

真心の籠った言葉に胸を衝かれた。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

心の底から何度も詫びた。涙が溢れて止まらない。

叔父さんは、泣いている僕と叔母さんに歩み寄り、遅しい両手で包むように僕たちを抱いた。面やつれした顔に伸びた無精髭か、僕の頬を刺激し、ちくちくと痛んだ。土のような優しい香りがする。

叔父さんの仕草に胸が熱くなり、嗚咽が漏れた。二人が僕のことを心から愛してくれているのが分かったから。

僕はこの人たちが生きている限り、しっかりと生きてゆかなければいけない。

もうこの人たちを、二度と悲しませてはいけない。姉ちゃんもきっと、そう望んでいるに違いない。

『姉ちゃん、もう少しここで頑張ってみる。それが姉ちゃんを愛することに繋がっていると、俺は思うねん』

僕は叔母さんに二週間付き添い、叔母さんは体力を回復して退院した。

叔母さんが退院してからも、僕は暫く学校へいかなかった。姉が通っていた公立高校に進学するつもりだったのだが、そんな精神状態ではなくなっていたからだ。

結局、僕は卒業式の日まで登校しなかった。叔父さんの会社に就職しようと決めたからだ。

「ヒロ君、もうそろそろ行かな遅れるよ」

叔母さんは食器を片付けながら、ぼんやりとしている僕に心配そうに声をかけた。

「行って来ます」

「がんばってね」

「はい」

玄関で雨合羽の上下を着込み、撥水加工のしてある緑色の長靴を履く。玄関の扉を開けると、アスファルトを穿つ無数の大粒の雨音と、湿気を含んだ冷氣が、まとわりつくように僕の身体を包む。

さあ、仕事だ。

この暖かい家の、扉一枚隔てた外には、もう誰も庇護してくれない世界が広がっている。だから背筋を伸ばしてしっかりと大地を踏みしめ、油断なく周囲に気を配っていなければならない。決して誰にもナメられてはいけない。

中学を卒業し、吉本商会で働き始めてから、そんな風に考えるようになっていた。みんな生きていくために懸命に働いている。

車庫の前に置いてあるマウンテンバイクに乗って、僕は会社を目指した。

吉本商会の営業所は、鶴甲の外れにある小高い山の上に建っている。薄い水色の鉄筋コンクリート造りの建物だ。一階はパツカー車（ゴミ収集車）の車庫、二階が事務所になっている。近くには六甲山有料道路への入り口があり、その側には六甲山へと登るロープウェイの発着場がひっそりと建っている。

自転車は進む度に路面を小川のように流れている雨水を切り裂き、一本の細い轍を作った。僕は山手幹線に沿って東に進み、六甲口の交差点で坂を北上した。

煌々と明かりが灯っている交番の側を通り過ぎ、高羽の交差点を目指す。顔に叩きつける雨で視界がぼやけている。右手で何度も顔に降りかかる雨粒を拭った。

交差点からは、長い急な坂をひたすら北へ駆け登ってゆく。寝静まった神戸の街へと下ってくる車両は、タクシーと港へ向かう大型トラックがほとんどだ。通勤に向かう一般車両が走り出すのはあと二時間後ぐらい、今からはゴミ屋の時間だ。

息が弾んでくる。渾身の力を込めて、ペダルを漕ぎ続ける。

雨合羽は通気性が悪い。坂を上りきる頃には、雨で身体が濡れているのか、汗で濡れているのか分からなくなってしまう。雨に煙るオレンジ色の街頭が見えてくる。有料道路の入り口だ。

僕は有料道路の側道を右折し、薄暗い山道を駆け上がった後、車庫はもうすぐだ。

中腹辺りにある養護老人ホームの側を通り過ぎると、暗闇の中に「吉本商会」という看板を掲げた二階建ての建物が見えてくる。自転車は邪魔にならない場所に駐車し、車庫へと入った。

仄暗い車庫の中は、コンクリートと青白い蛍光灯が発する、底冷えする冷気が漂っている。タバコの煙と、パッカーが発する酸っぱい臭気が鼻を突く。

「おはようございます」

大きな声で挨拶した。既に三人の先輩が到着している。みんなの会話が途切れた。池野さんは僕に小さく右手を挙げたが、他の二人は僕を一瞥し、何事もなかったように会話を続けた。

タイムカードに手を伸ばした。タイムカードは事務的な音を立て「4:30」と手にカードを打ち返す。

「池野くん、昨日ボートどうやったん」

肉団子のような体型をした男が尋ねた。定岡さんという29歳の運転手だ。

「全然あきませんわ。途中まではデキとったんやけどね」

小柄な男は、苦笑して答えている。池野さんは36歳で去年まで板金工をしていたらしい。不況でリストラに遭い、職安の紹介でこの助手になった。

「李さんはスロット昨日出たん？」

鼻からタバコの煙を吐き出しながら、定岡さんが尋ねた。

「2万ヤラれたわ」

李さんは背の高い、見るからに骨太の逞しい体格をした人だ。

髭と髪が薄く、一重瞼の細い目に特徴がある。年齢は42歳。李さんは、長田にある別の産廃業者でパッカー車の運転手をしていたが、震災後に吉本商会に入社した人だ。二十年近くこの仕事をしているベテランだ。

パッカー車は基本的に、二人一組で仕事をする。市の環境局のパッカー車は、三人一組で作業をしているのが多いようだが、民間企業にそのような余剰人員を雇用している余裕はない。

吉本商会は四トンのパッカー車を三台保有している。その三台で神戸市内を分担して、ゴミを収集している。僕たちがゴミを収集するのは、民間企業が排出するゴミ。ホテル、コンビニ、飲食店、会社、老人ホーム等が出す、様々な種類の生ゴミだ。

荒ゴミは、8時頃からやってくる50代の人たちが、四トンと二トンのロールオン車（荷台を取り外すことが出来る車）で処理している。名前はまだ覚えていないけれど、坊主刈りをした人たちだ。

市民生活で出されるゴミは、普段僕たちが目に見えているように、市の清掃局が収集している。そして民間企業が排出するゴミは、僕たちの会社のような業者が収集する。僕は叔父さんの家にくるまで民間にこんなゴミ屋さんが存在しているなんて全く知らなかった。それは多分、他の大部分の人もそうだろうと思う。でも僕たちは地を這うようにして毎日ゴミを収集し、懸命に生きている。

複数の50ccスクーターのエンジン音が近づいてくる。

「おはようっす」

背の高い、色白の端正な顔立ちの男　平井さんは僕より二ヶ月前に入社した収集助手で、35歳だ。何枚かCDも出したことのある、元ロックシンガーだそうだ。

「あかん、もうびしょ濡れや」

色黒で肩幅の広い、がっちりとした体格の男が入ってくると、全員が「おはようっす」と一斉に声をかけた。職長の健太さん。健太さんは41歳、この会社で一番古手の運転手だ。

ケンタさんは元ヤクザで、うちの叔父さんと古くから付き合いがあった人らしい。この会社は叔父さんとケンタさんが運転手と助手で再スタートさせ、ここまで大きくしたのだそうだ。付け加えるとケンタさんは左手の小指が欠損している。

「おはよう、もう全員揃ってるな。ヒロ君、筋肉痛の調子はどうや？」

「大丈夫です」

「そうか パッカーから降りる時は、柔らかく膝を曲げるんやで。筋肉痛の次は、膝がいたうなってくるからな」

「はい」

「おいサダ、ちゃんと降りて手伝ってるか？」

「はい」

「よし。今日はひどい雨や。みんな、急ぐんも大切やけど安全第一や。事故には充分気をつけてな」

全員が一斉に返事をした。

「じゃあ行こうか、ヒロ君がんばるんやで」

「はい」

ケンタさんは僕の肩を叩いてから、顔の前で親指を立てた。

「がんばりや」という意味のケンタさんの癖だ。

それぞれの車両に二人ずつ分乗していく。北区と西区はケンタさんと平田さん。東灘区と灘区の半分を朴さんと池野さん。灘区と三宮周辺が定岡さんと僕だ。

パッカー車のエンジンが一斉にかかり、ディーゼル車の真っ黒い煤煙が、車庫の中に充満する。冷え切ったエンジンを徐々に暖め、数分してからおもむろにサイドブレーキを外し、ゆっくりと発車する。エアブレーキを踏む「プシュ、プシュ」という音が、辺りに響きわたる。

三台のパッカー車は連なり、ヘッドライトで闇を掻き分けるようにして、ゆっくりとなだらかな山を下ってゆく。

パツカー車のエンジンと低速ギアの音が静寂を打ち破る。ワイパーが懸命にフロントガラスに叩きつける雨を薙ぎ払っている。

僕たちのパツカー車は最後尾だ。丘の中腹にある、老人ホームのゴミを取らなければならない。

すぐにパツカー車が停車する。僕は助手席から素早く飛び降り、パツカーの後部ハッチを開けに行く。外はどしゃ降りだ。

ハッチを開けると、ゴミの搬入口からは、独特の酸っぱい臭いが鼻に飛び込んでくる。

僕はすぐに緑色のプラスチックのバツカン（0.7立米のゴミコンテナ）を、ゴミ置き場から引きずってくる。その間に運転手はサイドブレーキを引き、PTOスイッチ（収集作業を行うための動力スイッチ）を入れ、のっそりと降りてくる。僕はバツカンの側面に通っている鉄の棒を、パツカーのステップに付いている鉄の爪に固定させる。

運転手は操作盤の一番上のボタン（積み込みスイッチ）を押し、回転盤をスタートさせた。側面にある黒い操作レバーを下に押し下げると、ゆっくりとバツカンが持ち上がってゆく。このようにコンテナをひっくり返すようにして、中のゴミを回収する。

辺りに、老人ホームのゴミ特有の異臭が立ちこめる。ゴミの中身は、排泄物が付いた成人用オムツだ。薬品と排泄物が混ざった、なんとも言えない鼻が曲がりそうな臭気。

黒いビニール袋が破れ、便の付いたオムツが溢れ出てくる。パツカー車は回転板を舌のように回して、けたたましいエンジン音と共に、ゆっくりとゴミを飲み込んでゆく。二三度レバーを上下させると、バツカンのゴミを残らず回収出来る。

バツカンを固定させた爪から外すと、僕はダッシュして、バツカ

ンを元にあつた場所へと引きずってゆく。そしてパツカーの後部へと飛び乗り、両手でしっかりとハッチに付いている取っ手を掴む。

「オーライ！」

大声で叫び、操作盤に付いているブザーを鳴らす。パツカーは勢いよく発車する。少し下つた先に、老人ホームの調理場に面した、残飯入れのコンテナがある。僕は再びコンテナを固定させ、レバーを上下させてゴミを残らず回収する。そして走って助手席へと乗り込む。

パツカーは再び勢いよく坂を下ってゆく。

「オーライ」

僕は助手席で呟く。六甲ケーブルの発着場まで下ると、有料道路の道を横切る。その際、車の左側面の安全確認は助手の仕事だ。どんだん道を下っていくと交差点が見えてくる。信号機のランプが、激しい雨で赤く滲んで見える。

「オーライ」

左からパトカーや、車がやって来ないことを確認して呟く。パツカー車は用心深く右折する。

ゴミ屋は朝が勝負だ。

通勤に向かう乗用車の交通量が増えるまでに、どれだけたくさんのゴミを積み込めるか、それが運転手と助手の腕の見せ所なのだ。早朝の作業の善し悪しによって、その日の仕事の質が決まると言っている。朝の作業がスムーズに進めば、その日は仕事を手早く済ませることが出来る。だから早朝における信号無視は、民間のゴミ屋における暗黙のルールとなっているのかもしれない。

『信号の青と黄色は突き進め、赤は用心して進め』だ。

急な勾配を下り、臨済宗の禅寺を通り過ぎると、私立病院が見えてくる。ここは病院の事務所から出るゴミの回収だけだ。ヘッドライトに照らし出された青いゴミ袋は、引き裂かれて方々に散乱している。タヌキか野良猫の仕業だろう。

僕は素早く降りてゆき、熊手と箕を使って丁寧にゴミを掻き集め、パッカーへと積み込む。そしてステップに足を乗せてしっかりとハッチに掴まり、ブザーを鳴らす。ここからはゴミを取る箇所が密集しているので、当分パッカー車の後ろで移動する。

ブティック、雑貨店、弁当屋、新聞屋、ラーメン屋、花屋、大衆食堂、居酒屋、あらゆる店のあらゆるゴミを、雨に濡れながら、素早く積み込んでゆく。

その度に回転盤と押し込み盤がゆっくりと回り、けたたましい機械音とエンジン音が辺りの静寂を打ち破る。

ダンボール、残飯、紙やビニール、花、あらゆる物のあらゆる臭いが混ざり合ってゆく。ラーメン屋の豚骨ガラの重さと臭いは強烈だ。計ったことはないが、バケツの重さは一杯25kgはあるだろう。股の下に潜らせるようにして、振り子の反動を使って、両手で投げ入れる。このコツを飲み込むまでは腰に負担がかかり、下手をするとぎっくり腰になるそうだ。

阪急の線路を通過し、コンビ二の前で停車した時、パッカーはけたたましいクラクションを鳴らした。

「こら、おっさん！ 何しとんねん！ 失せんかい！」

定岡さんが運転席から、激しく怒鳴っている。右足を引きずった年輩のホームレスが、ゴミコンテナの前からよたよたと立ち去ろうとしていた。

「またか」

彼らは廃棄処分になった弁当や菓子を漁りに来ている。コンビ二のゴミコンテナには、彼らにゴミを盗られない（？）ために、（廃

棄処分になったのだから、別に貰ってもいいと個人的には思うのだが、鍵が掛けられている。ゴミ屋が収集に来る時間帯になると、アルバイトの店員がその鍵を外すのだ。彼らはその僅かな時間帯を狙ってやってくる。

僕は素早くゴミコンテナに走ってゆき、ホームレスを尻目にビニール袋をパツカーに積み込んでいく。

ゴミ袋の中で一番重い物の中に、彼らの目当てである弁当が入っている。袋を引き裂いて、弁当を二三個、道の路肩に置いておく。パツカーの後ろは運転手から死角になっているので、定岡さんには分からないからだ。そしてまた「オーライ」と叫び、ブザーを鳴らして先へ進む。

振り返ると老人は、その弁当を素早くぼろぼろのナップザックに詰め、振り返らずに足早に歩いていった。

こういったことをひたすら何時間も繰り返す。息を弾ませ、汗を流しながらゴミを積み込み、走り、パツカー車の後ろに掴まりながら、次の場所へと揺られていく。

たまにイノシシにゴミを漁られた場所がある。

イノシシ一家の漁った後は、ゴミが爆発したように周囲に散乱しているのですぐに分かる。そんな時は熊手と箕を使って、丁寧にゴミを掻き集めて回らなければならない。そういう時は僕でも、六甲全域に生息するイノシシを、全頭牡丹鍋にしてやりたいような物騒な気持ちになる。

ゴミのある場所を覚えるまでは作業に必死だったが、全ての箇所を覚えてしまえば、後はただのルーチンワークだ。パツカー車の機械の一部になったように、黙々とゴミを積み込んでゆけばいい。終いには臭いなんて全然気にならなくなる。

いつしか僕の精神と身体は分離される。

身体は休むことなくゴミを積み込み、走って次のゴミの場所に先回りし、ブザーを鳴らして積み込んだことを運転手に合図し、離れた次のゴミの場所へとパッカー車で揺られてゆく。

しかし心は姉の面影を追っている。

姉と散歩した公園や、姉と見た様々な美しいもの、泣き顔や怒った顔、そして姉の奏でたピアノの音、そんなものが次々と現れては消えてゆく。

経を唱えながら、暗い山道を走る行のようだと僕は思う。ただ修行僧は仏を想い、僕は姉を想い続けている。

ひたすらゴミを積み込み続ける。パチンコ屋、焼鳥屋、寿司屋、コンビニ、あらゆる臭いの、あらゆる種類の可燃物を、機械のように、ただ黙々と。

午前6時半を過ぎる頃には、灘区周辺はひとまず一段落する。僕は再び助手席に乗り込んで、三宮へと向かう。この三宮へと向かう10分足らずの時間内に、リュックから使い捨てのおしぼりを出して手を拭き、水筒を取り出して暖かいお茶を啜る。

三宮周りの飲食店、大手企業のゴミを積み込み、6時半頃になると朝飯の時間になる。運転手の定岡さんは、立ち食いうどん店や牛丼店で朝食を済ませ、僕はパッカー車の中で、叔母さんが作ってくれたお弁当を食べている。僕と定岡さんは仕事（もちろん仕事が終わった後も）、ほとんど会話をしない。彼も話そうとしないし、僕も話しかけない。

8時前になると、ポートアイランドにある港島クリーンセンター

（ゴミ焼却場）へと向かい、積み込んだゴミを釜へと排出する。焼却場前の道路には、開場を待つパッカー車が何台も列を作って並んでいる。

8時になると入り口で計量が始まる。計量台の前でバッチカードを、市の環境局員に手渡す。このカードで、その月に焼却処分した、吉本商会のゴミ排出量のトータルを弾き出し、焼却料金を神戸市が会社へ請求するためだ。

パッカー車がゆっくりと計量台の上に載ると、デジタル表示で車体総重量と、ゴミの実質重量が表示され、プリンターから印字された紙を受け取る。そして坂を上って、奈落のような巨大な釜へと、限界まで積み込んだパッカー車のゴミを排出する。

「4800kgか、まあまあやな」

定岡さんが独り言のように呟いた。

「オーライ、オーライ、オーライ、ストップ！」

パッカー車の後ろに立って、車止めの位置まで誘導する。

焼却場の中は、強烈な酸っぱい臭いが充満している。停車すると、パッカーはゆっくりと荷台を持ち上げ、ゴミを一気に吐き出す。するとゴミが奈落の底へ、雪崩を打って一斉に滑り落ちてゆく。

車の荷台の横に付いた、ガラスの覗き窓からゴミが見えなくなったら、箱の中に頭を出して覗き、ゴミが残っていないか確認する。そして車止めの辺りに零れたゴミを、竹箒で奈落の底へと掃き落とす。

「オーライ！」

僕が叫ぶと、荷台はゆっくりと元の形へと戻ってゆき、僕は素早く助手席へと乗り込む。

次は二車目（二回目）だ。

月曜日以外は大抵二車で終わる。月曜は日曜が休みだった分ゴミ

が多いため、三車になる。会社の休みは毎週日曜日にあり、月に一度日曜出勤がある。正月休みは三日、盆には一日休みがある。

毎月の有給休暇は有名無実のものだ。

経済活動が行われれば、そこに必ずゴミが出る。だから基本的に、ゴミ屋に休みはないのだ。助手の給料は手取り26万。年齢、学歴は一切関係ない。社員の定着率は低い。助手で年間勤める者は滅多にいないそうだ。自然と他の職場では就職が難しい人が集まることになるが、もちろん優秀な人たちも、大勢働いている。

二車目の作業は再び灘区に戻って行く。車も人も多くなっている。早朝のような無茶はもう出来ない。スーパーマーケットから出される期限切れの商品や、8時以降に出勤してくる会社関係のゴミなどを中心に収集する。

一言で会社から出されるゴミと言ってもしまえば簡単だが、ゴミの種類は様々だ。マヨネーズ会社のゴミは、大量のゆで卵の白味であったり、車のディーラーであれば、違法すれすれのプラスチックのゴミも混ざっている。

僕は淡々とゴミを取り続ける。

サイドミラーから見える運転手は、足を運転席に投げ出し、拾った少年漫画やエロ本を読んでいる。僕がゴミを取っている時の定岡さんの日課だ。

朝から降り続いた雨は一時止んで、空には灰色の低い雲の谷間から、陽光が漏れ出していた。

向こうの方から歩いてくる、三人組の男子がいた。手にはスケートボードを持ち、談笑しながら歩いてくる。帽子を深く被り直し、俯いて作業を続けた。中学の時のクラスメイトだ。

彼らは僕の姿に気付かず、側を通り過ぎていった。側を通り過ぎる時「臭い」と吐き捨てるように言ったのを、僕は聞き逃さなかった。屈辱感に苛まれながら、作業を続けた。

作業をしている時に、告白されたことのある女の子に出会ったこともある。彼女は僕に気付くと、ひどく驚いたような顔をした。そして声をかけようとし、困ったような顔をして言葉を飲み込んだ。俯いてただ淡々と作業を続けた。しかし内心は敗北感で一杯だった。

昔の知人に会おうと、彼らは、ほぼ僕に気付かない。

それが何故か分かる。彼らはゴミ屋なんて、全く見ていないのだ。彼らにとってそれはひどく遠い、自分とは隔絶された世界の出来事のように思えるのだろう。

でもそれは当然なのかもしれない。

自分が工事現場の側を通りすぎる時、交通整理をしているガードマン個人に注意を払うことなんてない。それどころか基本的に人間とは、僅か数百？先に住んでいる人々が飢え死にしている、そんなニュースを見ながら夕食を取っていても、平気で食べ物を捨てる。そういう生き物なのだから。

僕は思う。

この世界はそういう無関心によって損なわれているのかもしれないと。

ゴミ屋がどうこうなんて、そんなことはたいした問題ではない。ただ単に自分がゴミ屋だから、そのような視点が得られただけに過ぎない。

しかし飢え死にする人々、戦乱で倒れる人々、児童の虐待や売春、そういうものさえも自分に遠い出来事だと無関心でいることは、とても罪深いことなのではないだろうか？

そんな社会システムの中で安穩と暮らしていることは、黙認し、肯定していることにはならないのだろうか？

月曜以外は二時過ぎ頃には作業は終了する。

二車目は、東灘区の第三工区にあるクリーンセンターでゴミを排出し、鶴甲の車庫へと戻る。そして車庫に戻り、パッカー車を洗車してから、その日の仕事が終わる。

「みんなお疲れさん」

「みんなお疲れさまです」

二階の事務所に上がっていくと、社長と叔母さんが声をかけてくれる。僕たちも無論挨拶をする。叔母さんは会社の事務を取り仕切って、柔らかい物腰ながら、いつもてきぱきと働いている。社長はもちろん叔父さんだ。

叔父さんは、僕に特別労いの言葉をかけたりはしない。身内だからといって特別扱いをしないのは立派だと思う。

叔父さんは、神戸市内を車で回り営業活動をしたり、環境組合（民間廃棄物収集業者）の会合に出席したり、お客さんからのクレームの処理をしたりと、いつも忙しそうだ。

他の作業員の人たちは、事務所の中にある休憩室で30分ほど談笑してから、パチンコ屋などへ寄って帰宅しているのが多いようだ。僕はいつも挨拶を済ませてから、真っ直ぐ家に帰る。

「みなさん、お疲れさまでした！ お先に失礼します！」
休憩室の入り口で頭を下げ、足早に帰宅しようとした。

「ヒロ君、着替え持ってきてるんか？」
逃げるように立ち去ろうとする僕に、健太さんが笑顔で声をかけた。

「あつ、はい」

「そうか。ほんなら一緒に、銭湯へサウナ入りにいかへんか？」

「はい」

「じゃ、行こうか。みんな今日はお先な」

ケンタさんが談笑する同僚に手を挙げると、全員が一斉に「お疲れさまでした」と声をかけた。叔父さんも電話の応対をしながら、頷いて小さく手を挙げた。

灘六甲温泉と白く染め抜かれた紺の暖簾をくぐると、番台に座っているお婆さんが、穏やかな顔で会釈した。

「お婆あちゃん、大人二枚サウナね」

「はいはい、いつもありがとうございます」

脱衣場に入ると、他の客の姿はなかった。ガラス越しに浴場を見渡すと、数人の老人が、細かい気泡を立ち上らせているジャグジー風呂にのんびりと身体を沈めて話をしている。

普通の会社勤めの人々が、午後の仕事を始めたばかりの時間だ。

「極道やつてる時から、この時間帯に銭湯に行くのが好きでな」

健太さんは紺色の作業服を脱ぐと、丁寧に畳んでロッカーへと入れた。二の腕から背中一面には、緑と朱の色鮮やかな刺青が彫り込まれている。雲に乗り、怒りの形相をした鬼は、担いだ大きな袋から烈風を巻き起こし、世界を根っこから薙ぎ倒そうとしているみたいだ。

間近で刺青を見たのは初めてだった。

「鬼が持つてる袋はゴミ袋とちゃうで」

ケンタさんは銭湯中に響き渡る野太い声で笑った。

「これな風神って言うんや。広志は雷神を背負ったんや。そんなん言うても分からへんわな」

刺青に目を奪われている様子を見て、照れ隠しなのだろうか、ケンタさんは僕の尻を叩きながら「ええケツしとるなあ」と笑っている。

叔父さんが刺青をしていることは全く知らなかった。そういえば叔父さんは入浴する時には必ず浴室に鍵をかけて入り、風呂上がりには、夏でも長袖のトレーナーを着ていた。

「ヒロ君、サウナ勝負しよか？」

「サウナ勝負、ですか？」

「長くサウナに入っとった方が勝ちや、負けたらコーヒー牛乳な」

「分かりました」

サウナは大浴場を出た露天風呂の隣にあった。

露天風呂には打たせ湯があり、湯気を立ち上げながら石造りの浴槽へと注いでいる。側には白い玉石を敷き詰めた小さな石庭らしきものがある。

サウナに入っているのは、健太さんと僕の二人だけだ。熱気がじんわりと冷えきった身体に染み込んでくる。黙ってサウナに据え付けられたテレビを眺めていた。

「ヒロ君、トモちゃんと結婚する気やったんやてな」

15分ほど経った頃に、健太さんが口を開いた。身体からは玉のような汗が噴き出している。

「兄弟 いや広志が言うとったわ。『ほんま、お互いガキの癖につてな、でも、広志はちよつと嬉しそうやったんやで』」

僕は黙っていた。もう誰にも姉の話をして欲しくなかった。くだらない慰めの言葉なんかいらぬ。

「ヒロ君 なんちゅうか俺は学がないからうまく言われへんけど、トモちゃんは、ほんまにええ子やった。赤ん坊の頃から見てきたから、俺にはよう分かるんや。

仏さんみたいなええ人間ほど、先に死んでいくもんなんかもしれんな。

所詮この世はかりそめの、辛い修行の旅、ちゅうの　なんか聞いたことあるわ」

健太さんは目をつぶって、静かに言った。感情を無理に抑えているような話し方だった。

「ヒロ君、広志は葬式で泣けへんかったけど、一番悲しんどるんわ、あいつなんやで。」

俺にはそれが痛いほどよくわかるんや。

広志はな、いつも自分がしつかりせなあかんと思つとるから、肝心な時ほど感情を抑えてしまう奴なんや。

しょうもない時には、すぐ爆発しよるくせにな」

ケンタさんは欠損した左手の小指を庇うように、右手で傷跡を触っている。

「俺と広志はな、一緒に施設で育つたんや。」

お互い、親の顔もろくに覚えてへん。

でもな、親がおらんでも、俺はそんな寂しいとは思ってへんかった。

そら、学校行つて、やれ授業参観とかあつたら、悔しかったし、まあ……親も恨んだけど、

でもな 俺の側にはいつも広志がおつてくれたんや。

俺こつ見えても、昔は泣き虫でな。よう学校で泣かされとつたんや。俺がイジメられたら、そいつがどんなごつつい図体の奴でも、あいつは鬼みたいな顔して走ってきて、そいつを半殺しにしてくれたんや。

あいつはその頃から『泣いたら負けや』ってよう言うつた。『金を一杯稼いで、世間の奴らを見返して、笑わなあかん』って、よう言うつた。

俺らは学もないし、得意なんは喧嘩しかなかったから、なんか自然な流れみたいなもんで、ヤクザになった。

チンピラやっとなら、広志がある大親分にスカウトされたんや。阪神にドラフト一位指名されるくらい、むつかしいことなんやで」健太さんは悪戯っぽく笑ってから言葉を継いだ。

「あの頃は、世間から見たら滅茶やっとなかもしらんけど、おもろかったな。

危ない目にもようさんおうた。

結局、あいつは25までヤクザやっとなんや。広志がヒスイちゃんに出会うまでな。

ヒスイちゃんのお腹にトモちゃんが宿った時、あいつはきっぱり極道から足を洗った。

期待されとったから、随分親分にも引き止められたけど、あいつは見事に筋を通して辞めたんや。

ほんまごっつい奴やで。

広志は俺に言いよった。

『俺がほんまに欲しかったもんが、やっとなかった。車や時計やスーツ、金なんかやない。家族や。それを護るためやったら、俺はなんでもやる』ってな。

広志は京都におられへんようになって、神戸へ出てきた。

そして年配の夫婦二人でゴミ屋をやっとな先代の会社に、ヒスイちゃんと住み込みで働きだしたんや。

あいつは、まだヤクザやっとな俺に言うた。

『今、俺はごっつい幸せや。モンモンしよってる人間やから、綺麗な仕事には就かれへん。でもな兄弟、ゴミ屋やっとなら、潰れることはないと思うんや。人間生きてる限りはゴミを出す。社長も奥さんも心のあつたかい、ほんまええ人や。』

ケンタ。おまえから見たら、俺はゴミを取るしかもう能はないかもしらん。

それでも家族を護っていけるんやったら、こんな幸せなことはないと思うんや。

おまえも極道辞めてカタギになつて、家族作つたらどうや。一緒にホームパーティーっていうのやってみたいと思わんか？」

俺はそれから三年極道を続けたけど、結局色々あつてカタギになった。

広志みたいに立派な理由で極道を辞めたと違うけどな。

今はヒスイちゃんみたいに美人やないけど、俺には過ぎた嫁がおつてくれる。

うるさいガキも二匹おる。人並み以上の暮らしが出来るんもみんな広志のおかげや」

健太さんはそこまで言つて、タオルで汗を拭つた。熱気で紅潮した肌に、刺青はその鮮やかさを生き物のように増していた。

健太さんは突然声をつまらせ、男泣きに泣いた。

「広志はな……トモちゃんが生まれた時、みつともないほど、大泣きしよつてな……あの男が、赤ん坊のトモちゃんを抱き締めて、子供みたいに泣きよつたんや。

ヒスイありがとつてな。それをよりによつて……なんで……なんであんなええ子が」

健太さんは俯いて、拳を力一杯握りしめていた。簀の子の上に、汗と涙がぼたぼたと滴り落ちていた。

「トモちゃんが五つの冬に、俺は風邪をこじらせて倒れてもうてな、広志のアパートで寝込んだんや。」

ほんなら、ヒスイちゃんが俺の看病に夢中になってる間に、トモちゃんが行方不明になってもうてな、広志とヒスイちゃんは、気が狂ったみたいに探し回った。

そしたらトモちゃんは自分一人で帰ってきよった。手に一個みかんを持ってな。

多分行ったことのある八百屋で貰ってきたんやろう。

誰かがみかんが風邪に効くって言うたのを、ちゃんと覚えとったんや。

あの子はちっちゃい頃から、賢い子やったから。

それを俺に『はい』って手渡してくれた。

『ケンちゃん、これたべて、げんきになって』って言うてな。

ちっちゃい手が、凍えるように真っ赤になった。

その手を俺の額に当てて、目に涙を貯めながら、ずっと俺の枕元におってくれたんや。

俺はその時、初めて広志の言ったことの意味が分かったんや……。

広志が毎日ゴミ汁にまみれて、必死になって護ろうとしてるものの重みがわかったんや。

俺はイジメられてたガキの頃みたいに泣いてもうたわ。

俺は自分の家族を心から欲しいと思った。ほんま寂しいと思っ
たんや。
心から、自分がくだらん見栄や恨みのために生きてるって、わかっ
たんや……。

ヒロ君すまん、サウナ勝負は、俺の負けや」

健太さんはサウナから出て、露天風呂に頭まで浸かった。紅潮し
た顔を何度もごしごしと洗っていた。

僕も露天風呂に浸かり、涙が止まるまで顔を洗った。

「ヒロ君、もう馬鹿なことは考えんようにな。
あの子の分まで生きて幸せになるんが、何よりの供養になるんや。
あの子を悲しませるような生き方をしたら、絶対あかんのやで」
そう言っただけ健太さんは顔の前に立てた親指を突き出し、僕は頷い
た。

低く垂れ込めた憂鬱な灰色の雲から、再び雨は粛々と降り始めて
いた。

翌朝も豪雨だった。

雨は僕を責めるように、激しく顔を殴りつけていた。

ゴミをひたすら積み込みながら、心の中でまた姉の面影を追っていた。ただ雨が、更に激しく降ることだけを望んでいた。

自分の涙を、いや自分の存在さえも、洗い流してしまえと心の中で叫んでいた。

僕はパツカーの回転板のスイッチを入れ、生ゴミを放り込み続ける。そしてブザーを鳴らし、ステップに飛び乗る。

唐突に、生ゴミの悪臭と雨の臭いの中から、姉の肌の香りをかぎ取った。

絶対に間違いない。甘い乳のような姉の肌の香り。僕は頭ではなく、心で姉に語りかけていた。

『姉ちゃん、どこにおるん?』

『ずっと側にいてるよ。あんたが心配させるから どこにも行かれへんやん』

押し込み板から飛び散る生ゴミの汁を浴びた。しかし構わず、パツカーにゴミ袋を放り込み続けた。

姉の心と僕の心が共鳴し、鮮明に想いが響いてくる。僕は姉に話し続ける。

『よかった　寂しくて、辛くて、切なくて、頭がおかしくなりそうやった。』

姉ちゃん、俺もそこに連れてって『』

脳裏に響く姉の心を聴いて、昨日までに誓ったことを全て放り投げ、僕は再び弱音を吐いた。

パッカーに飛び乗り、ブザーを鳴らした。パッカー車は、闇の中へ唸りをあげて疾走してゆく。

『なに甘ったれたこと言うてんの　あんたはまだやることがあるでしょ』

『やることって?』

『それはあんたが生きていく中で、自分で見つけたすんよ。自分にしか出来へんこと、自分が世界に必要とされている場所を探し出すん。』

耳を澄まして自分の心の声を聞いてごらん。あんたの中にきつと答えはあるから。

あんたが悩んで、暗闇の中に一筋の光を見出した時、きっと歓喜の涙を流す。

それは全ての人の生に準備されてることなんよ。

だから孤独に負けたらあかん。怒りに負けたらあかん。

哀しみや憎しみに負けたらあかん』

「姉ちゃん、僕を置いていかんといて！」

道路の段差に激しく振動するパッカー車に掴まりながら、そう叫んだ。

『ヒロ　置いてなんかいかへん。
あんたが逢いたいと思ったら、いつでも逢えるんよ。
今もここにおるやんか』

姉の心が優しく頭の中に響いた。

『でも！』

『でも何？』

『僕には姉ちゃんが見えへん！』

『見えへんかったら、私はおれへんことなん？』

『僕は姉ちゃんに触れられへん』

『触れられへんかったら、私はおれへんことなん？』

『　姉ちゃんがおらんかったら、俺は　俺は、生きていくんは無理なんや……』

豪雨を浴びて冷え切った身体に、暖かな熱を感じた。

それは懐かしい姉の温もりだった。優しい姉の香りだった。

姉の深い愛が、僕の身体に熱になって伝わってきた。
姉は僕を抱き締めていた。

姉が僕を抱き締めている。

『あんたって本当に救いようのないアホやね。』

でもね……私はそんなあんたをずっと愛し続けてる。

肉体を失って、宇宙の粒子の一つに還ったとしても、私はずっと
ヒ口を見つめている。

それは死ぐらいではなくならへんものなんよ。

私はこの世界のどこにでも存在する。

朝顔の葉に輝く、朝露の滴の中にも。夕暮れの空に棚引く絹雲の
中にも。

真夜中にひっそりと輝く、冬の星々の煌めきの中にも。

ほら、上を向いて、空を見上げて』

姉に抱き締められた僕の意識は飛翔していた。

僕の意識は、天蓋を覆う分厚い灰色の雨雲を突き抜け、慈愛に満ちた星々の輝きを見た。

恒星と銀河の確かな息吹を感じた。

愛そのものだった。圧倒的で、完全な愛　そのものだった。

パッカー車は、ラーメン屋の豚骨が入ったポリバケツの横に停車した。

どしゃぶりの雨が降り続けるその場に跪き、天を仰いだ。

そして魂で、全身全霊で　この感覚をどう表現していいかわからない　僕は　泣いたのだ。

『世界は愛と美に満ち溢れている。僕は愛されていたんだ』

異変に気付き、運転席の定岡さんが飛び降りてきた。
僕は激しい感動に震えながら、その場で泣き続けた。

その日、僕は定岡さんと会話を交わした。なんてことのない世間

話と天気の話だ。お互いぎこちない会話だった。

元クラスメイトにも出会った。

笑顔で、彼らに手を振って挨拶した。彼らは驚いた顔をした後、笑顔で手を振り返してくれた。

僕はその日、やっと自分がゴミ屋になれたんだ、と思った。

難しい理屈なんて何も必要なかった。

自分が世界を拒絶し、周りの人に心を閉ざしていれば、何もかも歪んで見える。

しっかりと地に両足をついて立ち、深呼吸をして世界を静かに眺める。

心の中心を誰かに明け渡すのではなく、静かに良いものと悪いもの、受け取るべきもの、受け取るべきでないものを、見極めるんだ。

自分が出来る範囲で、今は選び取ってゆくしかない。それしかないんだ。

その日の晩、姉の四十九日の法要を済ませた後、僕たちは三人と一匹で、夕食のテーブルを囲んだ。姉の好物だったすき焼きだ。食卓の、姉がいつも座っていた席にも、箸と茶碗、そして取り皿が置かれた。

これが姉を囲んだ最後の晩餐になる。

僕は姉がその席に座って、微笑んでいると信じていた。姉が冗談を言って家族を笑わせる姿や、僕の牛肉を奪い取る姿を想像した。胸が一杯になって、取り皿の上に涙が零れた。叔父さんも叔母さんも目に涙を貯めている。

「ヒロ……今日は泣いたらあかん日や。

朋子が哀しんで、天国に逝かれへんようになるからな。

今日はしっかり食って、明日からまたがんばるんや」

叔父さんはそう言い、僕に牛肉を山盛りに装ってくれた。

「もつといっぱい食べてね」

叔母さんはおかわりの御飯を装ってくれた。

僕たち三人はビールとウーロン茶を飲み、姉の思い出について語り合った。

食事中、僕と姉が喧嘩をして、姉が僕にコップの水を頭からかけた話、姉が笑った弾みでおならをして、そのおならを嗅いだダイフクが、急いで別の部屋に逃げた話。

僕たちは久しぶりに、心の底から笑うことが出来た。

家族の中心には、いつも姉がいたことを思い返していた。

「叔父さん、叔母さん、僕を養子にして下さい。名字を吉本にしたいんです」

風の岬から帰ってから、ずっと考えて続けていたことを口にした。

「それは別にかまへんけど、急にどないしてん」

叔父さんは少し驚いた様子で言った。三年前ここに来た時、養子になりたくないと言ったのは僕なのだ。

「姉ちゃんと同じ名字になりたいんです。」

結婚は出来へんかったけど、僕が姉ちゃんと一緒に生きていた証しに。

……そしていつか叔父さんの会社を継ぎたいんです」

叔父さんは苦笑してから、優しく諭すように口を開いた。

「ヒ口……おまえが養子になるんはええ。」

でもな会社は継がんでもええんや。

今、おまえはうちの会社で働いとる。

多分おまえなりの、罪滅ばしみたいなつもりなんやろうと思う。でもな……それは違うと思うんや。おまえが本当の意味で選んだ道やないからな。

ゴミ屋やるんもええやろ。ゴミ屋も立派な仕事や。みんなこれで家族を養つとんやからな。

でもおまえは……おまえだけが出来る道を探したらええんや。

おまえは俺と違って頭もええ、運動も出来る。だから来年からはちゃんと高校へ行くんや。

そして三年間勉強してから、自分の進路を決めるんや。

大学に行って何か勉強するか、それともゴミ屋やるか、それはおまえの自由や。

朋子やって、きつとおまえにそう言うやる」

「ヒロ君お願いがあるん。

明日から、うちらのことお父さん、お母さんって呼んでね」

叔母さんは頬に涙を一筋零して、そう言った。

「ヒスイ……今日は泣いたらあかんって言うてるやる」

一心不乱に肉を食べていたダイフクが立ち上がって耳をぴんと立て、一声短く吠えた。防音構造になっているはずの応接室から、鮮明なピアノの調べが聞こえてきた。

シヨパンの『別れの曲』だった。

「トモちゃん 朋子!!」

叔母さんは憑かれたように立ち上がって、応接室へ走ってゆこうとした。しかしその手を叔父さんはしっかりと握った。

「朋子は みんなに最後のお別れを言うてるんや。

だから行ったらあかん……」

叔父さんは震える声でそう言った。

叔父さんは大粒の涙をぼろぼろ、ぼろぼろと食卓の上に零していた。ごしごしと右手で涙を拭い、懸命に涙を止めようとしている。

僕はその時分かったんだ。

姉ちゃんを誰よりも愛していたのは僕なんかやない、叔父さんやったんや、って。生まれてくる子供のためにヤクザを辞めてカタギになり、ゴミ屋をしながら、姉ちゃんと叔母さんを護り続けた叔父

さんなんやつて。

誰よりも誇り高い叔父さんは、愛する家族のためにゴミ屋になって生きてゆくという道を選んだ。それが叔父さんの選び取った道だった。叔父さんの不器用だけど、精一杯の愛し方だった。

『僕は今まで、一体何をやっていたんだろう？』

僕は自分を最低のクソ野郎だと思った。

僕はずっと愛されることだけを求めていたんだ。

母にも、姉にも、際限なく愛を求めていた。しかし僕は、彼女たちに何も与えることは出来なかった。守ることさえできなかった。

それでも彼女たちは、惜しみなく愛を与え続けてくれた。

僕は他者に最も大切なものを乞い続けていたのだ。

『それは彼女たちの、命そのものだったんじゃないだろうか？』

姉のピアノの調べは、限りなく優しく、限りなく甘く、僕たちの心に響いた。

僕たちは姉の最後の演奏に耳を澄ませた。

ピアノは歌っていた。

『お父さん、お母さん、ありがとう。あなたたちの娘に生まれて、本当に幸せでした』

雨が好きな人だった。

私は不思議だった。

『あめの日はそとでかけっこをしたり、すなあそびをしたり、おともだちと、うらやまの森にたんけんごっこでかけたり、そんなワクワクするようなことが、できない日なんだよ、へんなの』

そんな風に思った。

「どうしてママはあめがすきなのか？」

「パパと初めて逢った日は雨だったから。」

あの日、雨が降らなかつたら図書館に入らなかつただろうし、そこで傘を失くしてしょんぼりしてなかつたら、パパに逢ってなかつたかなって思うから」

「かさにちゃんとなまえかいてた？」

「ううん、書いてなかった」

「かいてないとまちがって、おともだちがもってかえるかもしれないから、ダメだって先生がいつてたよ」

「そうね。名前をちゃんと書いてなかったから いけなかったんだね」

「パパといっしょになかよしでかえったの？」

「ううん一緒に帰らなかつた。パパ、ママに傘をくれたの」

「はずかしかったのかな？ おばあちゃんにでんわして、むかえにきてもらったのかな？」

ママは昔を懐かしむ目をしてから嬉しそうに笑い、私の髪を丁寧ブラシで梳いてくれた。

それがママと雨の記憶。

今起こっていることが、次の記憶になるんだろうな、ぼんやりとそんなことを思っていた。

窓から見える車道には、白いセダンの乗用車がエンジンをかけたまま止まっている。ワイパーが時折思い出したように、ゆっくりと雨を弾いている。ママ今日も雨だよ。雨の日に出逢って、雨の日にお別れなんだね

「私は、一緒に行かへん 私はパパという。

あなたはお腹の子と、誰かのところで、何もかも新しくやり直せばいいんじゃない。

最期に一つだけ聞かせて欲しいんだけど。

どうして私を産んだの？」

普段なら「なんで」って言うと思う。

でも私は「どうして？」とママに問いかけた。

単純な理由が聞きたいのではなかった。理由の向こう側にあるママの心を知りたかった。

自分の口をついて出た言葉が、ママを傷つけると分かっていた。でもその意味を問い質さずにはいかなかった。

今、あなたのお腹にいる誰かの子供のように、私は何かの過ち、間違いなの？

それともあなたの人生にとって、私が間違いなの？

ママは俯いた。声にはならなかったが「どうして？」とルージユ

を引いた赤い唇が動いた。まるで遙か彼方に置き忘れた記憶を呼び起こそうとしているようだった。

「パパを好きだったし、リエちゃんに逢いたかったから、かな」

「は？ 超うけるし。またどっかの誰かを好きになつて、お腹の子に逢いたくなつちやたんだ！」

私は乾いた声で大げさに笑った　ママの心を殺したかった。

「ごめんね」

「別にいいんじゃない。恋愛は自由だし？」

「なんかあつたよね、自由恋愛？ それじゃない？ 超うけるし」

「ごめんなさい」

「あはは、ホント超うける」

「本当にごめんなさい」

「謝らないでよ。娘に頭下げて、謝るようなことせんとつてよ！」

「　　パパをお願いします」

私はベッドの側にあつた蛙のピョン太の目覚まし時計を投げた。

ぴよん太はママの額に当った。

「立てリエコ！ 立つんだリエコ！ 起きるんだリエコ！」とぴよん太は喚き出した。

それが可笑しくて、私は狂つたように乾いた声で残酷に笑った。

ママの足音が階下に遠ざかつてゆき、玄関のドアが閉じられる音を確認した時、抑えていた哀しみが弾けて　私は泣いた。

ママが出て行ったのは私が中3の夏休みだ。7月30日と日記に付けてある。

パパは有給をとって会社を3週間休んだようだった。朝から晩ま

でパチンコなどへ行き、お酒を飲んで深夜に帰宅しているようだった。

心が冷え切っているからか、二人が離婚した理由に私はそれほど興味がなかった。

パパは自分が全て悪いのだと呟き、ママは私のわがままなのと言った。

本当のことなんて、本人たちでさえ理解していないのかもしれないとぼんやりと想像した。

お互いの本当の気持ちが分からなくなるから、別れるんだろうし。大したことではない、どこにでもある小さな不幸なのだ。涙が溢れてくる度にそう理解しようとした。

私は窓も開けずに、二週間、家に閉じこもった。ぼんやりと漫画を読んだり、ネットでアニメを見たりして過ごした。大好きなラブコメのシーンが下らない人形劇のように空々しく流れていた。

パパとは「おはよう」と「おやすみ」しか喋っていない。

部屋の扉の前で「おはよう、おやすみ」とパパは言い、私は「うん、おはよう」と、鸚鵡返しに声を出した。そんな日々の中で私は裕晶君に出会った。

昼過ぎにシャワーを浴びているとインターホンが鳴った。2回くらい無視した。そういえば昨日も一昨日も、この時間に誰か来たことを思い出して、慌てて下着を穿き、タンクトップとデニムのホットパンツを身に着けた。

「はい、どなたですか？」

「あ、お世話になってます、吉本商会です。7月分の集金に伺いま

した」

若い男の人の声だ。

「すいません 吉本商会って何ですか？」

「あ、えーとゴミ屋です。お好み屋ヨシ江さんのゴミを収集させてもらってます」

お好み屋ヨシ江は祖母の芳江が始めたお店だ。2年前に祖母が亡くなってからは、祖母を手伝っていたママが切り盛りをしていた。

8月に入ってから ママがこの家を出て行ってから、シャツターを閉めきっている。パートに来てくれていたおばさんと材料の仕入れ関係の業者の方には、パパは連絡を済ましたと言っていたが、ゴミ屋さんにはまだだったんだね。

ホント、パパってツメが甘いよね、って思った。

「あ、はい。今出ますね。」

紺の作業服を着ているけれど、ほっそりとしていて、王子様系の端整な顔だちの人だった。背も私よりずっと高い。ゴミ屋さんと聞いて想像したイメージとかなり違った。

ゴミ屋さんは私を見て、少し驚いたような顔をした。ブラとか出てるのかも、と確認したが、別にそんな様子はない。

「えっと……幾らですか？」

「3500円です」

「……って、お金持ってきてなかった。えーと店の方に回ってもらえます」

店の方に回ってレジを覗くと釣り銭が入っている。私はシャッターを少しだけ開けて、ゴミ屋さんに入ってもらった。

「えっと、細かくていいですか？」

「その方が正直、助かるんです」

ゴミ屋さんは、人懐っこく表情を崩した。

「はい、500円ばかりですけど、3500円」

「ありがとうございます」

「あの」

「えっと」

お互い少し言いにくい言葉を切り出そうとしているのが分かって、苦笑した。

「うち　もう当分この店を閉めるんです」

「やっぱ、そうですか　今月に入って全然ゴミが出てなかったから、もしかしたらそうなのかなって。僕も姉もヨシ江さんのねぎ焼が大好きだったから残念です。」

でもとても繁盛されてるように思っていましたけど」

ヨシ江は地域に愛され、根付いていた店だった。夕方には高校生や大学生で賑わい、21時の閉店時間まで、常連のお客さんの誰かがいつも、お酒を飲んでいた。祖母が亡くなった際、閉店しようとパパが言ったが、ママが続けることを願った。

「えっと。母が男の人作って出て行っちゃって。」

私も中学生だし、まだこの店を切り盛りしますって、わけにはいかなくて。

あはは、今、はやりの家庭崩壊って奴です」

なるべく軽く言っただつたけれど、ゴミ屋さんの顔に影が差したのが分かった。

すっかりしる私、いきなりそんなディープな話したら、誰だって困惑するに決まっている。

「すみません……立ち入ったことを聞いちゃって。」

何て言っていていいか分からないけど　その……頑張らないで、下さい。

えっと……ご飯とかちゃんと食べてます?」

「お好み焼の材料が結構残ってて、1日に1枚は食べてますから。あ、シャッター閉めてもらえます?」

ゴミ屋さんはよく事態を飲み込めないという顔している。

「ネギ焼はムリですけど、モダン焼やったら出来ますよ。

お世話になったゴミ屋さんに最期にご馳走します。

ていうのは言い訳で、余ってる材料、もうそろそろ無くしたくって。

……時間大丈夫ですか?」

「ありがとうございます」

ゴミ屋さんは少し迷ったような素振りを見せたけれど、とびきりの爽やかな笑顔を私にくれた。

私は厨房の冷蔵庫から、生地を取り出した。

「お姉さんの分とで、スペシャルモダン2枚お持ち帰りでもいいですか?」

「えっと……一枚をお願いします」

「遠慮しなくていいですよ、もう少しで材料、全部やつつけちゃいそうなんで。

ていうか、あはは、もう二枚焼き始めてたり」

「　姉は2月に事故で亡くなったから、もう一緒に食べられないから」

ゴミ屋さんの言葉を聞いて、頬を叩かれたような気分になった。この人が、がんばらないで下さいとか、ご飯食べてますか?　と

私に言った理由がずっと胸に染みた。

「じゃ、ゴミ屋さん、一緒に食べましょうか」

「うん、ありがとう」

ありがとって言葉を聞いた途端、涙が止まらなくなった。泣きながら私は完璧なモダン焼を焼き上げた。

「出来ました。おばあちゃん直伝のモダン焼です。

ちよつと私の涙エキスが入ってるかもですが、味は保障します」

「うん、すごく美味しそうだ」

私とゴミ屋さんは話をしながら、お好み焼きを並んで食べた。

名前は吉本裕晶さん。大人っぽい雰囲気だったので、18才くらいかと思っていたけれど、私より1才年上で16才だと彼は言った。なんか色気？　っていうのかな、成熟した男性だと思った。

「吉本商会の吉本裕晶さんか、てことは社長の息子さん？」

「うん」

「高校には進学しなかったんだ？」

「うちの仕事を手伝いたかったから。でも来年は高校に進学するつもり」

「へーじゃあ、私と同級生かもですね。どこの高校狙ってるんですか？」

「んー 高校かな」

「すごい進学高じゃないですか。家ってうちの近くなんですよね。一つ違いなのに全然見たことないかも。どこの中学だったんですか？」

裕晶さんが言った中学の名前を聞いて私は合点がいった。会うはずないわけだ。

「……ってそれ国立ですよ。あはは、私西中だし、勉強得意じゃないから、そりや会わないわけだ。」

でもあそこの中学で就職する人って珍しくないですか？」

「そうかな？　でも多分、俺、リエコちゃんと会ったことあるよ」「え」

「なんかさっき玄関でリエコちゃん見た時、すごく懐かしい人に合ったような気がしたかも」

「わ、もしかして中学生口説いてます？」

「ちよつ、違うよ！」

「彼女いるんですか？」

「いないよ」

「私なんかどうですか？　裕晶さんってかなりタイプかも」

「あはは……光栄やけどダメ」

「年下には興味ない系？」

「そうじゃないけど」

「けど？」

「呪いかな」

「呪い？」

「僕が好きになった女の人は死んじゃうから」

「嘘でしょ？」

「本当だよ。そんなこと嘘は吐けない」

「でも、私死んでもいいかな。この頃なんとなく……そんな気分だったかも」

裕晶さんの顔を覗き込んで視線を探ると、尖った視線に捉えられた。キスしようとしたら、強く抱きしめられた。

「無理しなくていいよ」

「え？」

「泣いていいよ。キミは悪くないし、誰も悪くない」

「もしかして裕晶さんって、すごい女たらしでしょ？　すごい慣れた感じがする」

「リエコちゃんは悪くない　悪くないから」

悪くないと四回言われて、心が折れた。

「私……パパもママも好きで、ずっとそうやって暮らしていけるって思ってた、

でもママのしたことが許せなくて　今までのことは全部嘘だったのって、

私たちって何だったのって、悔しくて……許せなくて

……ママの心を傷つけたかった……」

そこからもう言葉じゃなくなった。裕晶さんの胸を力いっぱい拳で叩いて、子供のように泣きじゃくった。その間、裕晶さんは私の頭を撫で続けてくれた。泣き止むと呼吸が緩やかになっていった。久しぶりに、どろっとしてない空気、普通の空気を吸っているようになって　私は眠った。

「目が覚めた？」

『！』

椅子の上で、裕晶さんに膝枕をしてもらっている体勢だった。

「もしかして私寝てました？」

「うん、30分くらいかな？」

「……すいません」

「ううん、でもそろそろ家に帰らんとあかんかも」

「……ホントにごめんなさい」

「気にせんでええよ どうせ今日は暇やったし。」

「じゃ俺帰るね。モダン焼ごちそうさまでした。すぐく旨かったよ」

「あの」

「ん？」

「また逢ってくださいか？」

携帯のメルアドとか教えてくれますか？

ていうか断られたら私、自殺するかも」

「怖いなあ」

裕晶さんは本当に弱ったという表情をした。

「友達でいいなら、いいよ」

「でも彼女になれる可能性はありますよね？」

「それじゃ、バイバイ」

とびきりの優しい笑顔を残して、立ち去ろうとする。この人はきつとDSに違いないと、私は推測した。

「あつ待つて。分かりました。友達でいいです。最初は」

携帯を取り出して、私達はお互いのプロフィールを交換した。

「すっごい嬉しいかも！」

「俺、ゴミ屋からすぐ早く寝るから。21時とか。で4時起き」

「あはは、なんかおばあちゃんみたい」

「そうそう、そんな感じやから」

裕晶さんはバイバイと言い、シャッターを開いて出て行こうとした。私も小さく手を振った。それから思い出したように集金のハンドバッグから、オレンジのビニール袋を取り出した。

「姉がお世話になった先生に持っていく途中やったんやけど、

まだ家にようさんあるし、これリエコちゃんにあげるよ」

「見ていいですか？」

「うん」

『吉本朋子 バッハ・ゴールドベルク変奏曲』というジャケットだった。

ショートカットで、猫のように大きな目をしたチャーミングな女性性が、恥ずかしそうに微笑んでいる。

「良かったら聴いてやって」

「これって」

俺のと言いかけ、裕晶さんは一度言葉を切った。

「僕の姉だよ」

裕晶さんは振り返らずに手を振って出て行った。
これで恋しなきゃ嘘でしょ、って思った。

裕晶さんが帰ってから、PCを立ち上げて吉本朋子をググると2

3万8000件HITした。

17才で日本国内で開催される、国際コンクール・ピアノ部門で1位入賞し、一躍時の人になったそうだ。とにかく天才的な演奏という記事が多かった。

でもそれから数ヶ月後、今年の2月に交通事故で亡くなったと書いてある。

ヘッドホンをしてCDを聴いてみよう。バッハ、音楽の授業で聞いたことある曲なのかな。じゃじゃじゃーんって、あれはベートーヴェンですね。ヘッドホン、ヘッドホン、あった。

予想に反して、頭を撫でられるような、やさしいゆっくりとしたイントロだった。

あれ、なんか声入ってるよ。ピアノに合わせるように綺麗な女の人の歌声が微かに聴こえてくる。ラララという彼女の歌声は嬉しそうで、すごく優しい。

この人が裕晶君のお姉さんでもう亡くなっている。

この世界のどこにも、もうこの人はいないのだと思うと、すごく哀しくなった。

ピアノの音色は水のように清らかで、流れるように早くなってゆく。

音色はどこまでも澄み渡り

真綿のような千切れ雲が浮かぶ青い空が見えて、

地平線の先まで広がる草原の中に私は立って、

風が吹き抜けていった。

彼女の声がピアノとシンクロして聴こえる度に、涙と鼻水が止まらなくなった。

心がもつと聴きたい、もつともつと聴きたいよって、泣いていた。まるでママに抱かれて眠るような、やすらぎに心が満たされていた。

曲が終わると、顔はぼろぼろで、ティッシュの山が出来ていた。

朋子さんの演奏が、心を綺麗に洗い流してくれたんだって思った。そう実感すると暖かい気持ちですつと染み込んでくるようだった。

裕晶君と朋子さんが、一人で暗い沼の中に沈んでゆこうとする私に、手を差し伸べてひっぱりあげてくれた、そう思った。

時計を見ると、20時を回っている。まだ時間は大丈夫だよな。

私は携帯を取り出して裕晶君にメールを打った。

件名『裕晶君、朋子さん、本当にありがとう』

頂いたCDをあれから早速聴いてみました。

感動して、聴きながらずっと泣いていました。朋子さんの歌声がとても素敵です。

こんなすごい人が同じ街に住んでいて、でも私は全然知らなくて巡り逢えた時にはもう亡くなっていたなんて、すごく哀しくなりました。

私は現国というか、作文が苦手なので上手く書けません、なんか心を綺麗に涙で洗い流せたような、すっきりした気分です。

私は生きてるんだって思いました。

簡単に死ぬなんて言うてしまうことは　とっても悪いことかもしれないと思いました。

朋子さんに、本当にありがとうってお礼を言いたいです。

お姉さんを失った裕晶君はもっと哀しいはずなのに、膝枕をしてくれてありがとう。

私がお婆さんになっても、今日のことは忘れないと思います。

1秒前の自分より、強くなりたい。

1秒前の自分より、優しくなりたい。

1秒前の自分より、素敵になりたい。そう思いました。

それでは、おやすみなさい。

返事がないと、私眠れません。携帯の前で、ずっと返事を待っています。

5分後にメールの返事が来た。

件名『おやすみ』

From『裕晶君』

ありがとう。おやすみなさい、リエコちゃん。

確かに返事は返事だけど、単語三つきりなんだ。でもこの素っ気無さが萌えるよね。最期に私の名前の呼びかけが萌え過ぎです。

リエコちゃんだって、リエコちゃんって……

これなんかエッチな夢見そうだよ。

テンション上がってきた。なんか元気出てきたよ私！
いかん、少し落ち着け、リエコ。

1秒前の私より、1cmでも前に進むんだ。

私はすぐに自転車をつかちとばして、一番近いスーパーへ向かった。

自転車に乗りながらで、ごめんね。

初めまして。私の名前は松下理恵子。

西中に通う中3の女子であります。一人っ子です。中学では陸上部に所属していました。

好きなことは漫画を読むこと、アニメを見ることが、それと走ることかな。

中学は陸上部に所属していたんですが、最近辞めちゃいました。

勉強はあんまり得意じゃありません。父の松下悠一郎は県内のスポーツメーカで競技用シューズの開発をしています。

母は好きな人が出来たそうで、最近出て行きました。

今日、好きな人が出来ました。でことで、ユカリスーパーに到着しました。

玉葱4個と合挽き肉が400グラム、ん、二人分だから多いかな。まっいいか、パン粉って家にあっただけかなあ。キッチン見てくれば良かったよ。まっこんな感じで後先考えずに行動するタイプなんだよね、私って。あとキュウリとツナとトマトでサラダを作りますか。

私は手早く買い物を買わせて、家の近くのパチンコ屋さんを覗きにいった。

悠一郎（父）は啜えタバコをしながら、非常に不機嫌そうに某アニメのパチンコをしていた。やたらと父のパチンコ台だけピカピカ光っている。

てか、おい悠一郎、君、タバコやめたんじゃない？ 気付かれないように背後まで忍び寄って、わっ！ って大声を出してやった。

「おおっ？」とマジびびって、タバコを落とす悠一郎。

「パパ！」

「おおりエちゃん！」

「もう帰ろうよ、パパの好きなハンバーグ作ってあげるから」

「おおマジでっ！」

でもさ、これ見てよ、超一杯出てるのよ。あと30分くらいかかるかもしれない」

「ふーん、そうなんだ。でも今、一緒に帰らないと一生後悔するかも。」

そういうタイミングって大事だよ。まだ懲りてないの？」

「いあ、帰ります」

「そそ、素直が一番。一休さんも言ってたよ」

「そうなの？」

「あはは、嘘。でも言ってそうでしょ。じゃ行くよ」

「ちよ、これお金に交換しなきゃ」

「ぐずぐずしてないで、ダッシュ！」

パパは隣のおばさんに自分の席を譲り、交換しに走っていった。

おばさんは私につこり笑ってチョコレートくれた。そして手招きをし「お父さん、泣きながらパチンコしてたよ」と耳打ちした。「ありがとう、おばさん」と一言いい、手を振って店を出た。

すっごいタバコの臭いと、轟音がするよね。よくこんな空間にずっというよね。一種の拷問に近いよ。

「パパ、二人乗りして帰ろうか」

「よっしゃー！」

父はよっこらしよとサドルに腰を下ろした。ハンバーグの材料を籠に移して、私は後ろに腰を下ろした。

「うわ、服タバコ臭いよ。まあいいや、全力でダッシュ！」

「任せろ！」

私たちはキッチンで一緒にハンバーグを作り始めた。お肉を両手でキャッチして空気を抜きながら、おしゃべりをした。

「仏の顔も三度までつて一休さんも言ってるでしょ。これで浮気される痛みが分かった？」

無言の悠一郎。

「大人しい真面目な人を怒らせたら、怖いんだから」

バカ悠一郎が再起不能になりそうな気配を感じて、私は話題を変えることにした。

「有給っていつまで取れたの？」

「今週いっぱいかな」

「じゃ旅行つてもキツイね」

「マジすまん」

「あ、そうだ。今日ね、私さ、好きな人が出来ちゃった」

「ええマジで！」

「うん、マジで」

「もしかして何かされた？」

「残念ながら、何もされなかったよ。私は何かされたかったかもだけど」

「マジ凹むなその発言。俺、後で絶対ベッドで号泣する」

「そっなの？」

「うむ」

「パパ可愛そうだね」

「可愛そうだよ」

「ま、自業自得だよな」

涙目のバカ悠一郎。

「私分かったことがあるよ」

「ほう、何が分かったリエちゃん、パパに言ってみそ」

「ずっと同じで、変わらないことなんて、保障されてることなんて何一つないのになって、思った。

でも立ち止まってることも出来ない、生きてる限り」

「そうやな」

「うん。哀しいことはこの世界にいっぱいあって、それに私は気付いていなかったけれど、それに負けないで前に進もうとしている人がたくさんいる。

パパとママのことは、私にとってすごく寂しくて、哀しいけれど……私は前に進むよ」

「そうか」

「そうだよ」

感情を抑えながら話していたけれど、そこで涙が出た。父が口を開こうとしていることに気付いて、私は釘を刺した。

「大人なんだから、ごめんとか絶対に言わないでね。

ママをまだ愛してるなら、ママが幸せになれるように、祈って上げて欲しい。

私はまだムリだけど、きっとそうなれると思うから」

「俺もまだ無理だから、リエちゃんの恋が上手くゆくように祈るとするよ」

「じゃ、そうして」

「うん、そうしとく」

「ハパ、ご飯食べたら海までゆっくり走りに行こっか」

「そうするか」

私たちは2週間ぶりに食卓を囲んで食事をして、その後、海まで走りに行った。

帰宅すると23時を過ぎていたので、私はシャワーを浴びて眠った。

翌朝から、ささやかだけど、はっきりとした目標が出来た。

いつか私が、あの人の、大切な人になるんだって。

あの人のことを考えるだけで、鼓動が不自然に跳ねる。

この想いを、絶対ここで終わらせたりしない。

あの人のいる場所まで　きっと私は辿り着いてみせる。

とりあえず、そんな感じなのです。

おしまい。

これマジで、ありえないよね。

この何ともいえない雰囲気の後で私って……。

て言うかさ、この扱ってどう考えても完全に脇役だよね。

頭が良くて可愛くて、スタイルも当然完璧で、美少女というアイデアを体現するような存在の私が、

「いかに世界の男どもの心を掌握し、ほんのついでに天下さえも獲っちゃった」的な物語をね、話してあげようとか少し思ったのにさ。

かなり納得はいかないが、半ばどうでもよくなってきたので、自分について語り始めることにする。

私は清家美夕。せいけ・みゆう一回しか言わないので、読めないバカはちゃんとメモるように。

今は美少女として、ローカルな規模で知られているに過ぎない存在だが、いずれは同時代に生きた女性の中で、最も有能で美しい女性として知られることになります。

これは仕方ない、実際ホントだし。

今、私の足元をぐるぐる回って

「待遇改善を要求する。独裁者は滅びると歴史は証明している！」とシュプレヒコールを上げているのは妹のリン。

一見して分かるようにこの子は人間じゃない。といっても、やらでつかい角を生やしてる白い羊でもない。人語も解すし、生意気に待遇改善とか賃上げも要求してくる。うっとうしいことに、声帯を使わず頭に直接響いてくるような話し方をするので、耳栓をして

も意味がない。

なんか本人の主張するところによると麒麟(?)らしい。

主に街の小さい公園を寢床として生息しており、童貞には見えな
い。というのは嘘で、私以外には見えず、それはそれは賢くて、見
る人が見たら手を合わせて南無と崇め奉らなくてはられない、そ
れはそれは有難くて立派な聖獣らしい。

嬉しいと、このようにピアノの音階のような綺麗な泣き声をする。
ちよつと、いい加減黙れつて、このように蹴りを入れると、聖獣と
か抜かしてるわりに噛み付いてくる凶暴さをもっている。

歯が丈夫らしく、これが無駄に痛かったりする。

食事は特に取らなくても死なないそうなのだが、いつの頃からか
甘いモノに目がなくなっていた。

ケーキやシュークリームなどを、一日一個は食べたいと要求して
くるので、かなりウザい。

自分が太らないからって、そんなのズル過ぎるっの。

本人が主張するところによると、私が誕生した際この世界に現れ、
以後私をずっと守護してきたらしい。

まあ確かに物心が付いた時には、既にリンはいた。

純真な幼心に残る記憶(5才くらい)でも、

『なんだてめえは。わたしのシマでなにしてやがる』

『やつと気付きましたねミユウ。私は麒麟、汝を守護するもの
です』

『きりん？ べつに、くびながくねえじゃん。』

なんでわたしのおうちででうろうろしてんだよ。

ん、てかそれって、もしかしてコブンのこと？」

『コブン？ ああ いえ、子分じゃないです』

『じゃあ、めざわりだからきえろ』

『 いや！ そ、それは困りますよ。』

だ、か、ら、麒麟なんだって。聖獣なんですよ！

聖獣っていうのは、この世界にあまねく存在する聖霊の総意として
『

てか、それってけっきょくのところ、コブンなんだろう？』

『 いえ、その何というか 』

『 コブンだよな？ 』

『 はい……子分です』 的なやりとりが、臃げながらあったような気がする。

性別はどうやら女らしい。

最初は自分に性別はないと言い張っていたのだが、

『 リン、性別ないってどういうことよ？ 』

『 私は聖獣ですから、この物質界のどちらかの極性に偏在する必要がないのです』

『 あんたさ、何でいつも自慢げなの。偏在って意味分かって言うてる？ 』

ん、ちよいまち。じゃあ何、あんたは男でもあるってわけだ。

草食系のふりして、可憐な女子のところに居候してるってことだ。

マジ信じらんない。女の敵だよな、そういう奴。

なんか本で読んだんだけどさ、ユニコーンっていうの？

あれってそういう類らしいよね。

馬だよ？ ちょっと馬って これってもう完全に変態だよな？ 』

『じゃあ、もう女でいいです』

『何よ、そのじゃあって。何か不満があるんだ。居候の分際で』

『いえ……今日から女になります……』的なやりとり（中2くらいの頃）が、臃けながら交わされて発覚したのだったと思う。

本人は私を護っていると強弁して居候しているが、炎を口から吐いたり、目から光線を出したり、間髪私のピンチを救う的な、絵になる立ち回りをしたことは一度もない。

彼女の言によれば、私は正邪問わず、靈的なよく分かんないものを引き寄せる体質らしい。

まあそんなもの一度も見たことがないので信じられないけど。エレガント且つ平和的な手段で私を守護しているらしいので、そういうことにしておく。

まあ自己紹介はそんなとこでいいでしょ。

リンが「巻いて、巻いて！」とうるさいので、そろそろ始めますか。

てかさ、あんたAD？

ミユウ 1

私があいつを初めて『知った』のは、高校一年の入学式で、その時私はすぐムカついていた。

その日はたまたま生理が2日目であり、下腹部が鉛のように重く、身体がだるかった。

またかつてない屈辱への怒りも手伝い、吐き気さえ催していた。

何に腹が立っていたのかというと、それは私が敗北したからだ。私は物心がついてからというもの、それがテストであれ、運動であれ、はたまた芸術的感性であろうと、一番以外のポジションに甘んじたことがなかったのだ。ん、1回はあったか、ピアノで。そう1回だけだったのだ。まあ、それは面倒なので省略する。

とにかく、私以外の人間が代表学生に選ばれたことに激しい憤りを感じていた。

そんなことはあつてはならないし、あり得ないことだった。

「吉本裕晶」

「はい！」

新入生代表の名前が呼ばれ、私の隣に座っていた男子が明朗な返事をして立ち上がった。

うおっ、ちかつ、隣かよ！ 私は激しく動揺した。

げっ、敵はこんなにも近くにいたのか。スポーツ刈りで背の高い男。

私が知力でこんなスポーツ馬鹿ばっい男に負けるとは。

私はガルううって感じで、音が鳴るくらい奥歯を強く噛みしめ、立ち上がったその男を睨んだ。

『待てよ、テストの点は私の方が良かったに違いない。
私の華麗なる答えは、ラマヌジャンの数式みたいにいつも完璧で
美しいのだ。』

こいつはちよつと背が高く見てくれが良く、人当たりが良さそうなので選ばれたに違いない。

世間とはかく、女が一番を取ることを素直に認めたがらないものなのだ。

見てろ、私は絶対に日本初の女性首相になって、
世のくだらない男どもを、私の足下に跪かせてやる！』

などと、そんな風に、閉鎖的日本社会の女性差別に対する憤りで頭がショート寸前になっている間に、スポーツ馬鹿（既に決めつけている）は着席した。

はやっ、聞いてなかったし！

大きなため息を一つ吐いて緊張から解放されたスポーツ馬鹿を、目から火花が迸るくらい、憤怒の瞳で睨みつけてやった。

するとスポーツ馬鹿は、尋常ならざる憎しみの視線に気付いたのか、私の顔を見て、一瞬戸惑った表情を浮かべた。そして近くの教師に手を挙げて合図をした。

「すいません、隣の女子が、ちよつと気分が悪いみたいです」

『ちよつ、こいつ！ なんておせっかいで無神経な奴なのだ。私はおまえに対して、ムカついているだけなんだよ。リン！ こいつの尻に噛みつけ！ コラ、無視すんな』

「清家さん。大丈夫ですか」

隣のクラスの担任らしい、若い女性教師が私の側に駆け寄ってきた。

「ええ、大丈夫です……」

全教師、全生徒の視線が一斉に私に注がれていた。

私の感情を表す計器は、羞恥心と怒りで針がマックスを軽く振り切り、同時に胃が雑巾みたいに絞り上げられるのを感じた。

『ヤバイ』

その瞬間、私はスポーツ馬鹿の学生ズボンへ思い切り嘔吐した。私はこの馬鹿の太股に、倒れ込むような格好になってしまったのだ。なんという屈辱！

体育館は水を打ったように静まりかえっている。

私は瞬時に27の打開策を検討し、古典的だが王道でもある、と、このまま気を失うという結論に達し、失神した。

ミユウ 2

知る、とはどういう意味なのだろう？

知識は事物の性質、他の事物との関係についての真なる判断を意味するから、知識とは真なる信念である。

判断とは、ものを見るものと見られるものに分け、それを再び統一することである。つまりこの主体と客体の立場から、見られるもののみを合理的に分析することである。

認識の発生と成立に経験は不可欠であり、この場合、私はスポーツ馬鹿をお節介で無神経な不倶戴天の敵と認識し、他者にとってスポーツ馬鹿は、入学早々ゲロをかけられた入試トップの男子、私は体の弱い（？）ゲロ女ということになる。

こんなことがあつて良いのか？

人生の栄光の第一歩を、この名門高校に刻む私が、同級生に、事もあるうに「ゲロ女」と認識されることなど。

幼稚園の時オシッコを漏らした男の子の名前を、いまだに覚えていた。

今まで私に告白してきた、あまたの男どもの名前は忘れても、ただ「オシッコを漏らした」という一つの過ちだけで、彼の名前は、私の胸に永久に刻み込まれたのだ。

それは私の社会生活において、初めてと言える衝撃をもたらした。「恥」というものへの恐怖だ。そんな屈辱を受けるならば、正直死んだ方がましだと幼心に思った。

私とその栄光に満ちた人生を終える最後の時、即ち走馬燈のように自己の生を回想する時、彼は「オシッコを漏らした子」ということで、クスツツて感じて登場するだろう。

ということは、私が衆議院で首班指名を受け、議場が初の女性首相誕生の興奮で、拍手と歓声に満ち溢れているシーンがニュースで流された時、同級生たちは私を、「ああ、あの入学式のゲロ女」と思い出すのだろうか？

『生きるべきか死すべきか、それが問題だ』

「清家、今のところを日本語に訳して」

『へ？』

チヨークに塗れ、ありえないほど真っ白になった鼠色のスラックス（今時ネズミだって鼠色なんか着ねえよ）と白いカッターシャツ、センスの欠片もないネクタイと銀縁の眼鏡を光らせながら、英語教師は教壇から歩み寄ってきた。

「おい、ここだよ、ここ」

私の隣（何という運命の皮肉だ）のスポーツ馬鹿が、教科書の英文を指差した。

「分かってるわよ、ウルサイわね！ 文学的にどう訳すべきか検討してただけ。ええっと、目をはらして外に出ると、ロンドンには薄墨に夕暮れていた。お茶を飲み、車で帰りながら、私たちは、共に過ごした楽しい娘時代の日々の思い出に浸っていた」

「よろしい。清家、ぼんやりしてまた気分でも悪いのか」

担任の教師は微笑みながら、皮肉っぽくそう言った。
「いいえ！」

クラス全体が華やかな笑い声に包まれた。

横でお節介なスポーツ馬鹿（吉本裕晶）も一緒になって微笑んでいる。リン、おまえまで喜ぶな。おやつ抜きにすんぞ。

『私はこんなイジラレキャラじゃなかったのに！』

これもすべてこの馬鹿のせいだ。この野郎、いつかギャフンと言わせてやる！

こいつを倒さない限り、私は前に進めない』

吉本（剣道馬鹿（再定義））は、すぐにクラスの人気者になっていた。

頭が良くて、明るく爽やかで、スポーツ万能というのがクラスの

女子の評価で、みんなが奴狙いらしい。

全く……馬鹿女どもは、自らの利己的な遺伝子の活動に操られ、優秀な雄を求めて「キヤーキヤー」騒がしい。

男とは、好きになるものではなくて、自らの美貌を讃美させる対象としてのみ、存在するのというのに。

あゝヤダヤダ。

小学校、中学校を通じ、一貫して不動のものだった、高嶺の花、マドンナ（死語？）という私のポジションは、私が奴の言動にいちいち過剰反応して喰ってかかるので、綺麗だけど「面白い奴」ということになってしまい、男子や女子に「気軽」に話しかけられるようになってしまった。

面白いだと！？ ふぁにいだと！

私の美が持つ、「絶対的に」高貴なるオーラは消え失せてしまったのである……。

しかしその意外な副産物として、私に初めて女友達というものが出来た。

同じクラスの松下理恵子と結城絵美である。いわゆる社交界（たった三人）デビューだ。

彼女達と映画を観たり、ウィンドウショッピングをしたり、ファミレスで際限なくおしゃべりするのは本当に楽しい。

理恵子は陸上部に所属していて、中・長距離走が好き、とにかく走るのが好き、というサラブレッドのような変人だ。

中学の頃から陸上を続けていて、1500m走では、全国で8位になったこともあるらしい。

ショートカットをした快活な女の子で、笑うとえくぼができる。日に焼けた、細いしなやかな筋肉質の体をしていて、トラックを走っている姿は、居眠りしている授業中とは別人みたいに颯爽として輝いている。

花より団子、食べることに歌うこと、漫画とアニメが大好き、男には今のところ興味なし（だと思う）。

絵美は夢見る文学至上主義者で、理想のタイプは左翼を自称する小説家。それについて私のコメントは差し控えさせて頂く。

ニーチェが愛読書。私はニーチェを失恋したもてない男の、開き直った世迷い言と思っているので、その点でいつも彼女と激しい論争になり、哲学の話は絶対にしない（私は今のところV・E・フランクが好きな）。もてない男は、いつの世も敗者なのだ。（ここ重要）

しかし私の密かなる野望が、私のある種のルサンチマンから発しているということは、認めねばならない事実だろうか。

絵美は小説を書いていて読んだことがあるけれど、美への感受性が鋭いせいか、世界が独自の雰囲気を持っていて結構凄い。

少々登場人物の思い込みが激しく、また自意識過剰で、読み手をぶちぎって完全独走態勢に入っているけれど、それはそれでひとつの才能だろうと思う。

しかしベッドシーンで愛撫している時、哲学を語ること（ゴダールの映画風）だけは、興醒めするからホント止めて欲しい。マジ吹出しそうになるので、いつもそこは必死でこらえる。

絵美は艶のある長い髪をしていて、胸がやたらとデカイ。

男子の前では、いつも清纯派の可愛い女の子を演じている（瞳からは、『私を守って！』光線を出している）。

目指す小説家は西塾ルリらしい。（なんで好きな男と好きな小説家が一致しないのだ？）

絵美は大学に進学したら、ほぼ確実に担当教官（おそらく哲学系）と不倫する、と私は睨んでいる。そして不毛な恋の話を、（不幸な自分に酔っている）彼女を慰めながら延々と聞かされるのだろう。

私は　私はなんだろう？

えーと、今のところ私は私だ。しかし目標ははっきりしている。不倶戴天の敵、打倒吉本（なんかお笑い芸人みたいになってきた）だ。

『彼れを知りて己を知らば、百戦して危うからず。彼れを知らずして己を知らば、一勝一敗す。彼れを知らずして己を知らざれば、戦う毎に必ず危うし』

温故知新。ここはまず孫子の兵法書に従い、奴のことを知らねばなるまい、という結論に私は達した。いにしえから情報戦に勝利する者が、戦いの勝者になるというのは自明の理だ。

しかし、まだ自らの諜報機関を持たない私は、諜報活動も自ら行わねばならない（当たり前）。

てかさ、リンおまえが何とかしろよ。人の道を外すようなことはできないって、したり顔で反論すんじゃないよ。おまえはキリンだろうが。

『うー、マジ早く権力が欲しい』

熟考を重ね、奴を尾行するという古典的な手段は、あまりにも私の自尊心を傷つけるので、手っ取り早く学生名簿を入手することに

した。（考え抜いた割にはちょっとショボイ）

私は学級代表という錦の御旗を利用することにした。ということ
で放課後、職員室の担任教師の元へと向かった。

ひっそりと静まり返った放課後の校舎は、昼間とは全く違った詩的な空間に変わる。

運動場から聞こえてくる野球部の金属バットの高い音、軽音楽部の遠いドラムの響き、夕焼けの中、トラックを全力で駆け抜ける陸上部の生徒たちの姿、サッカー部の生徒たちのかけ声、そしてそれらとは対照的な蝉の抜け殻のように空虚な教室の静けさ。動と静、赤と青、躍動と停滞、悩みなき心と憂鬱。

窓ガラスに映る自分の姿を見つめる。

この瞬間にも私の中で、留まり続けようとする少女の繊細で潔癖な部分と、成長していく生々しい女の部分が、闘ぎ合っているのが分かる。それは何処となく不自然で、均衡を失い壊れそうな姿だ。

私が、私をじっと見つめていた。彼女は少し寂しそうな表情をしていた。

ってリン、後ろで嬉しそうに跳ね回ってんじゃねえよ。

おまえは、なんとかテレビに映ろうとしている野次馬か！

「失礼します」

職員室の人影はまばらで、数人の教師がマグカップを手に、（チープな）コーヒーを啜って談笑していた。その中には私の担任である英語教師も混ざっている。

「清家か、こんなに遅くまでどうしたんや」

眼鏡君（彼の名前を覚える気がない）は、教室ではあまり見せたことのない、リラックスした表情で私を迎えた。隙だらけの純粹培養青年といったところか。職員室の時計は午後6時を指している。

私は笑顔Number 8（対教師用清純派優等生）を発動して微笑んだ。

「図書室で、文化祭にする出し物のアンケートをまとめていたら、つい遅くなってしまいました（大嘘）」

「まだ5月なのに、それはえらく気が早いな……」

「どんなことも（特に謀略には）準備が大切ですから（キツパリ！）」

「優等生は言うことが違うな。ここだけの話だけれど、清家は入試二番だったんだそうだ。同じ学級代表の吉本は一番だったし、俺は全く良い生徒に恵まれたもんだ。これからその調子でクラスをまとめていってくれよ」

「えっ、そうなんですか、そんなのまぐれですよ。（ちよ、私には一番しか似合わないの！ 奴がまぐれだったっの）」

ふと職員室の窓から、トラックを疾走している理恵子の姿が目についた。彼女は数人の女子の集団を引っ張り先頭を走っている。

彼女は目の前の何かを掴もうとしているみたいな表情をしていた。
（右目視力2.5）

彼女の目は、恋をしているみたいにひたむきで、一途だった。
（左目視力3.0）

私は一体ここで、何をしているんだろう？（私怨による謀略）

「で、清家は俺に何の用かな？」

「あつ……えっと、同じ学級代表の吉本君の電話番号を知りたくて、少し学生名簿を見せて頂きたいんですが（ぐずぐずしないで、とつとと出せ！）」

「連絡票って、配ってなかったけ？」

眼鏡君は少し怪訝そうな表情を作って言った。

「母が大ざっぱな性格なもので、いらぬものと間違えて捨ててしまつて……（これは事実）、別に、直接吉本君から聞いても良いんですけどなんかちょっと……」

私は眼鏡君の同情心を煽るために、右斜め41・8度に可憐に且つ弱々しく俯いた。

この時大切なのは、憂いを帯びた潤んだ瞳で視線を自然に床に落とし、蝶が花に止まつて羽根を休めるように、柔らかく一瞬瞼を閉じる（夕方が最良）。これで大抵の馬鹿な男は落ちる。

戸惑い、魅惑された眼鏡君の視線を、私は頬に感じた。（貰ったああ！）

「あつ……そうだな、あいつ剣道部が忙しくて、なかなか放課後も時間ないもんな。これだ、ほい」

眼鏡君は、机の鍵のかかった引き出しから、黒い表紙の学生名簿を取り出した。私は吉本の電話番号をメモしながら、住所、生年月日、家族構成、親の職業を素早く記憶した。

「すいません。無理を言つてしまつて」（ふう、ちよろい、ちよろい）

「文化祭の出し物、期待してるぞ」（は？ 何それ。そんなの知らないって！）

後ろも振り返らずに、宝塚歌劇団風の優雅な物腰で（見たことないけど）、職員室を後にした。

奴のデータを思い出しながら、長い廊下を歩く。

住所、まあ立地条件は中の上といった所か。親は会社経営か、一体何の会社を経営してるんだろう。

生年月日、あれ、こいつなんで私より一歳年上なんだ？

『ん、浪人？』

そうか！　なんだ浪人、奴は中学浪人だったのか！

私は奴の弱点（？）を見つけ、有頂天になってスキップした。（BGM・アルプスの少女ハジ・オープニング曲）

ん、この住所で吉本っていう名前、聞いたことがあるぞ。あれ、どこだっけ。なんか嫌な予感がする。え、これってもしかして。

『其の疾きことは風の如く、其の徐なることは林の如く、侵掠することは火の如く、知り難きことは陰の如く、動かざること山は如く、動くことは雷の震うが如くにして　』（このパターンが面倒臭くなってきたとか、内緒）

まあ細かいことはいい。苦節一ヶ月、晴れて私は奴の弱点を知った。速攻、ここは速攻だ！

私はリンとスキップしながら武道場に向かった。（完全にアルプスの少女ハジ状態）

あの剣道浪人馬鹿（語呂が良いので再々定義）を打ちのめし、私の前に跪かせるのだ！

屈辱に歪む奴の顔が目に見え。

あれ、リン。今すんごい可愛そうな子を見る目で、私を見たよね。おやつ抜き確定。

いや謝ってもムリですから。

じゃそこで逆立ちしながら土下座しろ。出来ないって？

出来ないから言っただよ！

ミユウ 3

武道場からは、気合いの籠もった怒声と奇声、激しく打ち合う竹刀の音、板張りの床を踏み込む音が聞こえてくる。

私は姿勢を正して、なるべく自然な素振りで（って、いることだけでかなり不自然だけどね）、武道場の中を覗いた。

中では15名ほどの生徒が、防具を付けて激しく打ち合っている。藍の刺し子の稽古着に、漆塗りの黒胴と面を付けた吉本の姿を捉えた。

顧問の体育教師に稽古をつけて貰っているようだった。

切り返しをする吉本の掛け声と、鬨ぎ合う竹刀の音が道場に響き渡り、微かに鳴動している。

流れるような右足の運びに、影のように左足が付き従い、ぴったりの的確な間合いを保ち続けている。

その動きは他の者と比べて格段に素早く、湖面を渡る水馬のように、優雅（？）で無駄のない動きだ。

「めーん！」

風を切るような吉本の飛び込み面だった。彼らの姿を目の当たりにすると、他の部員たちの動きは、滑稽な遊戯のように私の目に映った。

二人の周囲だけに、雷雲のような激しさと湖面のような静けさが同居している。

外はすっかり日が暮れてしまい、煌々と明かりが灯った武道場の中で、吉本と顧問の教師の周囲だけに、別世界のような清らかさがあった。

「よし！ 乱取り、始め！」

野太い顧問の教師の声が道場に響いた。それに応え、一斉に道場のあちこちで、部員たちは気合いの籠もったかけ声をあげた。

「はい！」

顧問教師の誘うような気合いの声に、吉本は腹から声をあげて答えた。

二人は揺らめく炎のように間合いを計り、時折触れあう剣先は、火花を散らしているように弾ける。

何の前触れも無く、雷が轟くような踏み込みの音と共に、教師は面を打った。その火の出るような激しい打ち込みに、私は目を奪われた。

しかし吉本は、いなごが飛ぶような素早さで後退し、顧問の竹刀を払い除けて負けじと小手を打つ。お互いまだ浅い。

二人は再び、互いの間合いと呼吸を計り始めた。面がねを通して見える吉本の目は、まさに菩薩の目だ。それは哀しみと慈愛が宿った静かな瞳。

顧問の教師は、ゆっくりと竹刀を上段に構える。不動明王が背負う炎のように、威風堂々とした構え。

手がじつとりと汗ばんでゆくのが分かった。一分の隙も無い。

父から空手の手ほどきを受けた私は、それを直感的に理解した。顧問の教師はかなりの使い手であるらしい。目の敵に対して、命を狙うように研ぎ澄まされていた。

並の相手なら、たじろいで一步も動けない気迫だ。

吉本は静かだった。

微塵も動じている色がない。

その構えには、少女のように中性的な面影を残した阿修羅のように、哀しみを湛えた静けさがあつた。

私の胸は高鳴った。

胸を締め付けられるような不自然な鼓動。

教師が先に動いた。私は無意識に後ずさってしまった。顧問は跳ぶように右手一本で飛び込み面を打った。竹刀が真剣の如く冷やかに振り下ろされる。これは避けられないと思った。

鞠のように後ろに弾き飛ばされたのは教師だった。

吉本は水が流れるように、しかも教師よりも静かに素早く、彼の喉元へ竹刀を突き入れていた。

これ以上ないタイミングで鮮やかな突きが決まる。その一連の動きは無意識に繰り出された、無駄のない美しさがあり、致命的で凶暴な一撃だった。

教師は仰け反って後ろに倒れ込み、後頭部を強打した。竹刀は宙で弧を描いてから板張りの床へ無惨に転がっていった。

吉本は完全に息の根を止める機会を窺うように、暫くじつとその姿を見つめていた。瞳には死にゆく者を見つめるような、冷酷な感情が暗く沈殿している。残酷で美しい勝者の立ち姿。

吉本は我に返ると、足下に転がる教師の元へと走り寄り、彼の上体を起こした。

「すいません！ 偶然竹刀が出てしまって」

吉本は声を裏返して、必死で詫び続けている。教師は吉本の手を振り払い、喉を押さえて跪きながらじっと痛みに耐えていた。後頭部を押さえながら、「大丈夫」という風にゆっくりと立ち上がったが、膝から崩れるようにして、またその場にうずくまった。

部員たちは練習を中断し、教師の元へと駆け寄った。私はそのまま武道場を立ち去った。

息苦しいほど動悸が早くなっていた。

私には分かった。あれは偶然ではない、針穴に糸を通すような、狙い澄ました一撃だ。

冷酷に教師を見つめる吉本の瞳を思い返した。哀しみと狂気が攪拌され、一つに混ざり合った茶褐色の瞳。その奥には深い虚無が、どこまでも広がっていた。

私は胸を押さえて立ち止まり、愕然とした。

認めたくなかった。吉本に誇りだけでなく、心までも奪われたということを。

それは恋と呼ぶにはあまりにも寧猛で、甘美なものだった。初恋というには、あまりにも残酷で官能的過ぎる。

身体に隠されていた歯車が、恐る恐る音をたてて動き始めた。私は混乱した。自分でもどうしたら良いのか分からないほど。

しかし今まで隠されていた醒めた女の部分は、どうやって吉本を手に入れるか、既に考え始めていた。

『ワタシハ ココロ』

僕は死者と共に呼吸し、死者と共に授業を受け、死者と共に竹刀を振るい、そして家に帰り眠っていた。そして夢の中で姉と語り合い、彼女を抱いた。

『ワタシハ ココロ』

呼びかけると、姉が耳元で、そう甘く囁いているような気がした。だから立つていられることが出来た。クラスメイトの前で、笑顔を作ることが出来た。

今はそれでいい、それだけでいい。そう思っていた。

しかし行き場のない怒りや苛立ちが、ふとしたきっかけで凶暴に頭を擡げることがあった。踏切で電車の通過をじっと待っている時、暴走族風の車が、騒音をまき散らして側を通り過ぎたり、そんな何ていうことのない、下らない瞬間に突然起こった。

『自分はここで何をしているんだろう？ 何のために生きているんだろう？』

そういう虚無感に囚われそうになると、僕は目にするもの全てに、姉の面影を見つかけようとした。

夕暮れ時に紫にたなびく絹雲、帰宅する途中に見上げる春の星座、雨降りにひっそりと濡れながら、健気に咲いている路傍のタンポポ。

そうすると慰められ、大きく深呼吸をして、また前を向いて歩き始めることが出来た。

今、僕は保健室にいる。長い髪を黒いゴム紐で後ろに束ね、切れ長の涼しい目をした保健の先生が、剣道部の顧問である吉住先生の喉を治療している。

綺麗な女性だ。心は微塵もそよがないけれど、多くの男子生徒が何かと理由を付けてここにやってくるのも少し分かる気がする。確か名前は森先生。

苦笑しながら治療を受けている吉住先生は29才で、獅子のような覇気を持った颯爽とした先生だ。この高校の卒業生であり、剣道の大学選手権で優勝した経歴を持っている。

「ありや、とんでもなく恐ろしい突きやったな」

吉住先生は椅子に腰掛け、屈託のない笑顔を浮かべて僕の肩を叩いた。先生の喉には赤黒い痣が、女郎蜘蛛のように痛々しく足を広げている。

「すみません、偶然竹刀が前に出てしまっ……」
言い訳するようにそう言うと、吉住先生は冷ややかな目で見つめた。

「おい、あれは偶然やないやろ」

先生は、冷たく突き放すように言った。

「若くして亡くなりはったけど、師匠の突きを喰らうたみたいやったな。まあ、そんなことはどうでもええ。しかし俺とやる以外は、絶対にあの突きを打つなよ、下手したら死んじまうからな。俺も高校生ごときに、あんな突きが打てるとは思ってへんかったから油断した。まあ、熱くなつて片手で飛び込み面を喰らわそうとする俺も

俺や。まだまだ未熟やな」

「すみません」

「謝るな。真剣勝負に『ごめん』なんていう言葉はない。これからそこんとこビシビシ鍛えたる。お前はきつと、とんでもない奴になる」

「別に強くならなくても」

俯いてそう言った。心にアイロンをかけて伸ばすような、あの武道場の雰囲気が好きただけなのだ。火照る身体とは裏腹に、どこまでも静まってゆく心を愛した。

「おまえって、いつも情けないこと言うよな　でもそれも嘘や」
「嘘やないです」

本気だった。強くなると本当になりたくなかった。

「おまえの心には修羅がおる。修羅がおるから剣を取るんや。じゃなきゃ汗くさい防具付けて、竹刀振り回す奴なんかおらんわ」

黙っていた。突きを打った瞬間、恍惚としていたことを思い返していたからだ。あの刹那の異常な歓びを、ずっと知っていたような気がする。

先生の言う通りかもしれない。心の奥底には、秘められた暴力衝動が眠っているのだろう。

「吉本、もう遅いから先に帰れよ。俺は森先生と帰るから」

3秒程度、吉住先生の言葉の意味が理解できなくて、森先生をぼんやりと見つめていた。

森先生は僕の無遠慮な視線に気付いたのか、吉住先生の喉に包帯を巻きながら、顔を赤らめた。

「おまえ、まだ誰にも言うなよ。俺たち近々結婚する予定やから」

先生は白い歯を覗かせ、悪戯っぽく笑っている。

「はい」

自分が邪魔者だったことに今更気付いて、保健室を後にした。

そんな調子だから、肝心な時に隙が出来るんだ、と思いながら。

武道場に戻ると、先輩や他の部員はみんな先に帰っていた。僕は学生服に着替え、真っ暗になった校舎の端にある、自転車置き場に向かった。腕時計を見るともう19時を過ぎていた。

夜空には下弦の月が、独りきりで銀色に輝いている。

急に心細い気持ちになって、マウンテンバイクのキーを外し、サドルを跨いだ。しかし次の瞬間、僕は立ち止まって耳を澄ませた。

ピアノの音。聞き覚えのある、哀しみを湛えたメロディ。ベートーヴェンのピアノソナタ「月光」だ。

自転車をそのままにして、ピアノの音がする方角へと駆けだした。
校

庭から真っ暗になった校舎を見上げると、音楽室にひっそりと明かりが点いている。下駄箱が並んでいる玄関に靴を脱ぎ捨て、そのまま上履きも履かずに音楽室へと走った。

姉だ。この弾き方は姉に違いない！

躓きそうになりながら、三階まで一気に階段を駆け登り、音楽室の扉の前まで走った。部屋の明かりが消されている。ピアノだけが切なげに歌い続けている。ゆっくりと扉を開いた。

音楽室には仄かな月明かりが射し込んでいる。

入り口からでは、演奏者の顔が見えない。興奮して手が微かに震えている。

「姉ちゃん、姉ちゃんなん？」

震える声でやつと言そう言った。ピアノは歌うことを止めた。

「朋子やろ？」

僕はすぐるように再び声をかけた。

「ふーん。やっぱそうなんや」

立ち上がったのは、クラスメイトの清家だった。ひどく失望し、次に腹が立った。理不尽な怒りとは頭では充分に認識しながら、怒鳴りたい気持ちだった。

「なんだ清家さんか、こんな遅くまで何してるの？」

感情を懸命に抑制し、そうクラスメイトに声をかけた。吐き出された声は、自分でも驚くほど乾いた声だった。

「吉本って、あの吉本朋子の弟なんや」

清家は、歩数を数えるように僕の近くまでゆっくりと歩いて来て、足を組んで机に腰掛けた。クラスで逢う印象とは全く違う、艶めかしい仕草だ。

清家は、ねつとりと絡みつくような上目遣いで僕を見つめた。射し込んだ蒼い月光に照らされた姿は、気圧されるほど妖艶な姿だ。

「だったら、なんやねん……」

もう感情を抑えることが出来なくなっていた。こいつは一体何のつもりで、姉の名前を軽々しく口にするのか？

「全然似てへんやん」

清家はそう言うのと瞳を閉じ、嫣然とした微笑を浮かべた。整った薄い唇が、口づけを誘うように少し濡れている。

「俺は養子なんや。確か清家さんは、姉の葬式に来てくれたもんな。感謝してる」

全く感謝していない口調で、懽然として言った。

「あんだ、一年間何してたん」

「親父の会社でゴミ屋やつとったんや」

完全に頭にきていた。こいつは一体何を探ろうとしているんや？

「そっか。愛する人が死んで、高校に行く気力も無くなったっていうわけか。かわいそうに、私が慰めてあげようつか」

清家は立ち上がって、僕の頬にそっと指で触れた。氷のように冷たく、しつとりとした手。その仕草は、母がかつて僕にしたものとそっくりだ。清家は潤んだ瞳で、僕を見つめている。

初めて気付いた。

清家の容姿は母に似ていない。母とは違った種類の、まるで他者を拒絶するために身に纏う、鎧のような美しさだ。

しかし瞳が持つ雰囲気は、母そのものだった。

母が憑かれたように書いている時の瞳だ。息子を失った母の声が聴けなければ（母は小説の登場人物の声を聴いて書くの、と言っていた）、僕だって殺しかねない夜叉の目の輝き。

僕は、自分の身体に起こった異変に気付いた。雄の本能は、激しく目の前に立っている女を求めている。目の前の女も感応するように、本能で僕を激しく求めている。

清家は目を閉じて、口づけを待った。これ以上ないという自然な

仕草で。

閉じられた瞳の側にある小さな泣き黒子が、僕の劣情をそそった。

僕は意志の力を振り絞って笑った。

笑うしかなかった。自分のふしだらな劣情に対して、突然目の前に現れた、魔物のような誘惑に対して。自らのどうしようもない愚かしさに対して。

「あほちゃうん、ちょっとからかっただけ」

清家は顔を赤らめて、ピアノに向き直った。そこにはもうあの妖艶な鬼女の姿はなく、クラスメイトの少女が立っているだけだ。

僕は音楽室の灯りを点けた。

張りつめていた官能的な緊張は、霧が晴れるようになってなくなった。正直、ほっと胸をなで下ろした。

「清家って、まだあの御影のピアノ教室に通ってるんか」

僕は落着こうとして、清家の近況を尋ねた。

「うん、まあね」

清家はからつと言った。さっきまでとは、とても同一人物とは思えないあつさりした受け答えに、僕は拍子抜けした。

「大変やな」

「別に。あれは、自分の心を洗濯するためやから」
「ふーん」

本当にからかわれていたただけなのかもしれない。そう思うと、なんだか可笑しさがこみ上げてきた。

「あんた、何ニヤニヤしてるん？ すんごい気持ち悪いんですけど」
「いや別に何でもない。そうや、俺にピアノを教えてくれへん？
姉ちゃん清家のこと、凄い才能ある子って言ううとったし。清家の音がとってもチャーミングやって褒めてたわ。俺、今更やけど姉が死んで後悔してんねん。なんでピアノ習わんへんかったんやろうって。ピアノ弾いてる時、姉ちゃん幸せそうやったから」

軽い気持ちで言った。別に期待なんてしていなかったし、なんで自分がそんなことを言い出したのか、自分でもよく分からなかった。

「吉本が私の下僕になるんやったら、手取り足取り教えてあげる」
清家はふてぶてしくそう言った。下僕？ 僕の聞き間違いか？

「下僕？ もしかして今、下僕って言うた？」

「下僕は下僕、私に傳く男のこと」
至極当然のことのように、清家は軽い調子で言う。「冗談を言っているような顔には見えなかった。」

「おまえ、アホか」

「あんた今、アホって言うたね。私にアホって言える人間が、この地上におるとおもってんの！ ちよつと新入生代表になったからって、あんた調子乗ってんちゃうん！ じゃあ、中間テストで勝負や」
清家は顔を真っ赤にして、憤然と捲し立てた。本気で怒っているようだ。

「あほくさ」

僕は呆れ果てていた。そんなことは既に忘れていたし、あの程度の問題なら、もう少し出来る奴が必ずいるだろうと思った誤算だったのだ。

「あんたが私に勝ったら、次のテストまでピアノを週一回教えてあげる。私が勝ったら、月に二回、市中引き回しの刑」

清家は自信に満ち溢れた、高慢な笑顔を作って言った。

これもまたふざけているようには見えなかった。てか市中引き回して、こいつ普段テレビ何見とんねん？

「なんや、その市中引き回して？」

僕は、一応尋ねてみることにした。シニールなボケへの期待で、胸が高鳴る。

「私が買い物に行く時に、影を踏まないように後をついてきて荷物を持ち、喉が乾いたらダッシュでジュースを買ってきて、肩がこつたら肩を揉み、お腹が減ったら、ご飯をおごる。まあ一日下僕ね」
「よし、分かった」

突拍子もない申し出だが、なんだかおもしろそうではある。

というよりも、この天然系不思議少女（？）に、ひどく好奇心を掻き立てられた。

動物行動学的な興味というのが、適当なのかもしれない。

本当なら叔母さん、いや母さんにピアノを教えて貰った方がええんやけど。

「よし、交渉成立」

清家が右手を差し出したので、僕たちは固い握手をした。華奢な身体の割には、長い指をした大きな手だ。

「清家、宣戦布告を記念して、なんか一曲弾いてや」

こんな短時間で人に親密な感情を抱いたのは、姉以外初めてかもしれない。

「いくらで？」

僕はひっくり返りそうになった。

「じゃあ……夕飯おごる」

「言っとくけど、そこら辺のファーストフードはダメだよ」

「おまつ……ええとこのお嬢様のくせに、しょうもないこと言うなよ。『あつ、私、一度行ってみたかったん。うれしい！』みたいな展開はないんか？」

「ない。これは私の生き方の問題なん」

清家はきつぱりと言う。とりつく島もない。

「じゃ、モスは？」

僕は渋々妥協案を出した。

「あんたジャンクフードばかりやね。まあいいわ。一度くらい行ってみるのもいいのかもしれない」

『いや、俺のサイフには大打撃なんだが！』

「よし、交渉成立」

やれやれという感じで言った。どうやら彼女とは、何事も交渉によらねば理解し合えないようだ。

交渉というよりも、短い漫才というのが正確かもしれない。

「リクエストは？」

風が流れるように鍵盤に指を走らせてから、清家が尋ねた。

「よくピアノ曲知らんから、何でもええよ」と僕。

「フム」

清家は眉間に皺を寄せ、鼻の頭を掻きながら、ピアノの周りをアヒルのようにゆっくりと一周し始めた。妙に滑稽で、愛嬌のある姿

だった。吹出しそうになるのを必死で堪えていた。関西で育った者の悲しい習性だろうか、僕は新しいお笑いジャンルに目が無い。

清家は瞑目して椅子に腰掛けると、一転して轟然とピアノに指を走らせ始めた。

祈りを捧げているような穏やかな表情だ。

椅子に座り、不真面目な気持ちで聴いていた僕は、その音の迸りを聞いて、瞬時に厳粛な気持ちにさせられた。

部屋の中に、音の冷たい風がさつと吹き抜けたような感じだった。

眼前に、暗く冷たい海と吹きすさぶ風が見えた。

ピアノの音色は、哀しみの中を生き抜いてゆく、人間の意志を感じさせる力強さがあった。

孤独に耐え、生き抜いてゆかねばならない、人間の業への深い慈悲があった。それは決してじめじめと哀しみに拘泥し、陶醉してはいない。ありのままの哀しみを、毅然として受け入れていた。

僕の脳裏に、激しい波がうち寄せる断崖の上に立つ、神々しい乙女の姿が過ぎった。

それは数億の星が生まれては死んでいったほどの遠い昔、愚かな男が生涯をかけて愛した、ただ一人の女性の姿だ。

彼の命を救い、彼に世界に溢れる美を教えてくれた女性。男は忌むべき罪の報いとして、どんなに求めても、彼女と決して結ばれぬ呪いをかけられた。

ピアノは執拗に、冷たく吹きすさぶ哀しみを、うちよせる波のように歌い続ける。ピアノの音色は、僕にあの風の岬の海を想起させた。

暗く冷たい鉛色の海、激しく打ち寄せて崩れる白い波頭、強風に吹き飛ばされるように飛ぶかもめの群、漁村と海を護る若い森、厳しい自然に立ち向かう漁師たちの姿、そしてタケさんと奥さんの力強く手を振る姿。

僕は涙が出そうになるのをこらえた。そして姉が教えてくれた言葉を想い出した。

『それは、死ぐらいではなくならへんものなんよ』

清家は演奏を終えた。それは缺で切り取られたような、不自然な終わり方だった。

「 どないしてん、突然止めんなよ」

目頭が熱くなっているのを気付かれないように、不満げな声を作って言った。僕は彼女の演奏に感動していた。

「この曲はここで終わり」

「ふーん、そつか。なんか哀しい曲やな。聴いてたら、強い風と冷たい海が見えた。なんて言う曲なん？」

「マイケル・ナイマンのピアノレッスンのテーマ。楽しみを希う心、やったかな。映画で使われてた曲」

「ピアノレッスン？　なんか俺たちにぴったりやん。それってどんな映画？」

「失語症の不倫した女が指を切断される話」

「それってヤクザ系の映画？」

僕は、健太さんの小指のない左手を思い出して言った。

「違う！」

僕たちは暫く大笑いした。久しぶりに心から笑えた気がした。

僕たちはそれから一緒にハンバーガーを食べ、ピアノレッスンの

映画の話をした。

清家は映画を見るのが趣味らしかった。

彼女は僕が思っていたよりも遥かに饒舌で話が巧く、聞いていると自分が映画の登場人物になったような気がして、話に引き込まれた。

話をしている間、彼女はおもしろいほどくると表情を変えた。怖い場面では眉を顰めて囁き、哀しい場面では目を潤ませて喋った。

清家は笑うと無邪気な子供のように、いつもの棘のある冷たい雰囲気は嘘のように、ひどく無防備な感じがした。

僕はそんな清家に好意を持った。

その日から僕たちは親友になった。

ミユウ 4

午前4時45分。首相になる女の朝は早い。

かのマーガレット・サッチャーの回顧録を紐解くと、女史は若い頃から、睡眠時間を4時間で済ませるように訓練していたらしい。

私は感動した。衆に秀でる人間とは、かくあらねばなるまい。一般ピープルのように、何時までもだらだと涎を垂らして（自分）、お尻を掻きながら寝ていてはいけないのだ。

まあ初心者の方は、5時間から始めることにした。（いきなり弱気）

まずは柔軟体操。心の柔らかさは、身体の柔らかさからである。

（おそらく無関係）

部屋の窓を全て開け放って、朝の新鮮な空気を胸一杯に吸いこみながら行う。まだ明けぬ藍色の空が、朝焼けで朱と紫に染まっている。雀の囀りが姦しい。

次はジョギング。将来の激務に耐えられるように、基礎体力を鍛えておかねばならない。川沿いのコンクリートで舗装されたジョギングコースへと向かい、往復5kmの道のりを、川のせせらぎに耳を澄ませながら走る。途中で出会う老人たちには、にこやかに挨拶する。これからは超高齢化社会だ。彼らの投じる一票は貴重だ。

帰宅すると腕立て、腹筋、スクワットを三十回ずつ3セット行う。それが終わるとシャワーを浴び、朝食を取りながら、新聞三紙に

ざっと目を通す。

一つは比較的に中道的な社説を展開する一般紙、もう一つは経済専門紙、そしてニューヨークの英字新聞。

雨降りの日は、濡れるのが嫌なので寝る（小雨でも）。

新聞の休刊日が重なると、ぎりぎりまで寝る（涎を垂らして）。

正直に告白すれば、梅雨と新聞休刊日が大好きだ。

そうこうしているうちに、7時を過ぎている。すると一応テレビを点けて、20分程度ニュースを見る。

そして登校までの残り時間は、昨晚解けなかった大学受験の問題などに、もう一度手を着けてみる。

時間がくれば登校する。（歩いて8分）

母親はというと、昼前まで死んだように熟睡している。

母は北野坂で、ジャズの生演奏を聴かせるバーを経営している。

気が向くと今でもステージに立って歌っているらしい。彼女も昔は、夢見る若きジャズシンガーだったのだ。

父は数年前、ホテルのロビーを歩いている時、いきなり拳銃で撃たれて死んだ。

名字は違うが、生物学的には父だった人だ。彼はさる広域暴力団の実力者だったが、権力闘争に敗れて死んだ。

私に帝王学らしきものを身に付けさせようとしたのは父だった。

彼は国立大学の経済学部を卒業し、暴力団に就職したという根っからのナルシスト系極道だった。

彼は胆力に優れ、頭の回転も速かった。

普段はスマートに金を稼いでいたが、敵対する者には、他人では

ちょっと考えつかないような容赦無い仕打ちを下すことで有名だった。（いわゆる恐怖による支配）

若い頃に受けた傷で隻眼であり、「独眼竜」という悪い冗談みたいな異名で恐れられていた。

しかし彼は私の前では、少々気障で、娘の気をなんとか引こうとするただの中年のオヤジだった。

私は幼い頃から、外国人（たいていは父の情婦の一人である、若いブロンドの留学生）の家庭教師に英語を習い、若いジャズピアニスト（これも父の情婦）からピアノの手ほどきを受け、また茶道と（以下全て情婦）華道を妙齡の婦人に習った。

父から直接習ったことは、笑顔と空手だ。

笑顔には数十種類あり、私はこれで一年間講義が出来るが、それはここでは止めておく。

まあ軽く笑顔について触れておくと、笑顔とは対人交渉に於いて自分の感情を超越し、相手に自分の与えたい感情を引き起こさせるための、道具の一つであると言えるよう。

軽く相手を威圧するためのもの、場を和やかにするもの、人を喰うためのもの、共感と理解を示すためのもの、愛想だと相手に気付かせるための愛想笑い、愛想だと相手に気付かせない愛想笑い、侮蔑を含んだ微笑等々。

まあ父はそうやって、私に、自分が生き抜いてきた知恵を授けたかったのだろう。

「シュショー・シュショー」と単語の意味の分からないうちから、寝る前に子守歌のように耳元で聞かされていたら、いつの間にやらの頭の中で、単語が『首相』に代わり『Prime minister』『Premier ministre』に変わっていた。

よく有力政治家の講演に連れていかれ、新聞を見ては、父と経済政策について討論した。

最初の頃は嫌々だったが、年を重ねるほどに私は夢中になり、父が死ぬ前には、ことごとく彼の経済理論を論破して私は得意になった。

しかし今になって考えてみれば、私にとってはそれら全てが、父と遊んだ長いままごと遊びだったのだらうと思う。

私に注いだ愛情の十分の一でも部下に与えていれば、父はもう少し長生き出来ただろうに。

父は私の野望実現のために、綺麗に洗濯された、出所不明の預金（内閣官房機密費をじゃんじゃん使える日までの軍資金）を残した。彼の遺志を継いでやることが、現在の中長期的な私の目標だ。

さて短期的な目標であるが、これがなかなか満足出来る成果を挙げられないでいる。

そもそも私が私立中学からこの歴史ある県立高校に進学を決めたのも、後に自分の後援会を発足させる時、人脈を得るための橋頭堡にしようと考えたからだった。

大学を卒業し、地元に戻ってきた卒業生は、その地方で医者や弁護士、会社経営者などの名士になることが多い。

だからこの高校を首席で入学、卒業することが出来れば、彼らに強烈なインパクトを与えることが出来るはずだった。しかしその野望は初めから潰えた。（違った意味で、強烈なインパクトを与えてしまった……）

現在私は、学業の面において生徒会長を二期務め、成績は首位をキープし続けている。

これはまあ上出来と言えよう。しかし大いなる野望実現の手始め

に、吉本という我が好敵手を参謀に迎えるという企みは、もうすぐ卒業を迎えるこの時期になっても、いまだ実現していない。

奴に近寄る女共に睨みをきかせ、（サークル、部活動費の予算配分による締め付け、各部活の女子有力者に対する根回し、時にはダイレクトに鋭い眼光を浴びせる等）誰にも告白させないという雰囲気形成には成功したが、如何せん当の本人である吉本が一向に靡かない。

色仕掛けは毎回一笑に付され、愛に飢えた非行少女を詐称し、奴に孤独を見せつけて同情から愛情への化学反応を狙ってみたが、目の前でタバコを吸って激しく噎せてしまい、簡単に見抜かれた。目の前で男に告白させ、「逃した魚は大きかった戦法」を試みると、

「がんばれよ」と爽やかに祝福されて失敗した。

私宛てのラブレターを目の前で読み上げると、
「おまえデリカシーなさ過ぎやぞ」と軽蔑され窘められた。

リンの発案だが、藁にもすがる思いで、実は未来からやってきたヴァンパイアの王女で、敵の目を欺くために、とりあえず偽のフィアンセが必要だと言ったら、石ころを見るような目でガン無視された。（リンは一週間おやつ抜き）

とにかく考えつくもの全て試したけれど、ことごとく失敗した。

私は半ば意地になり、真剣に奴のことが欲しくなっていた。
奴の笑顔を見るだけで嬉しくなり、奴が塞ぎ込んでいると、涙が出るほど悔しく、哀しかった。

そういう時は必ず、奴は「あの女」のことを考えているのだ。
吉本朋子は、時が経つほど奴の観念世界で美化されてゆく。
死んだ女に勝つことは、私の美貌をもってしても至難の業だった。

「リン、あんたさつきから何を一生懸命に読んでんの？」
なにやら理恵子が忘れていった少女漫画を一心不乱に読んでいる。
去年からリンは、人間の少女の姿になっていた。それも私が中1
くらいの頃と瓜二つにの姿に。

「てめえ、なに萌えを意識したキャラチェンしてんだよ！」と蹴り
倒そうとしたら、私のせいだと強弁する。
「ミュウの精神的な変化に感応したせいで、姿が変わってしまった。
これは麒麟としては恥ずべきことだから、もうお嫁(?)にいけない。
責任を取れ！」的なことを泣き喚いて、かなり大変だったのだ。
依然、私以外に姿が見えないので、問題は棚上げしているままな
のだが……。

「それでか　なるほど。
かなり興味深いケースを発見したのですよ！
剣道をしている優等生の男子と、負けず嫌いの女子。この設定に惹
かれたのです！
ミュウ！　すごい発見だよ。
一見すると最悪の出会い、ラブコメの王道なんだよ！
俗にフラグが立つっていうらしいんだ！」

「ふーん、そうなんだ。それで？」
「いや、そんだけですけど……」
「キリンっていいよね、いつも楽しそうで……」

私は普段通り学校にゆき、授業を受ける。そして離れた席からあいつの横顔を見つめる。

休み時間には、理恵子や絵美と話をしながら、同級生と話すあいつを時々盗み見る。

奴は同級生の前では、いつも明るく振る舞っている。

理恵子は陸上の名門大学に推薦入学が決まり、絵美も私立「女子大」の文学部に推薦入学が決まっていた。絵美の好きな、新進気鋭の哲学者が教壇に立っているらしい（担当教官と不倫確定）。

私たち三人の性格的バランスは絶妙で、喧嘩一つしないで、親友として三年弱過ごせた。

理恵子は走っている時以外は、おっとり、のんびりしてマイペースであり、側にいるだけで柔らかな気持ちになれた。才気走る絵美と私が口論になりそうになっても、
「ポッキー食べる？ ポテチ食べる？」という理恵子の言葉で、私と絵美は衝突を回避することが出来た。

そして絵美からは、自分と異なる感性に触れることで、有意義な知的刺激を得ることが出来た。絵美は全ての物事を、いつもまるで私の反対から眺めているようだ。

それは私に少なからず、良い影響をもたらしたと思う。（恋愛観以外はね）

理恵子が赤点を取ると、私と絵美は交替で、私の家で深夜まで勉強を教えた。

そんな時、三人で一緒にインスタントラーメンを食べるのは楽しかった。（父の教えにより、そういう物を食べたことがなかった）彼女たちとは、この先も一生付き合っていけると思っし、そう努力していこうと思う。

昼休みに教室で、親友の理恵子、絵美と一緒に弁当を食べている時のことだ。

理恵子が私の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「ミユ」

「うん？」

「私ね、進学も決まったし、裕晶君に告白しようと思うんだ。ずっとずっと好きだったから」

私の一番苦手な、素直で偽りのない、真っ直ぐな笑顔だった。

それはある種の天才だけにしか出来ない笑顔だと私は知っている。真っ直ぐに生きている者だけが出来る、無垢な笑顔。頬にちよこんと出来た、えくぼがいじらしかった。

「やつぱ、告白しないままだと、この先ずっと後悔すると思うし。いいかな？」

正々堂々とした立派な笑顔だった。横で絵美の顔色がみるみる蒼白になって、唐揚げを摘んでいた箸を床に落とした。

「もちろん」

私の心の奥底が、きしきしと音を立てて疼いた。私は理恵子（もちろん絵美も）、吉本と同じくらい愛していたから。

「ミユ、ごめんね」

理恵子は私の答えに安心したのか、ぐすぐす鼻水を垂らして泣き出した。

いつも飄々としていたけれど、ずっと悩んでいたんだって、その時初めて気付いたのだ。

自分はなんて無神経で、残酷なんだろうと恥ずかしくなった。

ごめんね、リエぼん。今まで気付いてあげられなくて。ほん

とにほんとに、ごめんね。

私は吉本には、理恵子のような素直で優しい娘が相応しいと思った。

なんだか私まで貰い泣きしてしまった。

理恵子はその日の夕方、吉本にしっかりと自分の想いを伝え、正々堂々と玉砕した。

「やっぱなー」と照れ笑いをしながら、理恵子は私の家にやってきた。

私たちはそれから暫く一緒に泣いて（吉本をボロカスに言いながら）、絵美を呼び出して一緒にカラオケ屋さんで歌いまくった。私も吉本に真っ直ぐに想いを伝え、玉砕する決心が付いた。

ミユウ 5

次の日の深夜、私は吉本の携帯へ電話した。三回コールしたところで吉本は出た。

「勉強しとったん？」

「うん、微積分の問題やとった。ちょうどわからんとこあってん、聞いてええ？」

「数学はあと。あんた今日は流星群が降る日って知ってる？」

「うん、知つとぅ。ヤスシと一緒に見に行かへんかって誘ってくれたから。断ったけど。（結構クールな性格）」

「今から六甲山まで見に行かへん？ 2時半と3時半が流星のピークなんやて。こんな綺麗な子が一緒に見てあげるって言うてるんやから、素直に行つとき。次見るときは、寂しいやもめ中年やで。ええ想い出を作つとき」

「マジで？」

「マジで。あんた前のテストで、『また』私に負けたやろ」

「（恐らく携帯電話の向こう側で、悔しさに震えている）まあ気晴らしにええか。あつ、そしたら、俺近くでええとこ知ってる」

私は吉本の家の近くまで、250ccの単車で向かった。

私を見付けると、吉本は寒さに首をすくめて、「うっす」と間の抜けた顔で手を挙げた。

顔を見ただけで、心臓が壊れそうなくらいバクバクと音を立てた。

私は吉本をバイクの後ろに乗せ、吉本の父親が経営している会社へと向かった。

そこは鶴甲の外れにある小高い山の上だ。周りは街灯も少なく、星の光が柔らかく降り注いでいる。

私たちは、会社の一階にぽつんと設置された自販機で暖かいミルクティーを二つ買い、吉本を先頭に、会社の裏山にある茂みの中へ入っていった。

薄暗い森の中を、私は吉本のジャンパーの左肘を掴んで歩いた。本当は手を繋ぎたかった。（こいつは結構そいうところ、鈍感で冷たい）

地面に敷き詰められたように落ちた枯れ葉が、歩くたびに乾いた音を立てた。

「ここ、俺の秘密の場所やねん」

辿り着いた場所は、とても開けた空間だった。

足下に神戸の夜景が一望できる。私たちは切り株に並んで腰を下ろし、星空を見つめた。

新月の夜だから、月は出ていない。夜空には東の方に積雲がわだかまっているだけで、星がたくさん見えた。

「あつ！」

吉本がオリオン座の方を指差した。

流星は青い閃光を放って夜空を引つ掻き、長いエメラルドグリーン
の光の帯を付き従え、余韻をもつて静かに燃え尽きた。

「今の凄かったな！」

吉本は興奮気味に、急に子供っぽい笑顔を浮かべて言った。

「なつ、来て良かったやろ」

私のその言葉を合図にしたように、流星は群をなして流れ、燃え
尽きた。

強い虹色の光を放ち、煌めくように流れるもの、青く密やかに発
光して燃え尽きるもの、様々な種類の流星が、雨のように幾つも幾
つも流れた。

私たちは歓声をあげるのも忘れて、降り注ぐ流れ星を見つめてい
た。

すぐ側には、吉本の微かな温もりがある。告白した結果がどうあ
れ、一生この時間のことを、忘れないだろうなと思った。

「ミユ」

「ん？」

「おまえ、生まれ変わりって信じる？」

吉本は夜空を見上げながら、少し寂しそうに笑って言った。息が
つまりそうなくらい、綺麗な横顔だった。

「私、そんな非科学的なこと信じへん。（あんたの横にリンはいる
けどね！）あんたは信じてんの？」

「さあ、どうやる。ずっと同じ夢を何度も見てると、そんな風に感
じることはある」

「ふーん」

吉本は何を話そうとしているんだろう？　ん、さてはこの鈍感野郎、私と運命の赤い糸で結ばれていることに、やっと気付いたのか。

「他の奴が言うたらちよつとひくけど、あんたの言うことやったら、なんとなく信じられるかも。でも」

「でも？」

吉本は私の顔を覗きこむように見つめた。ちよ、顔近過ぎ！

「私は、生まれ変わりがあってもなくても、正直、どうでもいいって感じかな。もしあったとしても、前の人生を忘れてるってことは、そういう必要があるからなんやない？　人はいつも論理的に生きていけるわけやないから、一つの人生でいっぱい過ちを犯しているんやと思う。神様みたいなものがあるとすれば、過去に囚われずに、頑張りなさいってことなんちゃうん。今の人生を楽しみなさいってことちゃうかな」

『だから死んだ女のこととは忘れたら』

そう私は心の中で呟いた。しかしそれを口に出して言うことは、私達の関係の終わりを意味する。

「　　やっぱミユって凄いな。うん、俺もそう思う。大切なのは今やもんな」

吉本は目が覚めたという風に、晴れ晴れとした笑顔で言った。そして私の顔を、親愛の情を込めて見つめた。

「俺な、医者になろうと思うねん」

吉本は少し照れくさそうに言った。

「そうなんや。あんたやったらええお医者さんになれると思う」

私は心からそう思った。吉本ならきつと涼しい顔で金儲けをしつつ、いい評判を得るだろう。（えっ、違う？　ええ医者って、そう

意味じゃないの?)

「ミュは?」

「一応国立の法学部も受けとくけど、やっぱアメリカに留学するかな」

「ピアノは?」

「ピアノはまた違う先生に習うかな」

私は、突きつけられた私たちの未来を思って、少し寂しくなった。吉本には吉本の向かう道があり、私には私の道がある。それは平行した道で、この先交わることはないのだろう。

「そうか、私たち離れ離れになるんやね。なんか嘘みたい。でも良かった。この高校に来てあんたに逢えて。流れ星が綺麗やから、なんか涙出てきた。吉本、キスしようか?」

私は勇気を振り絞ってそう言った。柄にもなく自分の手が震えている。暫く息が出来なかった。

「なんで?」

吉本は驚いているようだった。私は吉本を見つめ、覚悟を決めて直球を投げた。

「あんたを、初めてキスする男に決めてたから」

吉本の唇に自分の唇を重ねた。抵抗は無い。柔らかく暖かい唇。重ねられた私たちの唇は、一對のものだったようにぴったりと触れあっていた。

吉本の吐息が私の口の中に入ってきて、私の息と混ざり合い、甘く一つに溶けた。

自分の背筋に、微弱な電流が走ったような性的な歓びを感じ、その場に膝から崩れ落ちそうになった。私はしがみつくように吉本の肩を強く抱いた。初めて好きになった男の感触を、私はしっかりと胸に刻み込んだ。

「なんや、こんなもんなんや」

私は心臓がバクバク悲鳴をあげているのに、強がってそう言った。本当はもう一度キスしたかった。何度でもキスしたかった。吉本を見つめて、口づけを待った。

しかし吉本は戸惑い、哀しそうな顔をした。そして決心したように、おもむろに口を開いた。

「ミュごめん 俺」

その言葉を聞いて、心と身体が一瞬にして冷まされた。思わず、しゃがみ込んでしまった。

「ストップ。もう何も言わんというて」

「本当にごめん」

「あんたが謝ったら、なんか私がふられたみたいでミジメやん。これは何ていうか、友情の発露みたいなもんやから、勘違いせんというて。それから別にあんたには関係ないけど、私、大学で一番初めに自己紹介した男と寝るから」

「そうか」

吉本が俯いて答えたので、私は奴の表情を読み取ることが出来なかった。

本当にこいつは、私が誰に抱かれても平気なの？

「じゃあ、バイバイ」

私は立ち上がって言った。

「うん」

「本当に本当にバイバイ」

私は少し歩き、振り向いて言った。

「ああ」

「吉本！」

「……」

「アホ！」

私は怒鳴って、山道を駆け下りた。

『うすらとんかち、マヌケ、グズ！』

私は吉本がすぐ追いつけるようにスピードをセーブして走ってやったのに、奴は追ってこなかった。めっちゃくちや腹が立って、めっちゃくちや泣けてきた。

私は吉本を置いてけぼりにして、泣きながらバイクで帰宅した。ヘルメットのシールドが涙でやけに曇った。

卒業まで私は吉本を無視し続けた。

しかし態度とは裏腹に、吉本と同じ大学の法学部を受けて合格し、奴も医学部に入学が決まった。もちろん本命のボストンの大学にもきっちりと合格している。表向きはアメリカの大学へ入学すると、母親と教師には告げた。

私は卒業生代表に選ばれ、晴れて首席で高校を卒業した。

最後の日くらい、うすらとんかちは声をかけてくるかと思っただけで、ただ私の周りを遠巻きにぐずぐずと低回するだけで、何も言ってこない。私たちは一言も話さず、遠くから見つめ合うだけだった。

私はアメリカにゆくことを決心した。

帰宅してベッドで泣いていると、私の側にリンがふわりと座った。小さなマーガレットの花のような香りが私を包んだ。

リンは私が幼い頃から、こんな風に泣いていると頬を舐めたり、しめった鼻で耳たぶをくすぐっていつも慰めようとしてくれる。リンは小さな手で私の頭を撫でながら、ゆっくりと口を開いた。

ミユウ、私はあなたを守護する麒麟だから、あなたが選びとろうとする未来に干渉してはいけないの。

だから何が正しいとか、何が間違っているとか、どうすべきであるとか、口にはしてはいけない。だから今日は物語をお話してあげる。遠い遠い昔のお話。星々が生まれて、また死んでゆくような遠い遠い昔のお話。

昔々あるところに、それは美しい金色の長い髪をもった少女がおりました。

少女は心の清らかな孝行娘で、故郷の野山で美しい草花を愛でるのが大好きな娘でした。

少女が山に入ると、動物たちは少女に逢いにたくさん集まってくるほど、少女を慕っておりました。少女は動物たちと野山を駆け回って、美しい乙女に成長してゆきました。

少女は幼い頃に母を病で亡くしておりましたが、寂しさを微塵も見せない強い子でした。

いつも背筋をぴんと伸ばして、空を見上げることを忘れない健気な子でした。

少女の父はその地方を代々治める立派な領主でした。少女は父をとても誇りにしており、故郷の人々を家族のように愛しておりました。

少女は成人すると父の跡を継いで、領主となりました。そして王に乞われ、軍隊の指揮官となりました。

彼女の家系は、代々故郷の国を護った英雄を、数多く輩出した家柄だったからです。

彼女も戦争に天賦の才能を持つておりました。

死を恐れぬ不屈の闘志と勇気を持ち、全ての兵隊から慕われる將軍になりました。立てる作戦は水も漏らさぬほど周到で、立ちほかかる敵の命を容赦なく奪いました。

彼女は自らの王と故郷のために、自分の仕事を黙々と遂行しました。武人だった彼女の先祖が代々そうしたように、戦いを命ぜられると、彼女は必ず指揮する軍勢を勝利に導きました。

何年も何年も、彼女は魂を削って戦い続けました。

あと一国を残して、敵を全て骨にしてしまうまで戦い続けました。彼女の心はすっかり擦り切れ、幼い頃に駆け回った故郷の野山に帰りたいと強く望んでおりました。

そんな折に、彼女は恋に落ちました。あろうことが、相手は彼女の王の宿敵である敵国の英雄でした。

その男は兄の王と呼ばれておりました。

兄弟の王と戦場で幾度も知略を尽くして戦ううちに敬意が芽生え、单身忍び込んで、自らの命を狙った兄の王を彼女が見初めたのです。

彼女は一計を案じ、兄弟の王に最期の戦いを挑みました。そして見事に勝利しました。

將軍としての彼女は戦死し、ただ一人の女として、兄の王と誰も知らぬ土地で生きることを彼女は望みました。

愛した故郷を捨てる決心をするほど、兄の王を愛していたのです。

兄の王と彼女は互いに愛し合いましたが、兄の王はどうしても弟の王や故郷の人々を見捨てるのが出来ませんでした。

彼女は兄の王の手で首を打たれ、兄の王は彼女の後を追って死に

ました。

そこでこの話はおしまいです。

救いの無い物語でしょ。

誰も幸せになることが出来なかった物語は、この世界にはたくさんあるのです。

でもミユウは、今この世界に生きているミユウは 自分の望むように生きて欲しい。

私は自らが滅びることになっても、あなたが幸せになれるように、護り続けます。

あの美しい星の動物と自然を護り、愛した少女のように、ミユウを死なせたりしません だから安心して。

暗闇の中の光を目指すように進んでいいのです。

背筋をまっすぐ伸ばして、空を見上げるようにあなたは生きていいのです。

眠ったようですねミユウ。

私がずっと側にいるから、安心してお休みなさい。

裕晶 2

大学への入学式の前日、弁護士の林さんが神戸にやってきた。

僕たちは新神戸駅に近い喫茶店で待ち合わせをした。姉の葬式以来の再会だった。

「裕晶君、医学部への入学おめでとう。瑠璃さんの最期の遺言を果たしに来ました」

林さんは僕に小さなダンボールの小包を手渡した。包みをやぶると「幸福の月」と題された母の小説と手紙が出てきた。

「この本は未発表の瑠璃さんの小説です。君のために書いた小説なのだそうです。」

故人はその作品の扱いを完全にあなたに委ねています。

瑠璃さんの言葉を借りると、焼き捨てようと、公園のゴミ箱に捨てようと、あなたの勝手なのだそうです。

もし発表されることを望むなら、契約等の事務的な手続きの一切を私が代行します。

では瑠璃さんからの伝言を正確に申し上げます。

『それはキミと私の物語。あったことかもしれないし、なかったことかもしれない。』

裕晶、私は母としてキミに未来を掴んで欲しいと望んでいます。

キミを誰よりも愛しています』故人からの伝言は以上です」

僕と林さんは固い握手をして別れた。僕は自室で母からの手紙を開封した。

親愛なる裕晶へ

この手紙をあなたが読んでいるということは、私はキミの側にはもう居ないということになりますね。

大人に成長したキミを見られなかったことが、とても残念です。元気ですか？ ちゃんとご飯は食べていますか？

少し、私の昔話を書いてみます。

私には物心が付いてから、ずっと繰り返し見る悪夢がありました。悪夢は18歳の頃に、ある悲しい出来事があったからは、一つの記憶のように、より鮮明な形となって私を苦しめていました。美しい二つの蒼い月が夢に現れる度、哀しみで心が壊れそうでした。

私は何かに憑かれたように物語を書き、夢に出てくる悲劇に抗いました。

世間知らずの私に出来ることは、ただそれしかなかったのです。もうこのままでは自分が壊れてしまうと思った時、あなたを授かりました。それから蒼い双子の月は、全く夢に出てこなくなりました。キミが私を救ってくれたのです。

この物語は、その夢での出来事を綴った物語です。結末は私の見た夢と全く違いますが、おそらく私の遺した物語の中で、最も悪い評価を得ることでしょう。でもそんなことはどうでもいいのです。私は、自分とキミの為だけに物語を書き続けていたのですから。

18歳の裕晶、今キミを愛してくれる女の子はいますか？

私はあなたの年に忘れられない恋をしました。

私が悪夢の話をしたら、その人は笑い飛ばしてくれたのです。
「生まれ変わりがあるかなんて分らんけど、前の人生を忘れてる
ってことは、そういう必要があるからやないか。過去なんかはどう
でもええ、今の人生を精一杯生きればええんや」
そう言って、その人は笑ってくれました。

そんな風にキミを諭し、微笑んでくれる女性がキミを愛してくれ
ることを、心から願っています。

この物語を手に行っているキミにとって、この物語が必要ないもの
であることを祈っています。

裕晶、キミにとっても感謝しています。

キミがいてくれなかったら、私は息が出来なくなるくらいの孤独
や憎しみで押し潰されていたでしょう。

でもキミに出会えたおかげで、全てはキミを息子として授かるた
めの試験だったのだと、自分の人生を祝福できるのです。私が人生
で出会った全ての人々を、愛おしく振り返ることができるのです。

私の息子として生まれてきてくれて、ありがとう。

愛しています。

僕は小説に目を通すことなく、その日のうちに「幸福な月」を庭
で焼いた。月が美しい夜だった。

今、僕は入学式の会場でパイプ椅子に座り、清家のことばかり考えている。

清家が自己紹介する男のこと、そしてその時の清家の表情を。あいつはくるくると表情を変えて、楽しそうに自分の身の上話をするのだろうか？

総長や、各学部長の入学の祝辞は何も耳に入ってこなかった。

その後チアガールと応援団が華々しく演壇に登場して、全員で校歌を斉唱した。ぼそぼそと呟くように歌いながら、卒業するまでにこの歌を覚えられないだろうと思った。

周りには、希望に瞳を輝かせた同級生が、うんざりするくらい座っている。彼らは皆、誇らしげな表情をしていた。

父と母は仕事を休み、一緒にこの会場へ来ることを望んでいたけれど、やんわりと断った。

自分がこの大学への入学を、本心から喜んでいることを知られなくなかったからだ。僕は銀色の眼鏡と水色のトパーズの指輪だけを持って、一人でここに座っている。

僕はもう一度、周りの人々の顔を見渡した。

これから彼らと同じ時間を過ごし、高校のクラスメイトと同じように、また薄っぺらい、当たり障りのない付き合いをしてゆくことだろう。しかし僕の心に入ってくる人間は、もうおそらく一人もいない。

振り返って考えてみれば、高校生活が穏やかに輝いていたのは、清家がずっとそばにいたからだ。クラブ活動が続けながら、この大学に入学出来たのも、清家とずっと競争していたからだ。

大切な親友を失ってしまった。

いや、そうじゃない。もう自分の気持ちを誤魔化すなよ。裕晶、おまえはもつと大切な、かけがえのない人を掴みそこねたんだよ。

僕は激しく嫉妬した。清家が自己紹介する男に対して。

そんなことをぼんやりと考えているうちに、いつの間にか入学式は終わっていた。

駅へと向かう人混みの中をゆっくりと歩いた。四月の空の日差しは柔らかく、それまで味わったことのないほど、僕を切ない気持ちにさせた。道の両側には桜並木が続いている。ほんのりと色づいた花びらが風にさらわれ、肩へそつと舞い降りた。

清家に逢いたい。逢ってこの道を二人で歩きたい。

笑顔で談笑しながらのろろと歩く人々の中に、栗色の長い髪を風に靡かせて一人で歩いている、背の高い華奢な女の姿を見つけた。

心臓が痛んだ。清家だ。あの後ろ姿は清家に間違いない！

何も考えず、走り出していた。

その時、僕の胸から片時も離れたことのなかった姉の姿が消えていた。

僕は、姉がくれた命懸けの愛を忘れてしまっていたのだ。必死で人混みをかき分け、ただ清家の元へと走った。

その道程の途中、僕をそつと見つめている、姉と母の側を走り抜けたような気がした。それでも走った。

「清家！ 清家美夕！！ ミュ！！！！」

大声で叫んでいた。必死だった。女は振り向かない。走り寄って

女の肩を握った。振り返るとやっぱり清家だった。

「清家、おまえここで何してんねん。留学したんと違うんか？」
息を弾ませながら、興奮気味に話していた。声が上擦っていた。

「あなた、すごく失礼な人ですね。私は、あなたみたいな人、知りません」

清家は眉を顰め、僕を本当に初めて見るような顔で冷然と言った。

『こいつを失いたくない』

「僕は、僕は吉本裕晶、神戸から来ました」
意を決してそう言った。その言葉が何を意味しているのかを充分知りながら。

清家は固い表情を崩し、ほっとしたように優しく微笑んだ。

「私は清家美夕です。」

あなたが知らない場所、夜空に双子の月が 蒼く輝いている
場所から来ました」

清家は僕の目を見つめて、はつきりとそう言った。そして清家は
右手をゆっくりと差し出した。

姉ちゃん、ごめん 僕はミユのことを。

桜の花びらが、狂ったように風にさらわれて舞っていた。本当に
哀しかった。永遠に続くと思った母と姉への想いでさえ、この花び
らのようにいつかは色褪せ、滅びていくのだ。

絆とは一体何なのだろう？

そんな頼りないものために人は何故傷つき、苦しむのだろうか？

なんて人間とは弱い生き物なのだろう。

僕は自分を呪いながら右手を差し出し、清家の手を、自分から強く握った。

『違うよヒロ それは全然違う。』

滅びたんじゃない。新しく生まれ変わったんよ。

金の紐、愛という絆が、長い時を超えて、また一つあなたにしっかりと繋がったん。

だから自分の心に正直になりなさい』

『裕晶、たかがそんなもののために、人は苦悩し、生きてゆく。』

でもキミはそうやって自分と世界とを知ってゆく。

愛を望む者、渴望する者だけが自分だけの何かを創り出せるの』

確かに舞い散る花びらから、そう姉と母の声が聞こえたような気がした。でもそれは僕が作り出した、僕の望んだ、彼女たちの言葉なのではないだろうかと思う。

自分が立てた誓いを、自分の意志で今破り棄てていた。でもそれは仕方がないことだった。誰にもミュを渡したくなかった。たとえば僕のせいでミュが死神に命を奪われることになっても。

ミュが自分の側にいない世界のことを、もう想像することが出来ないんだ。

「清家、俺、これからピアノを習いたいねんけど。俺はおまえに一生ピアノを習いたいと思う。おまえはどう思う？」

ミユはその言葉を聞いて、目を大きく見開いた。そして静かに頷いた。涙が一筋零れ、桜の花びらが白い頬に引き寄せられるように吸い付いた。

「私、教えるの凄く厳しいよ」
「うん」

「浮気したら殺す（マジで）」
「うん」

「二人の記念日は大切にすること」
「大切にする」

「私をあの人と絶対に比べへんこと」
「うん」

「私より先に死なへんこと」
「分かった。努力する」

「私のことを世界の誰よりも、一番大切にすること」
「うん、大切にする」

「指切り」
「指切り」

僕たちはたくさんの人々が側を通り過ぎてゆく中で、指切りをしてから、抱き合って口づけをした。

周りの人々が振り返り、ざわついているのが分かった。サークル

の勧誘活動をしている大学生たちが、僕たちの姿を見て歓声をあげた。そして彼らから拍手がパラパラと起こり、終いには周りの人々全員が、歓声をあげて拍手してくれた。まるで世界中の人々が、二人を祝福してくれているようだった。

姉のことを忘れることは一生出来ないと思う。絶対に忘れてはいけないと思う。姉は僕のために命をくれた。しかしその想いを裏切って、今、心から清家を愛したいと望んでいる。

自分のことを、どうしようもなく情けない男だと思う。どうしようもなく卑怯な男だと思う。

でも僕には

ミユウ

私は最後の賭けに勝った。自分の口から、双子の月という言葉が出てきたのには驚いたけれど、でもそんなことはどうでも良かった。私は、自分が初めて心から望んだものを手に入れたのだ。吉本と口づけを交わしながら、手に入れた男の胸の温もりを感じていた。自然に涙が溢れてきて、止まらない。

私はみつともないくらい卑怯かもしれない。でもそれでいいと思う。

だって私には

『僕には』

『私には』

『君が』
『君が』

『誰よりも 必要だから』

たゆたう。

星の海、時の流れ。

わたし、私。

『今、吉本と心が繋がった。蒼い二つの月が輝いている、あの約束の場所から離れていた絆が やっと繋がった……』

吉本が驚いたように身をかわしたので、口付けは中断された。

『今の何！ 一瞬、蒼い二つの月が見えたよ！』

吉本は私の頬に付いた桜の花びらをつまみ取って、困惑した表情を浮かべている。

「ミユ、今、唐突に気付いたことがあるんやけど。ってどうしたの、

すごい、びっくりした顔して？」
「え？」

「いや、あのさ、俺のスーツにしがみついて、鼻水流しながら号泣してる子って、おまえそっくりやけど妹なん？」

「ああ、って、ウソ！ リンが見えちゃってるんだ！ えつと、この子は私の妹 ううん、姉さんなの。この子、キリンなの」

「キリン！？ 何だそれ。どうみても人間だけど……」
「それはそれは有難い、幸せを運んでくれる、聖なるキリンなの」

新しい物語が始まる。

きつと嬉しくて泣き出してしまいそうな物語が。

木漏れ日の中で愛し合う人々がしっかりと抱き合い、微笑んでい
るような物語が。

そうだよねリン。私はリンを抱きしめながら、そう祈った。

エピソード【ミユウ】

アメリカから帰国し、久しぶりに再会した二人の親友と私は食事を共にした。

「私分かるよ。裕晶くんのこと、まだ愛してるんでしょ」

「ミユらしくないやん。もう一度逢って、はつきりさせたら」

二人で過ごす理解し合えない孤独よりも、独りぼっちの方が、私は強くなれると信じていた。

しかし高熱で朦朧とした自分を叱咤し、地図を片手に、さびれた漁村にある小さな診療所をやっと見付け出した時、私はヒールを脱ぎ捨てて走り出していた。

それが答えだった。私はずっと自分を欺き続けていたのだ。

『吉本美夕回顧録 抜粋』

エピソード【裕晶】

僕たちが学生生活を過ごした時期は、全くひどい世紀の始まりだった。

二十世紀は、テロリストにハイジャックされた旅客機がツインタワーに突っ込み、人々を恐怖と悲しみに陥れて幕を閉じ、世界中でうんざりするくらいテロが起こった。

アメリカは、アフガニスタンとイラクの山野と市街地に、在庫一掃処分の爆弾を気前良く投下した。市街地には爆弾だけでなく、食料までも投下した。丁寧な「アメリカ国民からの贈り物です」と添

え書きして。爆弾には「大変お待たせ致しました。十年に一度のバーゲンセールです」とでも書いてあったのだろうか。

とにかく、もう正義や理念で、物事を簡単に論じられる状況ではなくなっていた。むしろ投機的市場経済システムの猛威と、歴史的に積み重なった、お互いの憎悪の問題と言った方が分かりやすいのかもしれない。

どこかの国の大統領は、テレビでスポーツ観戦中にスナック菓子
を喉に詰まらせて気絶し、「母さんの言うことは、良く聞くべきだ」と教訓を語った。（ちなみにその国の兵士は、まだ軍事作戦を継続中だった。彼は兵士の母親たちの気持を少しでも考えたことがあるのだろうか？）二十一世紀における名言集の筆頭を飾るに相応しい、愚かだが素晴らしい言葉だった。

僕とミユは京都にある同じ大学に進学した。僕は医学部、彼女は法学部へと。ミユは大学を卒業すると、そのまま大学院へと進んだ。僕たちは21歳の時に、神戸にある教会でささやかな結婚式を挙げ、29歳の春に離婚した。

僕は風の岬の寒村で開業することを決断し、彼女と一緒に暮らすよう求めたが、彼女の答えはノーだった。

ミユは僕の提案を拒否し、かつて僕の母が通っていたボストンの大学院へと留学した。

僕たちは決して自分の生き方を譲らなかった。

たとえそれが離婚という形を取ったとしても。

でもそれは仕方がないことだった。

ある意味僕たちは、お互いを変化させるために出会ったのだから。

互いが混ざり合い、新たな自分の色を作り出した時、即ち、僕たちの精神がさなぎから蝶に変わった時、僕たちが一緒にいる必然性は失われてしまった。そして僕たちには、自分だけにしか出来ない

ミッションがあった。

その頃の僕たちは、お互いに犠牲と献身を求め合っていた。いざとなれば、相手がきつと譲歩してくれるだろうと信じていた。でも僕たちは折り合うことが出来なかった。

離婚してから僕たちは一切連絡を取り合わなかった。それっきり、ピアノの練習はしなくなってしまった。

一年後、ふらつとミュガリンと風の岬にやってきた。彼女は目標を達成し、政治学のp h D（博士号）を取得したらしかった。

「やることはやったと思ったら、ひどい風邪をひいたん。信頼できる医者つて、あなたしか思いつけへんかった。だからボストンから飛んできたん」

彼女は珍しく、しおらしいことを言った。

診療所の玄関の前に立つ彼女は何故か裸足で、本当にボストンから飛んできたようだった。取り敢えず体温を計ってみると、40度近い高熱だった。

「アメリカにはいっぱい腕のええ医者があるやろ。相変わらず無鉄砲な奴やな。おまえ、風邪を馬鹿にしたら命取りやぞ」

なんだかひどく腹が立った。それは愛する者が帰ってきた安堵の裏返しだ。

「この熱は、あなたにしか治せへんって分かるん。なんでって、裕晶が原因やから」

『俺が原因？　って、なんの言いがかりやねん』

「ずっと寂しかった。寂しくて寂しくて死にそうやった。裕晶は寂しくなかったん！ 私の性格を知ってるんやったら、なんで一度くらい逢いにこうへんかったん？　せめて手紙くらい寄こしたってええでしょ！」

ミユは大粒の涙をぽろぽろ流して泣いた。リンも僕にすがり付いて泣いている。

僕は大学の入学式の日のことを、大切なものを手に入れたいと、心から望んだ日のことを思い出した。

なんで僕が好きになる女は、こう予測不能な行動ばかりするのだろう？

それとも行動が予測不能だから好きになるのか？

でも確実に一つ言えることがある。

彼女たちは、誰よりも無垢な心の持ち主だ。

「手紙は何度も書いたんや」

正直に言った。お互い、意地の張り合いはもうたくさんだ。命の無駄遣いだ。

「でも出されへんかった。俺もずっと寂しかった。ごめんな。当分ここにおれよ。おりたいと思うまでいい。

俺は死ぬまでずっとここで暮らすつもりや。それは変わらへん。でもおまえは自分の飛びたい場所、ニューヨークでも、北京でも、月でも羽ばたいてゆけばいい。そして羽根を休めなくなったら、リンとここに帰ってこいよ」

ミユはその言葉を聞くとハンカチで口元を塞ぎ、声を押し殺して僕の胸で泣いた。

僕たちはその日、抱き合って眠った。そしてお互いに起こった出来事をいつまでも語り合った。ミユはすっかり僕に風邪を感染させ、翌朝には昨日の高熱が嘘のように、けろっと全快した。

一瞬何かの「謀略」かと疑ったが、しかし世の中には、きっと素敵な企みだってあるに違いない。僕はそのまま高熱で寝込み、ミユが僕の看病をすることになった。風邪という病が世界に存在するの
も、あながち無駄とは言えないんだと思った。

翌年娘が二人生まれた。一卵性双生児だった。

僕は人生の不思議な巡り合わせを感じずにはいらなかった。娘を萌音^{モネ}と歌織^{カオリ}と名付けた。

ミユは何も言わず微笑して賛成してくれた。僕たちに言葉など必要なかった。

しかし僕のくだらない意図は見事に外れた。歌織は音楽に興味を示し、萌音は妹よりも物語を好んだ。

妻と僕は、風の岬で一緒に一年間育児をした。しかし育児は、妻にとって魅力的な仕事ではなかったようだ。

彼女にとって育児は、あまりにも単調過ぎたのだろう。

彼女は様々な煩雑な作業と、タフな交渉を必要とする仕事が得意だったし、またそういった仕事に魅せられていた。そして何より、彼女はひどく何かを恐れ、焦っているようだった。

それが一体何なのか、彼女は僕に決して話そうとはしない。多分それは彼女に課された、彼女だけが出来るミッションなのだろう。

彼女はロースクールに通い、司法試験の勉強を始めた。よって育

児は、専ら僕の仕事になった。育児は僕の喜びになった。

僕はどうやら育児の才能があるようだった。娘たちの姿を見てみると飽きることがなかった。毎日が瑞々しい発見の連続だったと言ってもいい。手塩にかけて育てるとは、こういうことなのだと、しみじみ思った。

娘たちが4歳になる頃、妻は修習を終え弁護士になり、僕の知り合いである林弁護士の事務所に単身赴任することになった。

それからのミュの『華麗なる野望の日々』は、彼女が首相を辞めて政治家を引退したら（死ぬまで引退するか極めて疑わしいが）、いつか回顧録を書くだろう。それは彼女の仕事であって、僕の仕事ではない。

その頃には、僕は『首相のダンナ・オトボケ育児日記』でも出版しているかもしれない。

何故なら僕は、診療所の待合室にある女性週刊誌によると、『ヨクデキタ旦那？¹』というなんとも不名誉な称号を、二年連続で獲得しているらしかった。

週刊誌に載っている僕の写真は、どこで撮られたのかはつきりと分らないが、ぼんやりとした間抜け面に写っていた。

マスコミのささやかな悪意を感じずにはいられない、極めてハートフルなエピソードだ。

自室の携帯端末を覗くと、首相閣下から直々に映像メールが入っていた。首相から映像メールが入るのは、おそらく各国の元首と我が家だけだろう。

「ハニー、ここは馬鹿ばかりでとても疲れるわ。来週、北方四島

返還の記念式典がそっちの方であるから、久しぶりに家へ帰ります。この頃ちよつと欲求不満気味だから、家に帰ったら色々なことをしてネ。私もいっぱい色々なことをしてあげる。

えっと、それから歌織の東京への転校の件、考えてくれました？ そのことも二人で話し合いましょう。それではまたね ミ」

上さんは少々疲労困憊気味の様子だ。

今晚は、ネタにキレが欠けている。

今度官邸に、あいつの嫌いな臭いニンニクでも、大量に送りつけてやるとしよう。

正直、歌織を東京には転校させたくない。

今は歌織と萌音にとって、心を育てる大切な時期だからだ。誰かが愛情を持つて、ずっと側で見守つてやらねばならない。二人は気が向いた時に可愛がるペットではないのだ。

しかし上さんの話では、歌織はしっかりとしたピアノの先生について習うべき時が、既にやって来ているそうだ。その件については、娘たちとじっくりと話し合おう。そして最終的には、子供たちに決めさせればいい。

自分でも気持ち悪いと思うが、おもわず含み笑いをしてしまった。「ミ」ってなんだよ。プラカードで芸が細かい奴だな。あいつの政策担当スタッフ、小道具担当とかいるのか。くだらなさが突き抜けてるから、いつもジワっとツボにくる。

毎晩の映像メールの小ネタが、あいつなりの愛情表現なんだろう。政治の事は何も分からないし、特に知りたいとも思わない。しかし、おそらく僕だけが知っている国家的機密事項がある。あいつの天職は、きつとコメディアンだ。

「ミュ愛してる」と、一言映像メールを返信しておいた。

ミユ、いい年して、ハニーは止めるよな。

姉から貰った年代物のCDを取り出して、今時ちょっとお目にか
かれない、CDプレイヤーで音を出した。フルトヴェングラーのベ
ートヴィエンの第九だ。

この年になって、姉が伝えようとしたことの本当の意味が、やつ
と分かり始めている。だから姉は今の僕の姿を、きつと喜んでくれ
ていると思う。

三階の書斎の窓から、眼下に黒々と広がる海を眺める。
今日は珍しく穏やかな風が吹いているようだ。

銀色の月は風の岬を優しく照らし、波は絶え間なく漁港へと穏や
かに打ち寄せている。

窓を開けると、肌を刺す冷氣と潮の香り、そして淀みない潮騒が
そつと入ってくる。

僕は鍵をかけている机の引き出しから、銀色の眼鏡とトパーズの
指輪を取り出した。

僕は独り思う。

これから世界がどう変わってゆくか、見当もつかない。

僕の人生だって、まだ禍々しい何かが、暗黒の口を開いてじつと
待ち受けているのかもしれない。

それは自分に課せられた十字架だ。その訪れをじつと待ち受ける
しかない。

でも、娘たちに待ち受けている物語が、穏やかで美しいものであ
って欲しいと、心から思う。

きつと幸福の月が二人を護ってくれる、そう信じている。

娘たちの幸福な未来だけを月に祈ろう。

まだ生きている心の半分の、ありったけの愛を込めて。

【了】

037 (後書き)

ありがとうございました。

中山愛望 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645r/>

ノクターンブルー ～蒼月夜想曲～

2011年7月1日06時20分発行